軍を募り、就中日本の信用程度を以てしては到底對抗するを得ざる無限の財力を動かし得るのである。果して然らば日本の爲には時は最も重要なる要素である。然らば日本は勇敢なる攻擊を實施するものとして、何れの地點に向ひ、如何にして之を爲さんとするか?。日米兩國の遠隔せる距離は日本をして敵に致命の打擊を與ふることを不可能ならしむる。近世の戰爭に於ては距離は作戰の全計畫を左右し、彼我兩軍の何れなるを問はず、之を有利に利用する者は可なりの正確を以て我に有利なる決心を爲し得るものである。斯くて茲に戰局を左右すべき充分なる打擊を敵に與ふるに先ち、海權の管制は必要缺ぐ可らざる條件となるが、然も斯種の管制は既往の戰爭に於て未だ嘗て見ざる廣大無邊の海洋に於て有効であらねばならぬ。這次の戰爭に於ては兩交戰國は何れも其局部的海面の爭ふ可らざる管制を主張し得るのみならず、同時に又隣接せる海洋の廣義の部分に對しても之を爲すことが出來る。見よ有力なる戰艦隊が布哇を中心として

行動する限り、東太平洋は米國の手中に在る。米國艦隊はアリユーシヤン群島及サモアの根據地よりする輕艦艇の援助を得て、布哇の中心點より米本國に向ふ西方よりの總ての交通線を管制するを得べく、苟も此艦隊にして現存する限り、日本は布哇を占領するを得ない、況んや米本國に對する攻擊に於てをや。然しながら之と同時に二三の敵艦が單獨に行動し、又は劣勢なる遊擊隊に依て行はるゝ侵寇の危害に對しては之を全然豫防し得ることは不可能なるも、此種作戰の軍事上の結果は如何なる場合に於ても重大なるものでない。次に之を日本側より見るも、日本は兵力を以てする敵の直接の攻擊を恐るゝの必要はない。日本は西太平洋に進出せんとする米國艦隊の爲に唯一の根據地たるべき比島とグワムを迅速に奪取して斯る可能性を失はしめた。日本が少くも絶對に西太平洋を管制し得るは恰も米國が東太平洋を管制するとと同一である。例へ日本艦隊は數に於て劣れりとするも外方の哨線を哨戒せしむべき無數の輕艦艇を持て居る。加

之ならず日本は此等の輕艦艇用として其掌中に若干の前進根據地を持て居る。卽ち日本本土を距る二千浬の半徑內には比律賓、マリアン、小笠原島の如き優良なる前進根據地あり、尙其東にはカロリン、マーシャル群島ありて、容易に潛水艦及他の小艦艇用の根據地に改造する事が出來る。開戰初頭に於て日本は北東よりの航路を監視せしめんが爲め、之が目的に便利なる樺太の一港に二隻の輕巡洋艦、一個の潛水隊及飛行機の一隊を配備した。一言にして云へば日本は西太平洋の有ゆる關鍵を握れるもので、敵にして苟も之に侵入せんとならば損害を豫期せねばならぬ。以上は實にグワム陷落の直後に於ける太平洋の兩側に於ける日米兩國の對勢である。

日米兩國の此の二つの監視區域の中間に、北方に於てはアリユーシヤン群島、南方に於てはサモアを境とする幅約一千浬、長さ四千浬以上の所謂中立海面が在る。兩交戰國の軍艦にして燃料貯藏力の大なる艦は勿論此中立海面を航過するを得るも、之を爲さんとせば忽ちにして集中せられたる

優勢の兵力を以て相互に攻擊せらるゝの危險がある。抑も艦隊の主作戰は設備良好なる根據地のみより之を實施し得べく、之を中心として艦隊は其隨伴する最小艦の有する航續距離內だけ敵に對して作戰し得るのである。日米兩海軍に屬する大艦の總ては太平洋を航過するに充分の燃料を持て居る。併しながら玆に注意すべきは平時と戰時の航續距離には差違あるの一事である。平時に在ては軍艦は全速力の二分の一又は三分の一に相當する所謂『經濟速力』を用ひて燃料の節約を圖るも、戰時に在つては斯る遲航を許さずして、若し遲航しつゝ直行の針路を取らんか、敵潛水艦に對して良好なる目標となる。玆を以て敵の潛水艦ある海面に於ては高速を以て屢々針路を變ずる所謂『蛇航運動』を爲すの必要があるので、燃料消費量の多大なるは勿論である。各軍艦の正確なる航續距離は之を公表すること稀であるが、主力艦と巡洋艦は戰時の狀態に於て航行を繼續するものとして、何れも四千浬の航續距離を有するとするは安全であるから、最近

の根據地よりは二千浬以上の距離に行動するを得ない。若しそれ艦隊の集合速力に至ては燃料貯藏力の小なる驅逐艦を伴ふが故に一層制限せらるゝを免れない。勿論軍艦は海上に於て燃料を補給し得るも、之が爲には關係艦船の速力を減ぜざるを得ずして、玆に敵潛水艦の好餌となるの不利がある。況んや主力艦は驅逐艦の掩護なしには出動するを得ざるに於てをや。以上總ての事情を考慮する時は、日米兩海軍は何れも其根據地より一千浬以上の距離に作戰し得ざることが明かとなる。而してこれ實に渡洋作戰に於ける直接的攻擊の可能如何を支配した原則であつたのは逐次に說く所に依て明かであらふ。

二、米國通商の打擊と平和論

若し日本にして敵に重大なる打擊を加へんとならば、先づ第一に作戰目標に容易に到着し得る範圍內に於て其根據地を獲得せねばならぬ。然も如

何にして之を得るか？。反對に米國若し攻勢作戰を行はんとならば西太平洋に根據地の便なくんば之を爲すことを得ない。されば多くの豫言者等が太平洋戰は結局に於て速に終るべしと觀察したのも驚くに足らない、彼等は曰く、日米戰爭の勝敗は理論上之を決すること不可能なるを以て速に和を講ずるに加かずと。此種の意見は弘く米國內に行はれ、就中新聞紙の一部は戰爭を永引かしむるも何等の得る所なきを以て和議を申込むべしと慫慂しつゝあつた。殊に戰爭に基因する經濟上の結果をしみ〴〵と感ずるに至て此種の平和運動は一層の力を得た。顧みるに戰爭前の十年間極東との米國の貿易は迅速に發展し、千九百三十年に於ては米國の全海外貿易の大部は極東方面との間に行はれた。然るに開戰と同時に此の有利なる貿易は杜絕し、極東の諸港には最早米國の商品を運搬するを得んも、他國論中立國の船舶に依り支那の市場に米國の商品は其影を絕つた。勿は其競爭者たる米國が除外さるゝや否や、已れ代つて之を取り、以て其利益

を收めんとするは明白である。これ實に米國にとり重大なる形勢で、特に近年米國の過剰なる商品が益々亞細亞の市場に依賴するに至りしを以て然りとする。之より嚮千九百二十一年中有名なる米國の一經濟家は、歐洲戰爭の結果同方面が購買力を失ひしを以て、之に代へんが爲め極東方面への貿易を發展せしむるの必要を力說して曰く、『米國の製造業者はこの七年間の要求に應ぜんが爲めに擴張したる製造用機械を常に運轉せしめ、且米國人の誇りとする生活の標準を低下せざらんが爲めに、總ての米人勞働者を失業ならしむる必要上、將來に於ては今日よりも尙一層大量の製造品を輸出せねばならぬ。之が爲には極東方面は最も有望なる未開地である』と。不幸にして彼の言は米人の聾耳に入らなかつた。最も支那に於ける商業上の位置に就ては米國は其指導者たるを得て、米國の資本は惜氣も無く同國の工業界に流入し、最も豐富なる利權の二三は米人の手中に入り、米支間の經濟關係は益々密接となりつゝあつた。然も今や過去十年間の熱

心なる努力は戰爭の爲に水泡となつたのだ。勿論斯る危險は一般の米人には甚だ不完全に知られて居たが、其後の事件は海上の主戰舞臺に於ける此外見上の停滯は、太平洋の全部に及ばざることを間もなく米國人に知らしむるに至て一層の痛感を與へた。

此時に當り極東方面との米國貿易の大部は主として中立國旗の下に行はれたので、日本との戰爭の爲に全然混亂せしめらるゝことは無つた。日本海軍の作戰圖內に在る米國旗を飜へせる總ての商船は、戰爭開始後の二週間內に或は拿捕され、又は上海、香港の如き中立港に驅逐された。然るに其數は割合に少數であつたので、此等の喪失又は停滯は戰爭の進行上には何等著しき影響を及ぼさなかつたと云ふことが出來る。比島に於て拿捕されたもの、並に其後の作戰中外海に於て遮斷せられたものを除き、日本の手中に入つた商船の數は合計十一隻で、其船體及積荷の價格は約二百五十萬弗である。日本が自己の屬領と認むる滿洲の營口に於て拿捕した米國

の一汽船は非難の的となつた。日本は又芝罘に於ても米國の一汽船を拿捕せんとしたが、支那の地方官憲は北京政府の命に依り强硬に反對した。支那は遂に之を國際聯盟に訴へたので、東京と北京政府間には幾つかの辛辣なる文書が交換されたが、日本の我儘なる行爲に對して中立國の非難益々大となるや、日本も遂に厭や〳〵ながら屈服した。抑も國際聯盟は一時は世界の輕視する所となつたが、此爭議の解決に成功するや幾分其名聲を恢復した。支那は遲滯なく此教訓を利用せんとして、爾來日本に對する中立國の利害問題起る毎に常に之を利用した。

抑止された米國商船の中最も價格あるものは香港に遁入した數隻である。日本海軍省は之を遁走せしめて拿捕せんと欲し、其巡洋艦には同港に接近す可らずとの嚴命を下した。然るに香港駐在米國領事は銳敏にして東洋人の心理に通じて居たので、最低最老朽の一船を撰出して試驗的に遁走を試みんことを建議した。玆に於て香港と比律賓及北ボルネオ間の地

方的貿易に從事しつゝあつた二千噸のボルネオを撰んで之に當らしめた、該船は當時バラストのみを積んで居たのである。領事は船長連に向つて曰く、若しボルネオにして無事南支那海を通過し、敵の爲め何等遮斷せられずに戰域を脱出するを得ば、殘餘の大型快速諸汽船も遁走を決行すべしと。然るに日本の通信網は實に有效であつた、即ちボルネオは領海を出づるや間もなく、日本の一潛水艦の爲に停船を命ぜられた。此潛水艦は米船が命に應せざるを見るや船首の前方に一彈を發射したが、此砲聲を聞きたる英國の一驅逐艦は現場に急航した。斯くてボルネオは日本軍艦の爲に拿捕され、爲に殘れる米船の船長等は領事の注意を用ひて拿捕の難を免るゝことを得た。開戰後の數週間日本の巡洋艦は中立國の商船内に戰時禁制品たる米人の貨物もあらんかと鵜目鷹目的に臨檢捜索した、之に對して米人は間もなく中立國の送荷人、荷受人たるを巧妙に裝ふて之を避くることを案出したが、時としては捜索の結果眞相を看破さるゝこともあつた。然る

に日本人は戰爭の進行につれ有力なる中立國人を怒らしむることの不利なるを覺りて、敵の所有船なること明白なる場合の外は貨物を抑留せざることに間もなく改めた。

三、日本潛水艦の活躍

前章に述べた如く、日本は日光丸事件を好機として潛水艦を通商破壞用に使用することを躊躇しなかつたが、此種の行爲は其後續々として現はれて來た。戰爭切迫と同時に米國の全商船は戰域を遠廻りする樣警告されたが、數隻の米國商船は海戰初頭に於て既に日本の水上艦艇や潛水艦に監視された。然るに日本人は獨人の故智に倣ひ潛水艦を通商破壞用に用ひしも、獨逸潛水艦長の採れる不法なる行爲を改め、新國際公法に依り細心の注意を以て之を使用した。四月二十八日に拿捕された米國商船オリエントの如きは其適例であるから左に之を述べて見よう。

オリエントはシドニーより桑港へ航行中ワシントン島の西北約百五十浬なる太平洋の眞中に於て日本潛水艦呂五十一號の爲に發見された。此時潛水艦は該船の前方約二浬にあつた。潛水艦は黑色火藥を發射して停止せよとの信號としたが、米船は速力を增し、針路を變じて自船の黑烟裏に逃走せんとした。然も潛水艦の速力優れる爲め此運動は失敗に終つた。潛水艦は汽船の前方に二彈を發射したが、米船は尙も停止せないので遂に信管を有せざる實彈數發を同船目懸けて發射した。偶ま其一彈は煙突に命中したので、船長も遂に機關を停止し、乘員に端舟に乘移る準備を命じた。茲に於て潛水艦は該船の數百碼以內に接近し來り、砲を該船に向けつゝ捕獲隊を派遣した。サンドストロム船長は船舶書類を押收され、武裝兵を配せられた上、日本艦隊の前進根據地の一なるマーシャル群島のヤルート迄航行すべしと命ぜられ、且遁走せずとの宣誓に記名(サイン)すべく、之に應ぜざれば其船を擊沈し、乘員は端舟と共に海中に放棄すべしと告げられた。船長は

暫らく遲疑した後右の宣誓に應じたが、此船長の行爲は其後米國内に於て非難の的となつた。其數日後同方面に於て他の日本潛水艦はホノルゝよりツツイラに向ふ米國海軍の貨物船バスを停船せしめた。這回は該船は有效なる抵抗を爲し得ざるに拘らず（唯だ二門の機砲のみを備へて居た）能迄遁走せんとしたが、遂に敵彈の爲め機關を破損するに及んで漸く停止した。之が爲め五名の船員は斃れ、他にも尙數名の負傷者を出した。此等の負傷者は一旦潛水艦に收容されたが、治療を施したる後、其他の船員と共に、偶ま其附近に現はれた英國汽船に移された。バスは機關の修理不可能なるため海底に沈められた。

斯くて最後には四月三十日に至り所謂バーシング號事件なるものが起つた。此事件は日本人の著しき義俠心を示したものであるが、何が故に斯る擧に出たかの動機に就ては當時其眞相を知られずに居た。バーシングは米國船舶局に屬した一汽船であつたが最近政府の運送船に移籍され、其

前日なる二十九日にホノルゝを出でて桑港に向ひつゝあつた。同船には米國陸軍と要塞砲兵旅團に屬する二千以上の士官あり、其大部は米本國で募集された新陸軍兵の教育に當るもので、此他保養の爲め歸國を許された將卒の一團あり、又士官の妻子若干も乘つて居た。該船の桑港までの航海には別に護衞艦を附せなかつた。蓋し戰爭破裂以來有ゆる出入航路は哨艇を配して警戒せしめられたが、該船の航路には敵艦出沒する筈なしと考へられたからである。玆を以て該船は何等危險の豫報を受けずに單獨に航行したのである。然るに三十日の未明後間もなく布哇眞珠港の無線電信所は該船よりの次の信號を受信した、曰く『我れ日本潛水艦に追擊されつゝあり、敵は速力大にして我に向ひ發砲しつゝある』と。其後何等の通信も來なかつたので、此信號に接したホノルゝの米人等が如何に驚ひたかは云ふ迄も無ひ。該船は政府の運送船であるから合法上の拿捕物たるは疑ひなく、從て乘員の安否が非常に氣遣はれた。玆を以て二隻の大型水上飛

行機と數隻の驅逐艦を救助の爲め直に派遣したが、時機遲く潮に合ひそうにも無つた。其後一時間にして次の第二の電信が來り掛念は茲に始めて消散した、曰く『本船釋放され航海を繼續しつゝあり』と。日本人は斯る貴重な捕獲物を釋放しそうにも思はれないので、此の喜ぶべき通信は驚愕と疑念とを以て混ぜこぜになつた。然も該船は遂に無事桑港に到着したが、此の特に注目すべき話は艦長自身の語を以てすれば次の通りである。

『ホノルゝを出でより十四時間にして我見張りは右舷船首に一隻の潜水艦を發見した。此潜水艦は頗る大型のもので、何人も始めには味方のものと思つた、何となれば日本を距る斯樣な遠距離にまで敵の潜水艦が來ようとは信じられないからである。然るに該艦は我船橋を飛越へて一彈を發射したので敵艦なることが判つた。我か速力は最大十五節で、敵は十八節であるから到底遁走し得る見込は無ひ。然も余は遁走を試みんとして轉針し、全速力を命じたが、敵彈は我艦首數呎の海上に落下し、爲に我前甲板は

水烟を蒙つた。斯る狀態に於て尙も遁走を繼續せんか、次には敵彈我船に命中すべく、斯くては我旅客が危險となる。茲を以て余は停止することに決心した。斯くて潜水艦は迅速に接近して來たが、見れば其長さは三百呎もあり、且甲板上には二門の重砲を備へて居る。次で一名の士官は四名の武裝水兵を率ひて船内に乘込み、船舶書類を示さんことを命じた。余は其命に應じたが、士官は次で總ての乘組員は船員たると旅客たるとを問はず、甲板上に整列すべきを命じ、且余に告げて云つた、『此船は撃沈する筈である、貴下は多數の端艇を有するから、總ての人が戰爭終る迄軍務に服せざることを宣誓するに於ては端艇に乘組んだまゝで釋放せん』と。茲に於て余は天候は險惡ならんとするの兆あるを指摘し、如何なる場合に於ても端艇に人員を過載するの危險なることゝ、船内には四十名以上の婦人小兒あることを以てした。之を聞た士官は曰く『よし！　若し軍務に從事せないと云ふ宣誓をするならば我艦長は恐らく此船を釋放するであらふ』と。

余は之をワーナー陸軍大佐に告げたが、大佐は即坐に宣誓を承諾したるも、他の者には之を爲すことを禁じた。日本の士官はこれ迄は親切であつたが、之を聞くや否や忽ち怒つて爾後の命を仰ぐ爲め潛水艦に歸つた。數分にして歸來するや彼は『大佐と他の高級士官五名は捕虜とするも、他は船と共に釋放すべし』と告げた。今は抵抗は無用なりと知つたのでワーナー大佐はヘンダーソン、ホフマン二少佐、ロングマン、シールボールドの二大尉と共に進んで捕虜たらんことを申出でた。此等の人々は小しばかりの私有品を携帶するに必要な時間を與へられた後、商船の端艇で潛水艦に送られたが、彼等は潛水艦が見へなくなる迄甲板上に立つて帽子を振りつゝあつた。同時に敵の捕獲隊は我船の無線電信機と總ての寫眞機を押收した後船を釋放したので吾人は其儘航海を繼けた』と。其後に至つて判明したが、該船が釋放されたとのホノルゝへの第二の無線電信は此日本の潛水艦長が發信したものである。斯の如きは此戰爭中稀に見る親切の行爲

で、該船の安否を氣遣つた者等が著しく賞讃した所である。右の潛水艦は捕虜と共に其後一ケ月目に日本に歸還した。

此事件に關しては日本の取れる人道的貿易破壞戰の方法が獨逸の橫暴政策よりも永ひ間には結局に於て結果が良好であつたと云はれたのは恐らく至當であらふ。日本の海軍々令部は戰史の研究に依て斯樣な人道的方法が中立人を怒らしめざるのみならず、追蹤された商船も始めの命令のみで却て降參すると云ふことを知つたに違ひない。實に日本人にとりては世界大戰中獨逸の採つた『無差別的擊沈』法の愚劣なるは眞實の教訓となつたのだ。

然しながら日本人の此等の親切も彼等が米國の船舶や海外貿易の上に加へた損害に對する米人の怒を和げるに足らなかつた。此等の損害は比較的に云へば輕微のものであつたが、然るも尙米國內の新聞紙は海軍は何を爲しつゝありやと絕叫し始めた。桑港の一新聞紙は曰く、『何が故に敵

艦は自由自在に我船舶を撃沈し得、布哇と米本國間との航路さへ我運送船の航海を不安ならしめて、其欲するがまゝに出没し得るか？。一見すれば彼等は桑港に直進するも吾人は之を防ぐべき何等の方法も無ひ樣に見へる。米國民は敵は戰時に惡戲を爲すこと不可能なりと欺かれて、年々多額の金を我海軍の維持に出したのであるか？』と。實に其結果より見れば寔にその通りである。果して然らば其原因如何？。這般の事情は米國海軍が其擔ふ所の任務の遂行に關して準備を缺ぐこと非常なりしに起因するものである。換言すれば米國の海上貿易を保護せんには頗る多數の巡洋艦を必要とするも、之が缺如して居たのだ。かの主力艦隊の偵察部隊となる所の巡洋艦の如きは他の何物よりも先づ第一に整備せねばならぬが、米國はそれさへ不充分であつた。近世の軍艦は商業保護の目的の爲に之を除外して置くことは出來ない。然しながら米國海軍省は新聞紙の要求に動かされて、舊式裝甲巡洋艦チャーロット、ハンチントンの二隻を修理し

て布哇と太平洋沿岸航路の警備に任ぜしめた。此二隻には所謂『未熟の兵』を以て之を補充した、蓋し艦隊の動員を完成せんが爲め海軍々人は既に極度に迄召集せられ、加も開戰初頭に海兵團に入團した新兵を海上の任務に適する樣訓練せんには少くも尙一ケ年を要するからである。茲を以て米國の商船は當分の間は自ら工夫して其安全を計るの外は無つた。勿論總ての航洋商船には世界大戰以來蓄へられて在つた豫備の砲を以て之を武裝したが、訓練ある砲手の缺乏が切に感ぜられた。太平洋に於ける米國の海上貿易は莫大にして商船の護送制度を必要とするも護送艦不足の爲め之を實施するを得ない。然も巴奈馬運河は目下の所閉塞されて居るので、米國の商船は布哇サモア航路を除き、當分の間は獨り沿岸航路にのみ限られた。

第八章　日露支關係の惡化並に米國沿岸に於ける日本の機雷敷設

朝鮮及支那の狀態――日露の衝突――日本歐洲間の貿易の重要なることを米國政府會得せず――布哇沖に於ける日本の機雷敷設――サンヂーゴ附近に發見された日本の機雷敷設面――五月末に於ける米國艦隊の配備――米國大に訓練ある海軍々人の不足に苦む。

一、日本對露支關係の惡化

以上余は開戰の序幕に於て米國内に展開して諸般の形勢を述べたので、今や筆を轉じて此期間に於ける極東の狀態如何を述ぶるは適當であらふ。幸にも日本の檢閲制度は日本國内は愚か、其勢力範圍なる支那の一部にも有效であつたので、亞細亞方面よりの諸情報は貧弱にして不確實であつた。東京から發表された公報に依つて判斷すれば生産力ある數百萬の支那人

は日本の目的に共鳴し、日本を以て自分等の爲に東洋を支配せんとする白人侵略者を追拂ふ鬪士であると呼んだと云つて居る。實に此公報に依れば日支の關係は甚だ親和的で、爲に滿洲の日本守備軍は大に之を減ずるを得たので陸上の主戰舞臺に多くの援軍を利用することが出來ると云ひ、朝鮮及臺灣に於ても何等不安の徴候なしと附言し、斯くて兩植民地は日本に對して不變なる忠誠の實を示したので、日本は今や全力を擧げて當面の大敵たる米國を擊破することが自由であると稱した。更に日本人自身に就ては『共軍事的熱烈は依然たり』と證言し、『如何なる犧牲を拂ふも勝利を收めよとは有ゆる人々の絶叫する所なり』と誇言した。此等日本人の心理的狀態に關する報道の眞僞を調査することは當分不可能であるが、支那の態度が東京政府の公表と頗る異るものあるは他の方面より間もなく判明して來た。

實際に於ては北京政府は日本に與みする所か、寧ろ之に重大なる障害と

なる所の政策を採りつゝあつた。即ち其第一着歩としては武器彈藥は愚か、苟も軍需品に改造し得るの疑ある原料品の輸出を禁じたのだ。此禁制品の品目中には目下日本に多量に輸出されつゝある石炭、鐵鑛、及其他の礦物類があつた。若し此輸出禁止にして有效とならば日本の戰はんとする努力は忽にして覆へされ、戰爭の繼續を不可能ならしめねばならぬ。然るに北京政府の命令は日本の勢力範圍内にある地方――此等の地方は明かに礦物に最も富んで居る――に及ばないので、右の禁令は之を强行することが出來ない。併しながら、支那が此禁令を出したのは日本に對して竊に敵意を有する明白なる表示であつた。北京政府は右の輸出禁止が無視さるゝを見るや列國に通諜を送り、日本が支那の中立を侵害したこと、並に之が對策を講ずべき權利を留保することを通知した。即ち日本は此戰爭の初期に於てさへ、至緊至要の利害關係を有する方面に於て既に重大なる障害の横はることを考慮せねばならなかつた。茲に於てか日本は支那に於

ける其守備軍を減ずる所が、却て之を增援するの必要に會した。

然るに日本に對する支那人の惡感は獨り外交上の抗議のみに止らずして、支那の密使は多額の運動費を擁じつゝ朝鮮の革命を煽動した。實に當時朝鮮の狀態は其全部に亘りて革命の氣運が熟せるものゝ樣に見へた。加之ならず日本政府は又露國の態度に對しても憂慮せざるを得なかつた。何となれば露國政府は此戰爭に乘じて既に火事場泥棒的行爲を爲さんとするの傾向さへ見へたからである。由來日露兩國間には幾つかの繫爭事件があつたが、就中樺太問題は其最も鋭敏なるものとなつた。此の十年以來樺太の北半部は露國のバルチサンがニコライエブスクに於ける七百の日本人を虐殺した報復(レプライザル)として千九百二十年四月以來日本軍に占領されて居た。然るに同地には豐富な油田があるので日本は之を手放すことを欲せず、爲に其所有權を恢復せんとする露國の有ゆる努力は頓挫した。茲を以て此確執を調和せんが爲め日露兩國は千九百二十五年一月一の條約に調

印したが、二年後に至り露國は日本が條約を侵害したとの理由を以て之れを破棄した。然るに今や日本が米國との戰爭に熱中して亦他を顧みるに遑なきを見るや、ソビエット露國の治者等は之に乘ずべく其機を逸せなかつた。即ち開戰の約一ケ月後露國は一の覺書を東京政府に送りて北樺太の即時的且完全なる放棄を要求せるのみならず、これ迄日本が承認を拒んだ滿州に於ける東清鐵道をも露國の所有とすべき權利を承認せんことを求めた。此の東清鐵道は以前露國の手中にあつたが、千九百十二年の革命以來、支那の漫性病とも云ふべき內亂の一時期に於て、露國が滿洲督軍張作霖を援けて吳佩孚を破らしめた代償として、之を恢復せんとしたものである。勿論此鐵道の管理は只だ局部的にのみ有效であつたが、此鐵道の還附は支那以外の列國は之を正當と認めなかつた。莫斯古政府の日本に對する右の覺書は最後通諜では無つたけれど多少獨斷的で、且當時滿洲の邊境には露國大陸軍の集中か行はれつゝありとの報道が頻々たる時に到着し

たので日本政府は豫想したよりも驚ひた。日本の爲には如何なる犧牲を拂ふも露國の中立を維持せねばならぬ、然も之を爲さんには單に名聲を失墜する以上に一層痛ましき何物かを讓與するを必要とした。然るに樺太の還附は日本の主要なる豫備油田を失ふものである。此油田は實際に於ては左迄多量で無つたので、日本の海軍當局は既に他の方面を搜索しつゝあつたが、之を得らるべき方面は甚だ僅かであつた。日本は一時シェール（貝岩）より石炭乾溜に依て石油を得んとして南滿洲の撫順炭坑に着目し、多額の費用を投じて種々なる實驗を試みたが、品質劣等にして其量も貧弱到底之に要する莫大なる費用を償ふに足らざるを發見したので之を中止した。臺灣に鑿られた油井も失望すべきものでは無つたが戰時に於ける需要に應ずるに足らない。斯くて玆に日本が新紀元を劃するに足る有望なる地域は南比律賓に於けるミンダナオ島に發見されたが、不幸にして此油田は三萬七千平方哩の面積を有する島の中央に在るので、之を輸出する

に必要なる港が手近かに無ひ。斯る結果として日本の軍令部は樺太油田の放棄は戰敗を招くの途なりと力說して、露國の要求を卽坐に承認することに抗議した。併しながら日本若し露國の中立を期待し得んとならば、此の左迄重量ならざる北樺太の還附は、日本にとり必ずしも最大なる犧牲でない。否之に反して此際露國と敵對感情を挑發するが如きは明かに拙劣である。日本の政治家はツアル時代の露國の傳統的帝國主義は千九百十七年の革命に依て消滅するものでなくて、苟も機會あらば滿蒙の豐饒なる地方を已の掌中に收めんとして常に貪慾の眼を放ちつゝあるを何人よりも克く知悉して居た。されば支那の支配權に關して早晩第二の日露戰爭が惹起すべしとは多くの日本人の信じた所である。日本が滿州に於ける露國の勢力を根絶するは已の生存に關する重大問題なりとして、千九百四年此の北方の巨像に對して劒を執て起て以來、支那に關する日本の利害關係は著しく大となり、今や實に日本國民の死生存亡に關する重大問題の一

となつて居た。這回の日米戰爭の如きも少くも一般的に云へば此支那に於ける米人の侵入に對せんが爲である。勿論露國は日本の將來の敵として認むべきものなりと雖今は之と戰を挑發すべき時でない、否現戰爭の終る迄は露人の心を和らげて置くことは何よりも必要である。玆を以て日本の外務省は海軍省に通知するに北樺太還附に關する露國との商議には將に應ぜんとして居るが、有ゆる手段を盡して之を遲延することに努むる旨を以てした。又西滿洲の邊境よりニコルスクのウスリー鐵道に至る鐵道線路の支配權を含む東清鐵道に關する露國の要求に對しては、日本は『主義に於て』之を承認し、其詳細の項目に關してはチタに於て會議を開かんことを提議した。疑もなく日本は此等の會議に決定的證言を與ふる前に、米國との戰運を挽回して獨の親露的假面を脫し、露國に挑戰的態度を取らんと豫期して居たのである。以上は實に米國との戰爭の初期に當り日本の當面せる政治上の重大なる障碍であつたので、日本は旣に露支兩國に對

しては愼重の態度を取るを必要と考へた。然も此不吉なる政治上の暗雲は米國に對する光輝ある一連の勝利に依るの外之を一掃するの途が無つたのは極めて明白である。

二、戰爭の日本經濟界に及ぼせる影響

米國との戰爭が日本の日米貿易に及ぼす影響も亦直に現はれ、開戰の初頭に於て既に重要なる會社は之が爲に半死の打擊を受けた。戰前に於ては日本は生綿（彈藥の製造に缺ぐ可らざるもの）の大部を米國よりの輸入に仰ひだが、此不足は今は他の方面より之を得るの外なくして、其價格は非常に大となつた。石油は暫く措ひて問はずとするも鐵や鋼に對しても同樣であつたが、此等は戰時に必要缺ぐ可らざるものである。日本の主要輸出品たる絹や綿製品も亦重大なる脅威を受けた。これ米國は其最大なる需要者であつたのみならず、戰爭の爲め生綿の輸入が急に杜絕したのと、彈藥

製造用に貯藏品を徵收された爲めに益々其缺乏を告げ、爲に多くの製造會社を休ましむることゝなつたからである。這般の眞相は日本の或著者等が既に戰前に國民に警告せし所であるが、左迄の注意を引かなかつた。實に日本人は一時は戰爭に依る米國との貿易の結果を下算して居たかに見へた。

然るに開戰後數月にして毫も假借する所なき需要と供給の法則は日本に對しても現はれ來つて直に物資の不足となり、爲に戰爭の爲に生じた人工的障害をば廻り途して其貿易を繼續することゝあつた。斯くて茲に大なる利益を得る者は中立國の商人のみとなり、日本は生活の必需品に對して頗る高價の價を仕拂ふことゝなつた。

此原料品の不足を補ひ、且如何なる將來の要求にも應ずべき彈藥の莫大なる豫備品を製造せんが爲め、利用し得べき有ゆる日本の船舶は支那、滿洲、印度、南亞弗利加及歐洲との貿易に使用された。此貿易は頗る長ひ間米國

海軍の爲に妨害されなかつたものである。然るに財政方面に於ける米國の優越は直に其效果を現はし、日本は最も必要なる必需品の多くに對して法外にして益々暴騰する代價を拂ふと同時に、或市場に於ては米國の爲に買占められて、實際上之を得る能はざるの有樣となつた。日本政府若し此の越ふ可らざる障害に對し、以前に大規模の契約した、例へば米、綿、毛織物、銅、鐵、油等の如き重要缺ぐ可らざる物品の幾分を速に締切るの策を講ぜざりしならば、事態は益々重大となつたに違ひない。然るにも拘らず日本の一般民衆は供給の間歇的なると價格の法外なるとに無頓着であつた。而して此弱點に乘じた暴利者に對しては政府は命令を以て之を取締つたけれど、國民の道義心を保持せんには一層强烈なる手段を斷行するの必要は明かであつた。

日米兩國は相互に隔離せる長遠の距離と、根據地の缺乏の爲め、相手の海上貿易に重大なる攻擊を加へ得るの位置に無い。

米國が開戰當時新式の巡洋艦トレントン及驅逐隊の一隊を地中海方面に派遣して居たのは事實であるが、開戰となるや此等は艦隊動員上の豫定計畫に從て本國に引揚げを命ぜられた。日本の歐洲方面との重要なる貿易を阻害せんが爲めに此種の艦隊を同方面に維持し、且之を增援することが根據ある政策たるは、其後多くの時日を經過する迄米國の海軍當局に認識されなかつた。此の日本と歐洲諸港間の定期航海に服したものは日本郵船會社で從來百隻の大型汽船を以て之れに任ぜしめて居たが、米國との海上貿易の中止は玆に船腹の餘裕を生じて、其多くをも之を歐洲航路に變更した。然るに此海上貿易は米國にとりては重大なる顧慮を要するものでなかつたので、日本にとりては――特に戰時に至り自給自足の國民にあらざる時を一層然りとする――此海上貿易は其大動脈の一を形成し、之に打擊を加ふるは日本の敵の第一の目標であらねばならぬことを米國の戰略家等は容易に認識することが出來なかつた。否彼等は日本が斯種の打擊

を受けて其海軍戰略を變更せる曉に至らずんば、これ迄認識するを得なかつた戰勢の正確なる判斷をしみ〳〵と下すことが出來なかつた。

開戰切頭に於て日本の商船中米人の手中に落ちた者は比較的少數で、其拿捕せられた者も噸數と價格よりすれば顧みるに足らなかつた。これ實に戰機切迫するや日本が速に警告を與へた結果なるは云ふ迄も無い。日本が明石丸を以て巴奈馬運河を閉塞した事も之を證するものである。

然しながら之と同時に華盛頓に於ても亦日本の當面せる困難を明諒に認識せる者は少かつた。傳ふる所によれば米國戰時內閣員の二三は日本は結局露支兩國の一又は双方より攻擊せらるゝを以て、此新たなる敵に對せんが爲め、米國に和を乞ひ、以て其賠償に應ずべきを豫言したと云はれて居る。斯種の意見は一部の米人に共鳴された、何となれば、若し果して然らば、戰爭を繼續すべき不愉快なる努力を爲すの必要はないからである。此一派の意見に曰く、米國は海外の戰場に於て犧牲と危險とを冒さずとも、守

勢に立ちて其沿岸と海上貿易とを防護すれば足ると、換言すれば米國は純然たる守勢に要する最少限の戰鬪力に止めて極東に於ける事態の發展を俟つべく、然らば日本は間もなく和を乞ふを餘儀なくさるべしと云ふのである。然るに此奇怪なる意見は米國に於ける多數戰略家の容認する所とならなかつた、否新聞紙の如きも之を反擊し、一部の噺聞紙は如何なる時に於ても其虛誕なること明白なる斯種の樂觀的期待を爲すの愚なるを力說した。日本が露支兩國よりの攻擊に對して豫め其安全を保證することなしに戰爭に赴くべしとは思慮ある米人の信ぜざる所であつた、實に此等の人士は日露戰爭に於て如何に日本人が愼重に國交斷絕の正當なる時機を撰擇したかを記臆して居るのである。茲に注意すべきは這回に於ては川村公と其閣僚をして急轉直下戰爭に決せしめたものは、日本の國內事情に基くものなるを世界は知らなかつたのだ。日本人が露支兩國との國交の危險を豫見したか否か、又は充分に之を考慮したか否かは疑問として殘ら

んも、東京に於ける不幸なる一月五日の內閣會議の報告より判斷すれば、彼等には國內を革命の混亂に委せんよりも必要なれば寧ろ戰爭の重大なる危險を冒さんとする準備があつたことは明白である。

三、米國沿岸に於ける日本の機雷敷設

華府に於て此等の議論が行はれつゝある間に驚くべき報道は太平洋方面より來た。他なし日本は先制に出でんとする政策と人民の士氣を保持するの目的を以て、米國の沿岸附近に對して戰鬪行動を爲すことに決心し、其第一着歩として數ケ所に機械水雷を敷設したのだ。第一は布哇の主府なるオワフ島のホノルル、沖と、之より數浬を距る眞珠軍港沖に敷設したが、之には前章に述べた七千噸級の大型潛水艦を使用したものと見へる。此機雷の爲め五千六百三十噸の米國船舶局汽船ヂユウエーは五月二十日ホノルル、沖で沈沒した。茲に於て地方官憲は迅速に行動して總ての出港船を

止め、又無線電信を以て入港せんとする船舶に警告を與へ、且全力を盡して機雷敷設面を搜索した。幸にも掃海隊（機雷を搜索處分する者）の編成並に天候とも良好なりし爲め、以上二個所の敷設面は直に發見され、僅に一隻の掃海船が機雷に觸れて沈沒したのみで、總て之を掃海し終つた。當時眞珠港には米國の大艦隊が集中されつゝあつたので、此機雷敷設面の發見は米國海軍の爲には眞に好運と謂ふべく、然らざれば重要なる二三の軍艦は之が爲に沈沒したに違ひない。

日本の敷設した第二の機雷はサンヂーゴ灣入口の外方に在るガムモンド・ショール（Gamman Shoal）の南方である。卽ち五月二十五日朝米國驅逐隊の一隊は演習の爲め出港せんとして之に觸れ、驅逐艦ヤーボロー、トムソンの二隻は沈沒し、バラード、ローブ、アーロンワードの三隻は大なる損傷を蒙つた。幸にも之が掃海に全力を盡したので其後の損害は無つた。此機雷敷設の手段に就ては頗る疑ふべきものあり、日本の機雷敷設潛水艦に依て爲

された形跡は一もないので開戰前カリフオルニヤ半島の墨西哥沿岸沖に内職として漁業に從事して居た日本漁船が之を敷設したものであらふとの判斷は恐らく最も眞に近きものであらふ。此意見はサンヂーゴ海軍當局の主張する所であつたので、將來之を再びせざる樣カリフオルニヤ半島の海面には哨艇を配備した。米國海軍は哨艦艇として多數の補助汽船を徵發したが、それにも拘らず斯る配備の爲に哨艇の不足は益々烈しくなつた。

四、巴奈馬運河閉塞後に於ける米國艦隊の配備

本章を終るに臨み巴奈馬運河閉塞後の米國艦隊の配備に就て一言しよう。當時米國には有效なる檢閲制度なく、從て新聞紙上より秘密の漏洩があつたので、此開戰の初期に日本が早くも米國艦隊の配備を知悉したのは疑ひない。

米國の亞細亞艦隊中驅逐艦二隻、潛水艦七隻、並に揚子江方面に在つた餘り重要ならざる數隻の砲艦を除く諸艦は、日本の比島占領戰中に實際上消滅したので、太平洋方面に在る米國艦隊は今は左の通りとなつた。

（戰艦）ウエストバージニヤ、メリーランド、コロラド、カリフオルニヤ、テンネツシー、ニユーメキシコ、アイダホ、ミスシツピー、ペンシルバニヤ、アリゾナ、オクラホマ、ネバーダ、計十二隻

（新式巡洋艦）ミネアポリス、ポートランド、カンサスシチー、インヂヤナポリス、オマハ、ミリウオーキー、シンシナチー、ラレー、デトロイト、リツチモンド、コンコルド、マーブルヘツド、メンフイス　計十三隻

（此他一萬噸級の新式巡洋艦三隻は完成せるも未だ就役するに至らない）

（舊式巡洋艦）チヤーロツト、ハンチンゲトン、ヒユーロン、シヤトル、チヤーレストン、サレム、ニユーオルレアンス、計七隻

（航空艦）サラトガ、ランゲレー　計二隻

（第一線驅逐艦）計百十三隻

（潜水艦）V級六隻、S級十六隻、R級十九隻を含む　計四十一隻

（哨艇）イーグル級　計十五隻

（機雷敷設艦）アルーストック、バルチモアー　計二隻

（水雷母艦）アルテヤー、ライゲル、メルビル、パツフアロー　計四隻

（潜水母艦）ホーランド、カノーパス　計二隻

（工作船）メヅサ、プロメセアス　計二隻

（特務船）給油、給炭、給糧、病院船等　計十四隻

巴奈馬運河の閉塞後間もなく太平洋方面の米國軍艦は左の如く集中された、即ち布哇の眞珠港には戰艦十二隻（各々四隻宛の三戰隊）新式巡洋艦シヤトル、新式巡洋艦コンコルドを水雷戰隊旗艦とする驅逐艦三十六隻（各々六隻宛の六驅逐隊）外に水雷母艦としてアルテヤー、ルイゼル、メルビルを附す。潜水艦十八隻（内

V級六隻、S級十二隻）外に潜水母艦としてホーランドを附す。掃海船六隻及特務船約十二隻である。殘餘の軍艦は之をサンヂーゴ、メヤーアイランド及プレマートンに配備したが、其内サンヂーゴには其數最も多く、特務船プロシオンは同地に在る艦隊の旗艦とせられた。

次に大西洋方面に在るものは次の通りであるが其大部は舊式艦である。

（戰艦）ニューヨーク、テキサス、アーカンソウ、ワイオミング、ユータ、フロリダ、計六隻

（新式巡洋艦）トレントン　計一隻

（一萬噸級の新式巡洋艦數隻は建造完成せしも就役迄には尙多少の時日を要する有樣である）

（舊式巡洋艦）ヒツツバーグ、ペツブロウ、セントルイス、ローチエスター、パーミンガム、チエスター、オリムピヤ、チヤツタヌーガ、デスモインス　計九隻

（航空母艦）レキシントン、ライト　計二隻

（第一線驅逐艦）計百六十隻（外に第二線驅逐艦數隻あるも役務に適せない）

（潜水艦）計七十隻、種々の型より成るも、戰艦隊に隨伴して遠航するを得ない。

（哨艇）計六隻、大部は武裝ヨットより成り、後尙數隻を增加した。
（水雷母艦）ドッピン、ホワイトネー、デネボラ、プリッゲポート　計四隻
（潛水母艦）ブッシュネル、フルトン、ビーバー、カムデン、サバンノー　計五隻
（機雷敷設艦）ショーマット、サンフランシスコ、計二隻
（掃海艇）バード級　計三十隻
（工作船）ペスタル　計一隻
（特務船）給油、給炭、給糧、病院船等　計三十二隻

開戰直前に於て豫備艦列にあつた驅逐艦や其他の軍艦の人員補充には米國海軍省は大なる困難を感じた。然も巴奈馬運河は今は閉塞されてあるので、太平洋方面の如上の艦隊には、大西洋方面にある偵察艦隊の乘員の半數を鐵道輸送により送派した。此偵察艦隊の乘員は新たに乘艦せしめられたもので、其大部は人事局が陸上勤務より海上へと移したものである。勿論其一部は以前に海軍に勤務したものであつたが大部は新兵で、前者と

雖も最新の砲術其他の技術には未熟であつた。されば此の開戰の初めに當り、米國の將官連が敵の行動よりも寧ろ此訓練ある海軍々人の不足に大なる把憂を懷ひたのは無理も無い。

第九章　米國太平洋沿岸に對する日本潛水艦航空機の活動

日本潛水艦米國太平洋沿岸を攻擊す――加州に於ける空中襲擊――日本航空母艦坊みに退却す――米國の輿論政府に對して有力なる防禦手段を講ぜんことを求む――米國新艦を建造す

一、日本潛水艦の太平洋岸襲擊

日本の取つた次の行動は明かに人心收攬策であつた。前章に述べた機雷敷設面の發見後約三週日なる六月十七日に於てサンヂーゴの艦隊用として軍需品を滿載した貨物列車はサンタ・アナの南方四十五哩の地點に於て脫線した。此混雜最中數彈は來つて右の列車に命中して爆發した、これ卽ち其海岸の沖合一浬に在つた日本の航洋潛水艦伊五十四號より發射せるもので、列車に火災を起し、其他多數の死傷者を出したる後潛入して其餘

を沒した。時に鐵道線路の大部が破壞されてあることを發見したが、最初は陸上の間諜に依て爲されたものとせられたけれど、其後右の潛水艦が海岸に最も近く、且海上より充分に眺め得る右の個所に夜間乘員を上陸して竊に之を破壞したとの說が有力となつた。此潛水艦は半潛入の狀態で列車の來るのを待て居たから陸上と連絡を取て居たのは明かである。茲に於て之を搜索せんが爲め數隻の驅逐艦を急航せしめたが、其附近には伺等潛水艦らしきものを發見することが出來なかつた。實に同艦はそれより北航して同日夕刻ロスアンゼルス附近の沖合に現はれ、スタンダードオイル會社の大油船モフエット・デユニオルをサンタ・モニカ灣に於て雷擊したが、之が爲め同船は陸岸に擱坐し後遂に沈沒した。此等の事實が明瞭となる前に右の潛水艦は三度桑港灣の金門沖に現はれ、何等妨害を受けずに四隻の商船を雷沈した。此の重ねく〳〵の日本人の傍若無人の行動に激怒した米國の海軍當局は苟も利用し得べき有ゆる哨艇や飛行機を桑港方面に

急派したが、日本の潜水艦長は敵の妨害を受けずに行動し得る時間を精確に判斷して引揚げたので、此等のものが到着した時には沈沒船のみ現場に在つて潜水艦は其姿を發見することが出來なかつた。此の雷擊された商船には死傷者無く、沈沒商船の乘員等は端艇に乘移る時間を許され、其移乘終るや潜水艦は之を雷擊沈沒せしめた。

當時伊五十四號が他に、僚艦を有することは知られて無つたが、實際には此太平洋沿岸附近に來る迄の大部は補助航空母艦博多及給油船劒崎を伴つて居た。然るに當時は米人に斯る疑念が無つたので主として潜水艦のみを捜索した。此日本潜水艦は排水量二千噸に近く、二門の五吋五砲を備へ、且小型にして特に設計せられた一個の海上飛行機を積んで居た。

伊五十四號は其獵獲の手を弛めて二日間隱匿した後、又もや北航を續けて道囘はコロンビヤ河口に現はれ、同樣の計畫に從て二隻の商船を雷沈し、華盛頓州のサウスベンド、及他の沿岸都市を海上より砲擊した。此等の損

害は勿論論ずるに足らなかつたが、之が爲め太平洋沿岸傾斜諸州は大混亂を來した。今や最も荒唐無稽なる風說は流行し、ロスアンゼルスの一新聞紙の如きは無數の日本潜水艦が全沿岸を砲擊すべき命令を受けて既に太平洋を横斷したと報じ、且敵は飛行機を伴ふを以て――此點は正確であつた――彈着距離內に在る何れの都市も危險なりと注意した。斯くて數個の沿岸都市の當局者等は華盛頓政府に電報するに數隻の軍艦を永久に配備せん事を以てし、特に驚く可は或一市長の如きは戰艦の一戰隊以下では到底承知せなかつた。勿論斯る任務に利用し得べき軍艦は無つた、否在りとするも海軍省は作戰計畫を變更して迄も之に配することは出來ない。之と同樣の騷ぎは千八百九十八年の米西戰爭の際にも起つた、實に米國の海軍當局はセルベラ艦隊が太西洋沿岸に近づきつゝありとの輿論の聲に動かされて、何等の戰鬪的價値なき數隻のモニトルを同方面諸港の守備として派遣したのだ。然るに今や輿論の聲大なるを見るや、海軍當局も已む

なく有ゆる豫備の飛行機をオレゴンの沿岸に派遣したので、加州は何等の防禦なき裸體の位置に置かれた。

二、日本空軍の猛襲

日本人に取りてはこれ實に乘ずべき好機である、玆に於てか日本は其計畫の本體を現はして、六月二十二日桑港、オークランド、ロスアンゼルスの空中襲撃を同時に行つた。此等の飛行機は初めて見た時には肉眼で視認困難なる程高所を飛んだのである。桑港では人民は航空機射撃砲の發射を聞き――日本の飛行機は此等の高射砲の射程外に在つた――何事が起れるかを知らんとして警官の留むるをも聽かずに街頭に群集した。然るに敵飛行機の襲撃なるを知る間もなく、附近に大爆音起り、爲に群集は先を爭ふて避難し、多くの人は踏み殺された程である。斯くて爆彈は續々として投下され、其爆音も頗る烈しいので、潛水艦より飛ばした小型の飛行機より

も一層有力なものを以て重大な空中襲撃が行はれつゝあることが判つた。然るに米國の飛行機はオレゴンとワシントン州に集められ桑港やオークランド方面には一も無いので、日本の飛行機は此機を利用し、縱横自在に、其全爆彈を此等地方の不幸なる人民の上に投下した。此等の爆彈は高勢爆藥を塡充せるものゝ如く、爲に人命財産に對する損害は莫大で、病院は爆彈の破片や煉瓦に打たれた死傷者や、避難の際足下に敷かれた者で充滿した。爆彈の一部には疑もなく引火し易き材料を含んで居たが、幸にも桑港は防火設備完全の爲め只だ一ケ所に火災が起つたに過ぎない。此爆彈投下はゴート島に面する船着場にのみ限られたので、倉庫や埠頭は大なる損害を蒙つた。要するに此空中襲撃に依る桑港方面に於ける損害は甚だ重大なるものであつた。

ロスアンゼルス方面に於ては、日本の飛行機は桑港とオークランドの十一機に比し僅に九機を以て襲撃を試みたが、其損害は一層廣大で數ケ所に

火災が起つた。此等は消火に多くの時間を要し、數ケの石油貯藏庫は燃へ、活動寫眞製造會社も亦破壞されて重要なフイルムの幾つかを灰燼に歸した。當時襲來した此日本の飛行機數に就ては頗る過大に計算されたが、後に至り總數二十機なりしことが明かとなつた。北方に向つた日本潛水艦の捜索に急派された米國の飛行機は此等の空中襲擊を擊退せんが爲め急速に加州に召還されたが、其到着せる時には何等日本飛行機の片影も見へなかつた實に日本飛行機は海上より眞直に飛び來り、又海上へと飛び去つたのだ。

嚮に日本潛水艦伊五十四號が加州近海に現はれた後北航するや、此等は英領コロンビヤの近海に羅列する無數の島嶼の一に秘密根據地を有するに非ずやとの見地の下に、該方面に注意を集中せんことを主張した者も在つたが、此謎は其後一部は開顯されたが、それでも尙確かな證據は少かつた然るに戰爭の終りに至り此秘密は解けた、卽ち航空母艦博多は本來快速の

大型汽船であつたが、横須賀に於て急速に航空母艦に改裝し、各々半噸の爆彈を搭載し得る海上飛行機二十機を積み得る樣にし、各飛行機は其翼を分解して、之を倉庫に收めた。斯くて博多は巧に青烟突線（ブリユーフアニネルライン）の英船を裝ひ、竇のデツキハウスの後方には四門の六吋砲を隱匿裝備し、五月三十一日を以て給油船劍崎と共にヤルートを出港した。此二船は太平洋航海の大部は何等の護衞艦なしに航行し、布哇の北東四百浬の海上に達するや、同島を遠くに避けんとして針路を變じたが、此時英國の一商船に邂逅した。此英船はバンクーバーより濠洲に向ふもので、其無線電信手は電信を以て挨拶を爲したが返信がないので不思議に思つたが餘り注意もせなかつた。六月十六日薄暮二船は哨艇の發見する所とならずに米國の沿岸を距る二百浬以內に潛入し、玆に分離別働して博多は沿岸に沿ひ南航し、劍崎（同船も亦英船に假裝して居た）は低速を以て恰も加奈陀の一港に向ふものゝ如く北航したが、實際には以前に準備されて居た一の集合點に向ひつゝあつた。

二十二日正午博多はレイス岬の南東二十浬――金門灣の西約七十浬――に到着し、茲に哨戒中の米國の一武裝ヨットに發見された。此哨艇は米國海軍の豫備軍人を以て之に乘組ましめたものである。然るに博多は英船を證明すべき信號旗とバルバライゾに向ふべき信號旗を掲げたので其儘航行を許された。此際若し右のヨットが尙も接近して談話を試みたならば日本汽船の正體は暴露したに違ひない。最も博多は英語に巧みな士官を撰んで之に乘組ましめてあつたのだ。然しながら日本船は例へ發見されても其隱匿した砲を以て哨艇を擊沈するに違ひない。とも角博多は何等怪まれずに航行を許されたが、之より一時間航行した後附近に船無きを見るや、停止して飛行機を倉庫より取出し、之を組立て且爆彈を搭載して後水上に下し、前述せる加州諸市の空中襲擊に向はしめたのであつた。此飛行機の襲擊中博多は全速力を以て附近を航行し、其歸來を俟ちつゝあつたが、敵は空中襲擊に驚かされて直に全哨艇を急航せしむることゝ思はれるから、博多にとつては此時は實に全冒險中の最大なるものであつた。然るに幸にも何等の事變も起らず、且歸來しつゝある飛行機の一からは無線電話を以て其船位を尋ねて來た。最初の四機が見へた二十分後には他の機も亦一機を除く外來着した。而して結局八機は收容されたが、殘り一機は着水の際破損し、他の一機は博多が危險を冒して一時間の間附近を搜索せしも遂に發見する事が出來なかつた。此飛行機は機關に故障を生じたものゝ如く、一旦海上迄飛來したことは其後同機の破損した機體がサンタ・バルボア附近の海岸で發見されたに徵するも明かである。斯くて該機の望みは絕へたので博多は搜索を中止し、高速を以て集合地點に向つた。夜中該船は探照燈に照らされ、一浬の距離にある一船より數彈を發射された、然るに敵の視認困難であつたので之に應射せず、其儘直進した。此の發砲した艦は米國の沿岸警備假裝巡洋艦ハイダで千七百八十噸の排水量を有し、最大速力十六節、二門の五吋砲を持て居た。該艦は本來華盛頓州のタウンセ

ンド港を本據とするものであるが、哨艇の需要緊切なるより之を海軍に編入したものである。斯くて同艦は博多との關接を失つたが、博多が發砲されたに拘らず何故に停止せざりしかは、其後日本の公表が事實を傳ふる迄は疑問とせられて居た。

茲に於てか海軍當局は一般的の警告を與へて、苟も疑ふべき船舶に對して哨戒を嚴にせんことを以てした。時に既述の老朽巡洋艦チャーロットは桑港とホノルヽ間の商船護送任務に服し布哇の五百浬以内に在つたので、敵の退路を遮斷するに適する唯一の軍艦であつた。茲を以て同艦長は無線電信を以て商船隊より一時分離別働するの許可を得、最大速力を以て北西に急航した。元來同艦の最大速力は二十二節であるが機關の老朽と長く使用せざりし爲め十九節の速力も怪しく、此速力も亦十二時間後には十七節に減じ、尚十二時間航行したか更に敵らしきものを見ないので、捜索の繼續を無用と認めホノルヽに向ひ針路を變じた。結局に於て同艦は博

多と二百五十浬以内に接近せなかつたのだ。斯くて博多は加州方面を去るや一時は正北に航走した、これ此方面には米國軍艦に會するの肯望最小であると判斷したからである。而して二十四日には劍崎と會し、翌二十五日は天候良好なりしを以て劍崎より給油し、此二船は相伴つて北航しつゝ本國歸還の途に上り、途中何等の事なく横須賀に歸着した。

之に反して日本潛水艦伊五十四號は然く幸運で無つた。同艦はオレゴン方面の船舶を襲ふた後北方に進み、桑港とロスアンゼルスの空中襲擊の翌日なる六月二十三日にはフラッタリー岬沖に出現して水上に現はれ、數隻の汽船を發見した、これ疑もなく航空母艦博多の退却を容易ならしめんが爲め敵の注意を己の方面に集注せんとしたのである。然るに不幸にも同艦は米國驅逐艦ラスバーン、シャークの二隻と會した、此二隻の驅逐艦は他のものと共にブレマートン海軍工廠にて長期の修理を了り、沿岸哨戒隊を援助せんが爲めヂュアン・ド・フューカ海峽を下りて航行中、日本潛水艦が

フラッタリー岬沖に現はれたとの無線電信に接したのである。茲に於てシャークの先任艦長メイナード少佐は敵が僅か數浬の距隔にあるを知り、ラスバーンに同航を命じ、全速を以て右の地點に向つた。此時日本潛水艦は船舶局の大型汽船ウエスト・デヤッバを停止させて居たのである。時に潛水艦の有せし小型飛行機は破損して用ふるを得ず、且驅逐艦はデヤッバの高き舷側の陰に隱れて接近して來たので潛水艦の知る所とならなかつた。然も潛水艦は二發の魚雷を右の汽船に發射し悠々として海中に潛入した。茲に於て驅逐艦は多數の水中爆雷を投下したが、假へ直接の手答へは無りしも之が爲め沈沒したるものゝ如く、其後同艦の消息に就ては敵も味方にも杳として知れなかつた。然るに當時は之を知る由もなく、且米國の商船に反覆襲擊を加ふる事より見れば一隻の潛水艦の仕事とも思はれないので、海軍當局は有ゆる警戒手段を取り、總ての商船の出港を數日間停止し、且飛行機と哨艇とを以て附近の嚴密なる搜索を行つた。此日本潛水

艦の行動はフラッタリー岬沖に米軍の注意を集中し、其隙に乘じて他方面の空中襲擊を行はしめんとする博多の計畫には有力なる援助となつたものである。

三、米國政府輿論の聲に動かされて戰備を促進す

米國の大平洋岸に對する此日本の作戰は其計畫良好にして實施も亦巧妙であつた、されば此報一度日本に達するや國民は熱狂して之を迎へ、新聞紙の如きは其成功を誇大に吹聽した。併しながら之を軍事上より觀るに斯る作戰が其拂ひし價を償ふに足るやは疑問である。疑もよく此作戰の主目的は、太平洋岸傾斜諸州の人民を驚怖せしめて輿論を喚起し、依て以て米國海軍の作戰計畫を變更せしむるに在る。斯る作戰が沿岸の全住民を震慄せ、しめ、局地防禦を要求するの結果は米國政府をして之を無視するを得ざらしめたのは事實である。斯くて十二隻の驅逐艦は沿岸哨戒隊を增

援せんが爲め布哇より召還せられ、加ふるにヨットや商船を徵發して右の目的に適する樣急速に艤裝した。又陸軍省は要塞砲兵旅團の指揮下にある銃道砲兵の二大隊を銃道線路の附近より七吋砲を以て充分に海上を射擊し得るロスアンゼルス方面に派遣し、二個の海軍用大型航空船及陸軍用小型航空船の二機は二十機の飛行機と共に海岸附近を晝夜を問はず哨戒せん事を命ぜられ、海上より砲擊し得る桑港、ロスアンゼルス及他の都市は何れも航空機射擊砲を備付けられた。斯の如く戰爭の實行上には何等の效果なき專守防禦に米國の人力と兵資とを轉向せしむれば、日本は其與へ得たる此種の悲劇的打擊より間接の軍事的利益を得たと主張するかも知れない。然るに之が爲め米國が其防禦組織を改良したる以上、日本人は再び斯る攻擊を繰返す事は出來ない。況んや太平洋沿岸を距る遠隔の地方に於ては之に刺戟せられて米國人民の鬪志を堅め、且其決心を鞏固にするに於てをや。斯くて茲に彼の威嚇政策なるものは背後に壓倒的兵力の後

援なくんば成效を庶幾し難きことを再び證明したが、斯る壓倒的兵力は今此の場合に於ては日本の方に無つたのだ。但し之と同時に斯る大膽なる沿岸攻擊が合衆國民の憤慨する所となつたのは無論である。何となれば敵は傍若無人にも米國の領海を荒らし、太平洋沿岸に於ける主要なる諸港の商船を抑止し、加州の大都會に烈しく爆彈を投下しながら、巧妙なる戰術に依て米軍と觸接する事なく退却したからである。當時に知られた日本軍の損害は一の飛行機のみで、そはサンタ・バルボアの海岸に漂着したものである、而して日本潛水艦伊五十四號の沈沒の如きも其後多くの時日を經過して後に始めて判つた有樣であつた。

南北戰爭以來米國政府は這回の如く未だ嘗て猛烈なる詈罵誹謗の的となつた事は無ひ。大統領や閣員等が有ゆる方面、殊に直接に日本の襲擊を蒙つた地方よりの此非常なる壓迫に盲從せないとすれば彼等は正しく超人間でなければならぬ。實に彼等は此等の壓迫の結果上述せる防禦の配

備を取つたのみならず、巴奈馬運河が閉塞せられて居る現狀に鑒み、其開通を俟たずして利用し得べき有ゆる海軍力を被害方面へ派遣するの已むを得ざることゝなつた。日本人は勿論斯かることを知つて居るので、敵に大早計の行動を爲さしめんとする計畫が大に成功せるを見ては喜んだに違ひない。併しながら言少しく奇に似たるも、日本潛水艦、航空機の襲擊の結局の結果は、日本に對してよりも寧ろ米國に對して大なる利益を與へたことは疑ひ無い。何となれば米國は之が爲に直に大造艦計畫を實施することゝなつたからである。

之より嚮き開戰直後議會は海軍の臨時軍事費として二億五千萬弗の追加案を可決したので、國民は直に其建造に着手されつゝありと信じて居た。然るに當時戰爭は急速に終了すべしとの意見が米國政府内にも尙有力にして、海軍省の高官連中には、戰爭は新艦の完成以前に終結の見込なれば造艦の必要なしとの說を主張する者さへあつた。即ち後日に至りて明諒と

なりしが如く、海軍大臣、軍令部長も此說を持し、爲に戰爭開始後の始めの二ケ月間に建造の命令を發せられたものは四隻の巡洋艦、二十隻の驅逐艦、數隻の潛水艦及二隻の航空母艦に限られた。然るに米國の太平洋岸に加へた日本の攻擊は豫想以上に大膽冒險であり、加ふるに日本が間もなく和を米國に乞ふべしとの意見も之を米國民に納得せしむることが出來なかつた。日本の目的が米國に斯る非戰熱を生ぜしむるにあつたとしたならば、日本は米人の好戰熱を高むる樣な右の行動を採らなかつたに違ひない。然るに日本は飽迄戰はんとするの政策を採り、有ゆる手段を盡して米國の輿論を激怒せしめつゝあるかに見へた。即ち日本は平和の標を申出づる代りに却て戰を挑んだのだ。されば之に對する米國輿論の反動が政府部内たると一般民衆たるとを問はず、直接にして決死的のものとなつたのは勿論である。

今や有ゆる徵候より此戰爭の長きに亘るべきを豫想した米國民は、不撓

の熱心を以て自らを武裝することに着手した。開戰の初めに當り强制徵兵令は布かれたが、大なる陸戰起らざるべしと豫想の下に、軍旗の下に召集せられた陸軍は當時尙十五萬人を超へなかつた。然るに今や大規模の陸軍擴張築は新たに作成され、桑港に於ける日本飛行機の攻擊後一週日を經ざるに既に最初に豫定された一百萬の陸軍兵數に達せんとし、國內の工業組織も亦此の大軍の要求に應ぜんが爲め動員されつゝあつた。之と同時に海軍の大造艦計畫も亦樹てられた、卽ち其主なるものは四隻の巡洋戰艦、二十五隻の巡洋艦、百隻の驅逐艦、五十隻の潛水艦、六隻の航空母艦、其他無數の掃海船、及補助艦船等である。斯る大規模のものは米國內に於ける現有の造船所だけでは其力到底及ばないので、政府は太平大西兩洋岸の造船所を擴張し、且之をして一定標準の製造力を有せしむる樣新たな設備を爲さしめんが爲に補助金を與へた。將又國內の工場に於ける過重の負擔を減ぜんが爲には船舶の材料、重量大なる鑄造物、砲、砲架、各種彈藥の大量を歐洲

に注文し、此等外國との契約のみでも二億五千萬弗に上つた。日本は既に歐洲の市場に對し同樣の注文をして居たので、價格は著しく上り、爲に歐洲の製造家等は任意に其條件を定め得る樣有利の狀態となつた。實に米國はこの三十年以來外國に向て海軍用の諸注文を試みなかつたが、今や事情は已むを得なかつたのだ。

此戰時造艦計畫の內容は之を詳說するの必要なきも左に少しく之を述べて見よう。此計畫中海軍當局が四隻の大型巡洋戰艦を建造せんとしたのは日本に於ても同樣の計畫ありとの情報に動かされたものである。卽ち日本は二月中に前代未聞の大主力艦四隻を起工し、然も其噸數は五萬噸を少しく超へ、其主砲は十八吋砲の數門を有すると報ぜられた。此の怪物的軍艦に優るものを建らんが爲め米國の巡洋戰艦は五萬二千噸、三十五節のものとせられ、八門の十八吋を有せしむることゝした。此契約は二十ケ月後に引渡すことゝなつて居るが果して期限內に完成し得るやは疑問で

ある。次に二十五隻の巡洋艦は何れも一萬噸、九門の八吋砲を有する同型のもので、内十五隻は蒸汽タービンを用ひて最大速力を三十五節とし、殘り十隻は石油モーターを用ひて二十八節の最大速力を得ることゝした。後者は前者より七節少きも、内燃式機關は未だ蒸汽タービンに及ばざると、太平洋の如き廣大なる海洋を超へて作戰する軍艦は行動半徑の大なるを必要とする關係上、速力遲きも寧ろ航續距離の大なるを撰んだ結果である。驅逐艦も亦同樣の理由により一部を石油モーターとし他を一層大速力の蒸汽タービンとした。潜水艦は之を數種の型に區分建造したが、大部は平均千七百噸のもので大なる行動半徑を有せしめた。此等の軍艦は設計成るや否や直に建造に着手したが、造船所が如何に努力するも最初の數隻が完成する迄には可なりの長日月を要ずべく、海軍省は其有する不充分なる方法を以て最善を盡すの外は無つた。

第十章　マゼラン海峽戰

大西洋艦隊の太平洋回航——日本潜水艦大西洋艦隊をマゼラン海峽に要擊す——奇襲の一部失敗す——米艦隊の損害——日本潜水艦の最後——大西洋艦隊サンヂーゴに到着——戰術上の觀察

一、大西洋艦隊（偵察艦隊）の太平洋回航

大統領の證言を實行する第一着歩として、米國艦隊の約三分の一の兵力より成る大西洋艦隊を二ケ月の航海を以て南米を迂回し、一萬四千浬の彼岸太平洋方面に派遣することゝなつた。之が爲め運送船や特務船は準備され、太西洋岸の海軍工廠に於ける修理は加速度を以て行はれ、航海の全計畫は作戰局之を準備した。斯くて海軍省と大西洋方面海軍工廠との熱心の努力の結果、左記の艦隊は七月十日迄にハンプトンローヅに集合され、太

平洋岸の根據地サンヂーゴにある艦隊と合同すべき命を受けて出發した。

（戰艦　ニューヨーク、テキサス、アーカンソー、ワイオミング、ユータ、フロリダ　計六隻
（巡洋艦）トレントン、ピッツバーグ、ベッブロウ、セントルイス、パーミンガム、チエスタ
ー　計六隻
（航空母艦）レキシントン、ライト　計二隻
（驅逐艦）計百隻
（機雷敷設艦）ショウマット、サンフランシスコ　計二隻
（掃海艇）バード級　計二十隻
（水雷母艦）ドッピン、ホワイトネー、デネボラ　計三隻
（工作船）ベスタル　計一隻
（特務船）給油・給炭、給兵、病院船、運送船等　計四十隻

此艦隊は潛水艦を伴はなかつた蓋し使用し得べき潛水艦は總て舊式で、機械故障の爲め艦隊の行動を遲延せんことを恐れた爲である。更に茲に

注意すべきは此艦隊は航續力大なる偵察巡洋艦を缺ぐことで、唯一の偵察巡洋艦は水雷戰隊の旗艦なるトレントンのみであつた。此全艦隊はテキサスを旗艦とするイー・シー・テンブルトン大將の指揮下に在つた。

此航海中大艦は左記諸港に寄港することゝ定められた。

サン・フアン（ポートリコ）	ハンプトンローヂよりの距離	一二八〇浬
パーナンブコ（伯剌爾）	サン・フアンより	二五〇〇浬
モンテビデオ（ウルグエー）	パーナンブコより	二一〇〇浬
ブンタアレナス（智利）	モンテビデオより	一四一〇浬
バルパライソ（智利）	ブンタ・アレナスより	一二七四浬
巴奈馬	バルパライソより	二八〇〇浬

此航海中小艦は其有する貧弱なる燃料貯藏の關係上右以外の港にも寄港した例へばポート・オブ・スペイン（トリニダッド）バラ及リオデヂヤネイロ（以上伯剌爾）及カラオ（秘露）の如きがそれである。艦隊中の多くの軍

艦は長期の碇泊後急速に就役したので、機械や其他の故障も屢々起り、爲に修理の爲め最近の港に分派し、修理後單獨に艦隊に追及せしめた艦もあつたが、此南米の東岸を南下する航海は平穩無事であつた。將又此航海中艦隊は種々の戰術的運動を行ひ、大部は未熟である乘員の訓練に努めた。

二、太平洋艦隊マゼラン海峽に入る

上說せる米國太平洋岸に於ける日本の攻擊と共に、日本人は二隻の潛水艦を以て米國艦隊をマゼラン海峽に要擊せんことを企てた。此二隻の日本潛水艦は或不明なる期間中マゼラン海峽の南方にあるビーグル海峽に潛伏して居たが、此海峽はナバリン及ホステ島とチーラ・デルフユーゴ島間にある最南の海峽で、其長さ約百二十浬、平均幅約二浬、其針路の大部は殆んど直線で約東西に走つて居る。元來此等の地方は荒凉であるが、海峽の兩岸は山岳斷崖に依て圍まれて居るので、其風景は特種の趣を呈して居る。

マゼラン海峽圖

此海峡は航船の通航稀なると、海峡の中央部にはボンソンビー・サウンドと稱する獨立の水道ありて、南方ホルン岬附近の外海に通ずるので、潜水艦の潜伏には理想的の場所である。但し日本潜水艦伊五十八號、同五十三號の潜伏した正確な位置は不明である、蓋しビーグル海峡の兩側には無數の小灣があるからだ。併しながら中立國の領海を侵害したとの困難な問題が起つた場合には、之を一層紛糾せしむるの目的で、潜水艦が時々智利と亞爾然丁の領海内に其泊地を變更したのは事實である。實に此兩國の國境はチーラ・デル・フューゴを南北に縱斷した後、急に東方に至りてビーグル海峡を兩分し、而してチーラ・デル・フューゴの南方にある諸島は總て智利に屬する樣になつて居るのである。

マゼラン海峡は大西洋方面より入る時は始めの約一百浬は比較的平坦であるが、第二水道を通過した稍先きの地點より後は凸凹と山多くなり、遂に海峡の兩側は森林多く、時として雪を戴く山々に依て圍まるゝこととな

る。其風景は氷河の爲め單調を破らるゝも、或時期に於ては霧と雨の爲め何物も見分くることは出來ない。只だ視界良好なる時に於ては風景は莊麗にして水清く、斷崖の直下に至る迄水深大なるを以て、海峽内の多くの部分は大船と雖岸邊迄接近することが出來る。此附近の山の著しき特徴とも云ふべきはヘウタン草屬の大木を以て蔽はれて居ることである。（附圖參照）

マゼラン海峽中第二水道の北側には智利共和國の最南の都市ブンタ・アレナス（サンヂーボイント）がある。該港には載炭に必要な埠頭、棧橋、クレーン等あるも船渠は無ひ。これ實に海峽内に於ける唯一の居留地なるも、人口稀薄、夏季には濕氣多く、冬季は寒威凜烈である。

地圖を一瞥する時はブンタアレナスと太平洋間の海峽には多數の水道、灣、及入江があつて、船舶は何れの水道をも撰擇し得るも、同時に亦要擊の潜伏場所として多くの利便を提供して居ることが判る。此のブンタアレナ

スより太平洋に出るには次の三つの航路が其重要なるものである。

（第一）コックバーン海峽を經て太平洋に出るもの、

（第二）北方に於てはクキーン・チャーロット島南方に於てはデソレーション島間の水道を經てマゼラン海峽の太平洋方面の出口に向ふもの、

（第三）所謂スミス水道と稱する該海峽の續きを經て太平洋に出るもの、此航路は主として商船の採る所である。

八日七日米國大西洋艦隊はバージンス岬を通過してマゼラン海峽に入つた。此海峽の通過中艦隊は其全航海中に採つた一般の航行序列（註艦隊航行中の各艦船の順序）に從つて航行した、即ち驅逐隊と掃海隊を先頭とし、幾つかの大艦より成る戰隊之に次ぎ、此各戰隊は何れも數隻の輕艦を隨伴した。航空母艦ライトとレキシントンは各々艦隊の最先頭及最後尾に位置し、特務船は之を艦隊の諸戰隊間に配備した。或特務船の低速なりしと、燃料の節約及濃氣――此南緯地方に於ては當時は冬季である――の

爲め艦隊速力は十節を出でず、時としてはそれ以下であつた。全艦隊は約百七十隻の艦船より成るので頗る長き行列をなし、爲に日本潛水艦の食指を動かすに最も適したが、視界の不充分なる爲め幾分潛水艦襲撃の利點を減少した。

三、日本潛水艦米艦隊を襲撃す

之より續き米國艦隊がマゼラン海峡に入つた二日前の八月五日に於て日本潛水艦伊五十八號同五十三號はマゼラン海峡中のコックバーン水道が太平洋に向て分岐するショール灣附近に潛伏し、米國艦隊が何れの航路を取るに拘らず之を襲撃せんと待構へた。此潛水艦はブンタアレナス駐在日本副領事の手により米國艦隊の行動を詳細に知るを得た、實に右の副領事は無線電信を使用せば智利官憲の疑ひを起さんことを恐れて快速のモーターボートを用ひ常に潛水艦と連絡を保持して居たのである。

全艦隊はブンタアレナスに二十四時間碇泊して隨伴せる給油給炭船、並に特にチャーターせる汽船より燃料を補充した、又若しスミス海峡を取る時の用意としては既に地方の水先人を雇入るゝの準備も出來て居た。

玆に重要なる一事は起つた、七千五百噸三十五節以上の速力を有する巡洋艦トレントンは、マゼラン海峡の入口に達するや、司令長官の命により艦隊より分離して南航し、レ・メイヤー海峡を經、ホルン岬を廻りて太平洋に出で、次でコックバーン海峡を經て主隊に合せんとした。其目的とする所テンブルトン司令長官は、同艦より太平洋方面の天候の報告を基礎として、一層長途且敵襲に暴露するコックバーン海峡を經て太平洋に至る航路を採るべきや否やを決定せんとするにある。玆に於てトレントンは右の命に從ひ、コックバーン海峡を東に通過し、ショール灣に至り、玆にブンタアレナスより來る主隊の到着を待受けた。

時にマゼラン海峡の所々には霧がかゝつて居たが、此のショール灣に於

ては八月九日の此朝に於て特に濃密であつたものと見へる。トレントン艦長ソームス大佐は二時間待つも霧は晴れそうにないので、艦上にあつた飛行機二機に命じて主隊が何れにあるやを捜索せしめた。蓋し前日の暴風雨でトレントンの無線電信機は破損し、之を使用することが出來なかつたからである。

然るに此巡洋艦が豫期せざる方向より突如として現はるゝや、潜伏せる二隻の日本潜水艦長は判斷に苦んだ。實に彼等は何が故に該艦が玆に來たかを了解に苦んだのだ。思へらく我潜水艦の居ることを米國の司令長官は知つて居るかも知れない、若し果して然りとすれば航路が安全となる迄は海峽の通過を企てぬであらうと。

日本の潜水艦長等は何等の命令にも接して居なかつたので、此の偶然の出來事には正當なる判斷を下すことが出來なかつた、否彼等は他の人々等が同樣の場合に爲すと同じく、此際何等の活動をも試みざるは自己の任務

に對して濟まぬと考へた。併しながら又ショール灣口の襲擊に便利な位置も之を捨てることが出來ないので、折衷策として二艦は別々の運動をとり、伊五十三號はトレントンを監視する爲めショール灣に殘り、伊五十八號は米國艦隊の所在を捜索せんが爲め海峽を上りてプンタアレナスの方へと向つた。

間もなくトレントンよりの一飛行機は低く懸つた霧の上方を飛行つゝ北方に向つた。然るにフローワード岬附近では霧無く、海面も上方より透視することが出來たが、玆で對潜水艦の特別教程を履んだ觀測者のマートン大尉は、己の飛行方向と同方向に航進する伊五十八號の航跡を發見した。玆に於て操縱者に注意して潜水艦の上方を二三回圓を畫ひて飛行した後速力を一時間百五十哩に增して航進し來る味方艦隊に之を警報した。此警報の一時間前にプンタアレナスを出港した米艦隊は、右の警報に接するや、テンブルトン提督は驅逐隊並に輕巡洋艦バーミンガム、チエスター以外

の全艦船に反航を命じ、再びプンタアレナスに歸港せしむることゝした。

然るに此歸航中給炭船アヂャックスは數日前故障を生じた操舵機が再び工合惡くなり、隣れる列の戰艦ユータと衝突せんとした。之を見たるユータは直に機關を反轉して之を避けんとしたが、其理由を知らざる二番艦フロリダは依然として前針路を繼續したので、非常な勢を以てユータの右舷クオーターに衝突し、水線上に大孔を穿たしめた。斯くて此三隻は二分間程離れないで居たが何れも上部構造物に大損害を蒙つた。只だ第三戰隊のみは熟練なる操縱に依て衝突を免れた。三隻中アヂャックスは損害最も大で、機關室に大孔を穿たれ、傾斜大にして到底救助の見込無つた。玆を以て乘員を移したが、岸邊は水深くして擱坐不可能なるため半時間にして沈沒した。ユータの如きも天候惡く、且港に遠かつたならば沈沒を免れなかつたであらふが、幸にも同艦の喞筒裝置が良好であつたので浸水を吸出し、自力を以てプンタアレナスに入港し、棧橋に横付けした上、淺水を利用

して沈沒を免れた。而して工作船ベスタルの熟練なる職工等は地方の請負人等と共に假修理を行ひ、航海の繼續に差支へなからしめた。次にフロリダの損害は輕微で前部に少許の漏洩を生じたが、耐波性を損ずる程度のもので無つたので依然艦隊と行動を共にした。

此衝突の際日本潛水艦が附近に在つたならば魚雷發射の好機を得たであらふが、同艦は餘程離れて居たのみならず、間もなく米軍の攻擊を受くることゝなつた。即ちトレントンと艦隊よりの飛行機は間もなく潛水艦の所在を發見し、輕巡洋艦バーミンガムとチエスターを旗艦とする九十隻の驅逐艦（六隻はユータの側に殘つて居た）は之を取圍んで無數の水中爆雷を投下した。此等の水中爆雷は幸にも同艦に致命の損傷を與へなかつたが、斯種の快速艦船に取圍まれては潛水艦は如何ともする能はず、遂に水中を潛航してユースレス灣内に遁込んだ。然るに玆でも亦米軍の飛行機に發見され、之を追擊する驅逐隊の爲に其退路を斷たれたので、其周圍に多數

の水中爆雷を投下されて操縦不能の狀態となり水面上に浮出した。次で驅逐隊よりの集中砲火を蒙り、船體全く破壞されて、何等降伏の意志を表示することなく沈沒した。此潛水艦は追擊せらるゝ際二發の魚雷を發射したが、何れも命中せなかつた。此報一度東京に達するやアヂャックスの沈沒もユータ、プロリタの損害も何れも皆此潛水艦が與へたものとして新聞紙は連りに其勳功を誇大に報道した。勿論日本の官憲は事の眞相を知つて居たが、戰死した同艦の乘員に對して死後の進級や叙勳があつたので大袈裟に吹聽されたのだ。

時にトレントンはショール灣内に敵潛水艦の潛伏することを知らずに、長官よりの無線電信により水雷戰隊に合した。艦隊は此日の殘りを其編成替其他ユータの安全と修理に要する諸準備に惱殺され、翌朝を以て以前と同樣の航行序列を作り、トレントンを先頭として太平洋に向ひ航進した。テンブルトン提督はトレントンが太平洋方面の天候險惡なるを報じたに

も拘らずコックバーン水道を經て太平洋に出ることに決心した、蓋しマゼラン海峽内の航路中長距離のものを取るときは、潛水艦の襲擊機會を大ならしむるので不利なりとの智識に左右せられた爲である。斯くて全艦隊はフロウワード岬を通ぎ、今や正にコックバーン水道に入らんとして之に向針せる時、偶ま二發の魚形水雷は相次で爆發し、其一は第二戰隊の右翼列にある運送船マウントエバンスに命中し、第二發は左翼列の給油船トリニチーに命中した。此等の魚雷は其航跡より見て中央列の戰艦に向て發射せられたるや疑ひなきも、戰艦は迅速に變針したので其危害を免るゝを得た。

茲にかて艦隊は斯る際に處せんが爲め、豫め下されたる訓令に從て蛇航運動をなし、且出來得るだけ速力を增すと共に、驅逐隊は主隊と發射魚雷の進行し來る方面との間に在て飛行機と共に此魚雷を發射せる物の何物なるかを搜し始めた。

此魚雷の命中を受けた二隻の特務船の救助に眞先に向つたものは就中トレントンであつた。該艦は當時第一戰隊の後尾に在つたが、トリニチーに近づくや同艦の五百五十呎の長き舷側は伊五十三號の好個の標的となり爲に二發の魚雷同艦の中央に命中し、ショール灣に避難するの已むなきに至つた。不幸にして浸水の爲め機罐の火消滅し、爲に速力を出すを得ず即ち陸岸に擱坐すること不可能となりて、附近の驅逐艦が其乘員を移乘せしめた間もなく沈沒した。此巡洋艦の雷沈は今は魚雷を發射し盡した日本潛水艦にとりては大なる成功であつた。玆に於て暫くの間は飛行機や驅逐艦は附近の海面を捜索したが、濠氣深くして遂に同艦を發見することが出來なかつた。而して水中聽音機を以てするも何等の音響無りしより見れば、恐らく同艦は海峽の海底に靜に鎭坐して居たものであらふ。

此時に當りマウントエバンスも亦沈沒したが、トリニチーは二隻の掃海船に曳かれて其船首を沒しつゝ漸くプンタアレナスに入港するを得た。

該船は直に修理に着手せられたので、此智利の一港は米國艦隊の不幸の爲めに修理や其他で非常な收得があつた。

斯くてテンプルトン提督は海峽內に在る敵潛水艦の脅威を撲滅せんとしてバーミンガムと四個の驅逐隊に命じ、該方面の敵を捜索せしめ、艦隊の殘餘は陸地を遠く離れて北航しつゝバルパライゾ迄北上した。在サンチアゴ米國公使は日本人が中立國たる智利の領海を侵害した事に就て强硬な抗議を提出した。此種の問題は世界大戰中獨人の犯せし時以來解決に困難なるものであるが、智利の地方官憲は右の抗議に對し、中立を侵害しつゝある日本潛水艦や他の交戰國軍艦を嚴に取締るの目的を以て數隻の軍艦を同方面に派遣せることを回答した。將又此政策の第一着歩としてプンタアレナスに在る日本の副領事は其モーターボートを軍事上の目的に使用するを禁ぜられたが、之が爲め遂に伊五十三號を捕獲し得ることゝなつた。即ち之より十日後、同艦はサンタ・イネズ島の南端附近なるマゼラン

海峡の最南の一小灣に於て二隻の智利驅逐艦に發見せられ、砲撃の後遂に降伏した。時に同艦は其少し前に擱坐損傷して居たので潜入不可能な狀態に在り、船體も亦數ケ所損傷し、且水中聽音機も破壞されて居た。斯くて同艦は船内に武裝衛兵を附し、智利驅逐艦之を護送してタルカホーノに抑留された。艦長山岡小佐は、日本公使を通じて上官より、同艦長が二隻の米國特務艦を沈め、且第三艦を不具と爲した勳功を嘉納する旨通知せられたにも拘らず、此降伏を不名譽として數日後に切腹した。

伊五十三號が智利の驅逐艦に發見せらる前に、マゼラン海峡の捜索に向つた米國の驅逐隊は、南米大陸に出入する多數の水道や南緯十五度とホルン岬間に在る附近の諸島嶼を隈なく捜索した。即ち六隻宛より成る各驅逐隊は一定の海面を受持ち、潜水艦の潜伏個所と思はるゝ所を出來得るだけ最小時間内に捜索した、但し水深比較的淺き所は右の捜索を見合せた、これ淺水に於ては潜水艦は其姿を沒するに困難であるからだ。

四、大西洋艦隊目的地に到着す

殘餘の米國艦隊が巴奈馬及サンヂーゴへの航海は比較的平穩無事で、主力部隊は九月九日を以てサンヂーゴに到着した。此長途の航海の後數隻の軍艦は機關の掃除を行ひ、諸種の修理をなし、而してサンヂーゴの修理力を弛めんが爲には數隻はメヤー島やブレマートンで修理せしめた。此等諸艦の戰備完成したのは其後約一ケ月後であるが、ユータは尙修理中であつた。巴奈馬運河は九月末に開通したので艦隊が此長途の航海により得た所のものはテンブルトン提督麾下の未熟の乘員に對する運用術の練習に外らなかつた。

マゼラン海峡戰の影響は日米兩國に對して稍々異るものがあつた、日本側では新聞紙上の記事は愼重に書かれるので、米國の太平洋岸に對する襲撃の爲に熱狂した國民は今や山岡少佐の自殺を聞くに及んで其頂點に達

した。斯くて山岡少佐は伊五十八號艦長黑井少佐と共に英雄崇拜の的となつたが、政府は之を利用すべく其機を逸せなかつた。

之に反して米國に在ては民衆は寧ろ此事件に對して平氣であつた、勿論一部の者は海軍省とテンブルトン提督の措置を非難したが、多數の者は提督は重大なる損害を招くべきに、熟練と才智に依り之を最少限度に減じ得たることを主張して、提督に對する如上の非難を不當なりとした。併しながら之を全體より見れば、此事件は政府をして海軍の行動に關する新聞紙上の報道の一部を檢閲することを容易ならしむる結果となつた。實に日本人がマゼラン海峽に米國艦隊を要擊したのは、艦隊の行動が時々新聞紙上に現はれたので、日本が之を利用したるものであるとの政府の指摘は至當であつた。

之を純然たる客觀的見地よりすれば日本潛水艦は寧ろ幸運であつたと結論し得よう。彼等は實に其要擊計畫を敵に知らるゝ事なく、最も有利な

位置に於て適當の時機に行はんとして有ゆる注意を拂つたのだ。而も伊五十八號が飛行機より發見せられた偶然の事情の爲に、二艦は敵の知る所とならずして協同して襲擊を決行することが出來なくなつた。伊五十三號の山岡少佐は確に最大の熟練を以て其艦を操縱した。然も彼の艦が遂に抑留せられたのは何等驚くに足らずして、恐らく日本海軍々令部が豫期した所であつたのは其發行せし戰史の注意に徵するも明かである。此要擊の實施に就ては一部の人士は尙多數の潛水艦を使用するを可なりとするも、當時の有ゆる事情より判斷すれば寧ろ二隻が理想的であらふ。日本が此目的に使用し得る潛水艦の數如何を別問題とすれば、之に任ずる隻數を增せば增す程過早に敵に發見せらるゝの危險がある。

此件に關して米國海軍の取れる措置の範圍內に就て云へば、同國海軍省は非難を免るゝを得ない。實に海軍省としては少くも此種の要擊の可能なるを考慮して、之に處すべき事前の策を運らすか、又はテンブルトン提督

に與ふるに航路撰擇上の一層の自由を許さねばならなかつた。提督は海軍省の命によりブンタアレナスへの寄港を餘儀なくされた、然も恐らくは重大なる損害を受くべきに之を救ひ得たのは、トレントンをしてホルン岬を迂回し、後ショール灣の集合地點に來るべき至要なる命令を下した提督の鮮かなる手腕に歸せねばならぬ。

第十一章　米軍の小笠原占領計畫

米國政府攻勢を取るに決心す――モーリソン提督小笠原島の攻略を主張す――米國潛水艦の偵察――小笠原島方面偵察――小笠原群島の地形――小笠原占領軍の編成――ダーリンガー提督の危懼

一、小笠原島の占領計畫

此時に至る迄日米戰爭の進行は奇妙にも何れにも其勝敗が決定的で無つた、而して其正味の結果に就て日本が米國よりも一層多く滿足したか否かは疑問である。日本が米人にとりては幾分苦痛なるも、實際には皮相的だけの打擊に過ぎなかつた米國の太平洋岸に對する攻擊以外に、西太平洋より米國の艦隊を一掃し得たのは事實である。然しながら日本の手はそれ以上を縛られて居る。見よ米國に對して直接の攻擊を加へ得る可能性

は、今は獨の攻撃よりも餘程制限されて最早其方法が無ひ。何となれば或種の重大な軍事的行動を企圖せんには之に先ち米國艦隊を撃滅又は活動不能の狀態に置くことを先決條件とするも、此艦隊は何等の損害なく存在し、然も時日の經過は一層其勢力を優大ならしむるからである。戰前に於て日本に於ける一部の空想的著者等は日本の常勝軍を以てする布哇の攻略を畫き、其或者の如きは更に進んで其全陸軍を加州に上陸せしむることを豫言した。併しながら斯種の空想は獨り日本人のみに止らずして、數年前米國軍事評論家の一人なるホーマー・リーは其著『盲蛇』（ベリー・オブ・ザ・ノーランス）に於て、日本軍が容易に華盛頓、オレゴン、加州の諸州を攻略し、之を蹂躙し得ることを示して居る。斯る侵略の妖魔に對しては西洋に於ける一部の新聞紙は之に共鳴したが、冷靜なる新聞雜誌は斯種の恐怖を一笑に附した。彼等は曰く、日本は米國艦隊あるにも拘らず、四千五百浬の太平洋を越へて如何にして其陸軍運送船を太平洋の此岸に送るを得るかと。實に如何なる國民も、特

に日本の如く其治者が戰爭術に深く通曉せる國に在ては、其軍を全滅確實なる戰場に派遣せんとするが如き夢想を懷くものでない。布哇に對する遠征も亦之と同樣に危險である、何となれば米國の大艦隊が戰備を完整して同島に在ることは何人も知る所であるからだ。桑港の一新聞紙アーゴノートは嘲笑して曰く、日本軍の米國侵攻を話すよりも寧ろ米軍の日本進攻を話すに加かずと。

然るに例へアーゴノート紙のみ其眞相を知れりとするも、米軍の日本進攻と餘り大差なき計畫は當時華府に於て研究されつゝあつた。即ち政府當局者等は今は日本が速に和を乞ふべしとの獨の空想を打捨てゝ、目前の戰略的戰爭中止の狀態を終結せしむべき方法を講じ始めたのだ。實に此戰略的戰爭中止の萎靡的影響は米國内に現はれて來たので、彼等當局者等は戰爭を決定的に轉向せしむるに有望なる手段を採らんとするに傾き始めた。此時に當り米國内に於ける各種の事業は困難となり、財政上の晴雨

計は不安を示し、株式相場は有ゆる新たなる風說に對して恐慌の表徵を示しつゝあつた。爭鬪を好む平和主義者は治安妨害的演說を試みて之を國民の不良分子に傳へ、不安は國內に滿ち、社會の組織が積極的に危險となつたと云ふは過早ならんも、國家の將來を憂慮的に畫ひた杞憂家は必ずしも絕無ではなかつた。今や議會の協贊を經た陸海軍擴張用の大經費は少額の費用を以て防禦的戰爭をしようとの主義を根柢に於て覆やした。內閣の閣員曰く、今迄採り來れる防禦的戰略を捨てゝ、大規模の攻勢作戰を斷行することは、如何なる方面より見るも、結局に於て廉價では無いかと。米軍の背後に在る國力の全部を以てすれば、驚愕すべき打擊を敵に與へ得て、戰勝多少容易なるべしと信ずる敵の意志を挫き、依て以て城下の盟を爲さしむることが出來る。素より斯種の作戰は危險を伴はんも、最後の成功を收め得る望みも無くて、曠日彌久に戰爭を續くるよりも、如上の方法は敵にとつては一層恐るべきものではあるまいか、今日迄陸海軍力を增す所の努力

が鼓吹されなかつたのは明諒なる目的が缺けて居たからである。斯る明諒なる目的なくんば陸海軍の主腦部は何を要求すべきやを詳知するを得ない、將又此不確より金錢の徒消と二重の努力とが避く可らざる結果となつて現はれて來るのは當然である。

當時の戰勢に於て最も必要としたものは各軍間の密接にして然も最も效果ある協同作戰を安全ならしめんが爲の明確なる作戰計畫である。斯る計畫にして一度策定せらるゝ時は之が實施に要する材料を準備することは簡單である。然るに實際に於ては陸軍は海軍と各種の兵器を得んことを競爭しつゝあつた。此等は陸海軍省が何れも非常に莫大な量を注文したにも拘らず、其使用法に就ては明確なる考へは無つた。例へば陸軍省は要塞砲兵の鋲道移動式砲臺を增設せんが爲め、最大口徑砲の鋲道式砲架五十個の製造を契約した。此種の砲は敵の戰艦に對して有效ならんも他の目的に向ては使用の途なく、然も之を以て日本の戰艦隊を砲擊せんとす

るが如きは其機會極めて僅である。

之より嚮き六月の始め內閣の主なる閣員及陸海軍の高級士官より成る會議は白堊館に開かれて、軍事上の全形勢を熟議したが、席上海軍作戰部長モーリソン大將は其幕僚の作成した一の作戰計畫を提出した、之に依れば大將は橫濱の東南約五百浬の太平洋上に在る小笠原島の占領を力說したのである。此計畫は海軍作戰部が此戰爭を豫想して餘程以前に陸軍大學校及海軍總務局と共同研究して作成した太平洋に於ける數個の作戰計畫案の一つである。然るに此特別計畫は海軍の二三高官以外には同意されなかつた、實に多數の者は之を根據なき危險なるものと認め、經驗ある陸軍士官等も之に同意するに遲疑した。然るに如何なる反對論も此計畫に對するモーリソン提督の自信を覆へすに足らなかつた、提督は實に有ゆる反對論に對して、如何にも最もらしく反駁するの準備を整へて居たのだ。勿論此計畫を無銃砲で實行不可能なりとして率直に反對した職業的戰略家

等を說伏することは出來なかつたが、モーリソン提督の雄辯は遂に內閣の容るゝ所となつた。然るに如何なる大遠征にも之が成功に第一の條件たるべき、目的を同ふし、且各軍主腦部間の相互の確信を保持することが不幸にして缺けて居た。併しながら一度此計畫が決定せられた以上は、關係各部は成功を收めんが爲めに忠實に之を實施した。

此時より以來新聞紙上には右の計畫に對して相矛盾せる多くの說が現はれたので、今左に簡單に此計畫を說明して見よう。モーリソン提督は秩序的の攻勢作戰を開始する以前に敵の海岸より合理的の距離內に在る一の根據地を占領せねばならぬとの前提の下に、結局二つの作戰目標を撰定した、一はグワムで他は小笠原島の二見港である。グワム撰定の理由は次の通りである、卽ち一方には日本との距離が大に過ぐる結果、之を根據とすれば日本沿岸の封鎖を不可能ならしむるの不利あるも、他方に於ては此島を奪問せば、日本がこれ迄絕對的優越を保持した海面に米國艦隊の全力を

展開せしむる事が出來る。今若し米國艦隊が西太平洋に侵入して一度其地歩を固むるを見ば、日本の主力艦隊は勢ひ出擊すべく、茲に兩軍主力の艦隊戰鬪を行ふを餘儀なくするであらふ。況んやグワムよりすれば米國の巡洋艦は日本が戰爭の繼續に必要なる物資の輸送路たる歐洲航路をも遮斷し得るに於てをや。支那との交通線の如きも黃海、日本海に侵入する航續距離大なる潛水艦を用ふればグワムを根據として之を攻擊することが出來る。加ふるに戰爭の進行上要すれば比島の奪回の如きも之を踏石とすれば非常なる價値がある。只だ茲に困難なるは直接の攻擊に依て之を奪回するの不可能なる一事で、此點はモーリソン提督も海軍將校の多くも皆心から之に一致した。即ち日本は必ずや攻擊せらるべきを豫期して奇襲に對する準備を爲せるは疑ひない。グワムは陷落以來其防禦力を增大するに充分の時日があつた、而も情報に依れば日本の潛水艦と航空機はマリアン群島附近に於て特に其行動活潑なるを報じて居る。されば日本軍

艦は米國の遠征軍を迎ふるに先ち、充分なる時間を得る樣、事前に之を發見するを得べく、此等の理由や其他之を說明するの必要なき他の理由によりグワム奪回說は放棄された。

茲に於てモーリソン提督は小笠原占領說を最も有望なるものとして推奬した。提督曰く此計畫は非常に大膽なるもので、其大膽なるが爲に成功の機會があると。更に曰く、日本は其大軍港より一日航程の距離に在る該島を占領せんとするが如き我が大膽なる作戰をば必ずや豫期せないであらふ、二見港に防備があるのは明らかなるも然し大なるものでない。抑も奇襲は如何なる場合に於ても計畫の關鍵である。米國の戰艦隊は遠距離より陸軍運送船隊の航海を掩護すべきも、直接に小笠原島の陸上砲臺に對せしめんとするものでない。敵の抵抗は我が飛行機よりの猛烈なる毒瓦斯攻擊に依て之を壓服する積りである。此毒瓦斯はエッヂウード會社の製造に係り、八百四十七號と稱する物で、之を海方面より吹送し、敵砲臺に充

滿せしむる時は、砲員は數秒にして人事不省に陷るべく、然も之に對しては如何なるマスクも有效でない。此毒瓦斯攻擊に次で二萬の撰拔せる陸兵と砲兵及年需品を載せ、且速に陸揚し得べき特別の裝置を有する運送船は二見港內に入る、而して此占領軍には一萬八千碼の射程を有する高速の七吋及百五十五密砲五十門を附してある。加ふるに突如瓦斯の攻擊に逢へば日本の守備軍は砲を準備する暇もなく、之に壓倒せられ、或海岸砲臺の如きは之が爲に其儘そつくりと占領することも出來よう。事玆に至らば小笠原島より僅に五百浬を距る橫須賀軍港より日本の主力艦隊が小笠原方面へ出擊すべきを豫期し得べく、これ大に望ましきことである。しかるに此艦隊は小笠原島に達するや否や、其主なる島嶼は旣に米軍に占領せられ、且米國の遠距離砲が所々に配備されて居るのを發見するであらふ。果して然らば米軍を驅逐せんには先づ此等の砲を沈默せしむる必要あるべく、然もグワムに於て貴重なる敎訓を得た日本人は、隱蔽された陸上砲臺に對

しては最大艦さへ危險なるを知つて居るので之を敢てせないであらふ。之と同時にミツドウエー島を前進根據地とし、ウエーキ島を輕艦艇や潛水艦の中間寄港地とする米國の主力艦隊は小笠原方面に近づき、旣に陸上の砲臺攻擊に彈藥を費消し、恐らくは二三の軍艦をも喪つて居る日本艦隊を攻擊することが出來よう。斯樣な狀況の下に於ては此艦隊戰鬪は米軍に容易に殲滅的決勝を與へ、一擊の下に戰爭を終結せしむることが出來る。米國が小笠原を占領し、米國艦隊が之を根據として日本沿岸に對し有效なる攻勢作戰を實施し得る樣頗る有力なものと爲さば、如何なる場合に於ても日本艦隊をして晩かれ早かれ出擊を餘儀なくせしむるに至るべく、然も此日本主力艦隊の擊滅こそは結局に於て我作戰目的の一である。以上はモーリソン提督の作戰計畫の要領であるが、其如何なる結果となつたかは逐次に說く所に依て明かであらふ。

二、小笠原偵察隊の出動

此小笠原占領の計畫を實施せんとするに當り、第一に爲すべきは日本主力艦隊の所在を知ることである。此主力艦隊は四月中小笠原島方面に現はれたと報ぜられたが、數日以上同方面に殘留するものとも思はれない。玆を以て此の外見上不可能なる小笠原方面の偵察任務は、之をS級の潛水艦六隻にV第一號を加へた潛水戰隊をして之に當らしむることゝなり、其一時的の前進根據地としては二見港の東方約千五百浬のウェーキ島を以てすることに決定した。ウェーキ島は一の珊瑚礁島に過ぎずして內方に湖水を有し、端舟やモーターボートは珊瑚礁間の水路を傳ふて內湖に入ることが出來る。該島は碇泊又は給炭給油を爲さんとする船舶に對して風浪を妨ぐ以外碇泊上の施設は無い。戰爭數年前米國の一海軍士官は同島に就て左の如く述べて居る、曰く、『島の全面積は約二千六百エーカーで、其

大部は海面上十乃至十五呎である。此群島は長さ約四浬半、幅一浬半で、西北より東南に亘り、風は主として東より北東間なるを以て、之に入る船舶は平常風浪に對して安全である』と。

十月二十三日V第一號（艦長グローブス中佐）はS級潛水艦二隻を伴ひ小笠原偵察の目的を以てウェーキ島を出た。此等の諸艦は何れも最大燃料油を搭載して居たのである。二十八日夕刻V一號は其僚艦二隻を東方三百浬に殘しつゝ單獨小笠原島に近づき、父島を發見して之を偵察せんとした。該艦長は自艦の安全並に、日本人の知る所とならざらんが爲めに至大の注意を拂ひつゝ行動した、何となれば小笠原占領計畫の成功如何は日本人が全然之を知らざることを第一の條件とするからである。斯くてV一號は何等日本大艦隊の姿を發見せずして三日間該島の沖に留つたが、晝間は多く海底に鎭坐し、之が爲には二見港の北數浬にある一灣を其避泊所とした。該灣は水深百呎以內、海底は稍堅く平坦ならざるも、休息場所とし

ては最も良好である。艦は日中時々潛望鏡のみを水面上に現出して陸影を觀測し、以て自艦の位置を確めた。或時一汽船の艦上を通過する音響を聞き、又少くも一回は確に一隻の驅逐艦が附近を航進する推進機の音響を聞ひた。薄暮少し前には潛水艦は時として海底を離れて水面上に浮出し、陸地を距る約十五浬の所に於て蓄電地を課電(チャージ)し、又乘員をして最も渇望せる新鮮なる空氣を吸收せしめ、甲板上に運動せしめた。勿論此課電中の音響は日本の哨艇に發見せらるゝの危險あるも已むを得なかつた

二十九日正午グローブス艦長は再び危險を冒して二見港口の一浬の所迄接近したが、這回も亦港内に大艦隊の碇泊せる形跡が見へなかつた。次の夜も亦島の周圍を巡航したが同樣であつたので、遂に十一月二日を以て偵察を終り、ウエーキ島に向ひ歸還の途に就ひた。該艦は小笠原島の東三百浬の海上に於て僚艦S二十八號、同四十號及R二十三號に會し、玆にV一號の全乘員の交迭を行ひ、グローブス艦長と其部下はS四十號に乘組み、ブ

ライアント少佐並に其部下の新たなる乘員はV一號に乘込み、而してV一號はR二十三號より燃料油を補充した。このR二十三號は潛水艦に改造されたもので、S二十八號に曳航されて根據地に歸つた。斯くて其巧妙なる措置の爲めV一號は四十八時間以内に再び小笠原方面の偵察任務に服することを得た。

其後此監視任務にはV三號も來つて之に加はり、繼へず該島を監視したが、一も日本人の知る所とならざりしは、此困難なる任務に對して、乘員が如何に熟練且思慮周到なりしかを雄辯に物語るものである。數ヶ月に亘る此監視中重要なる事件は僅に一回起つた、これ卽ち十二月四日に日本の主力艦隊が二見港に到着したことである。時に哨戒中のV三號は弟島の北西三十浬の地點に於て之を發見し、其大戰艦なるを突き止むる迄水面上に留つて居た。次で同艦は潛入して其日の殘りを海中に暮した、蓋し海深餘りに大にして海底に錨坐するを得ず、爲に電働推進機關を用ひて海中を巡

航するの外無つたのと、日本軍艦の水中聽音機に依て自艦の所在を暴露せんことを恐れたからである。小笠原方面の監視に任ずる潛水艦は敵を襲擊す可らずとの嚴命を受けて居たので該艦は勿論襲擊を行はなかつた。日本艦隊は一日を二見港に過ごして出發したが、偶ま七日に至り僚艦V一號來會したので茲に哨戒力を新たにするを得た。

日本艦隊が小笠原島に滯在する時日を知ることも亦米軍にとり最も重要である。十二月五日日本の主力艦隊は再び二見港を出たが、米國の潛水艦は日本の戰艦が大砲射擊を爲しつゝあるを遠距離より認めた。小笠原島附近に於ける此等日本艦隊出動の目的が訓練の爲のみなるは明かで、他に戰略上の意義を有するものとも思はれなかつた。然るにも拘らず彼等の出動はモーリソン提督の計畫に一の不安を與へた。他なし米國の小笠原占領軍が該島に達した時、若し日本の戰艦あるに於てば非常な危險に遭遇するや疑いなひので、此危險を防がんには、日本艦隊が小笠原訪問の後横須

賀に歸つたことが確實に知らるゝ迄、運送船隊の出發を見合はすることである。斯くて茲に哨戒潜水艦は一層の努力を以て其任勞を遂行することが二重に重要となつた。

此時に當り米國に於ける小笠原大遠征の準備は活潑に進行しつゝあつた。然るに這回戰場の景況は米國海軍士官にして之を知るもの少く、僅に其二三のみ該島を訪問せしに過ぎない。抑も小笠原島は千五百四十三年西班牙の探險者 Villalobos に依て初めて發見され、其後五十年を經て日本の船乘り小笠原貞賴に依り再び發見されたものである。十九世紀の初頭米國の捕鯨業者等は時々同島に立寄り、千八百五十三年には米國水師提督彼理も亦軍艦サスケハンナ、サラトガの二隻を率ひて同島を訪ふた。千八百六十一年政府委員の率ふる日本植民の一隊は該群島中の父島に上陸したが、土地の不健康に基けるものゝ如く間もなく同島を去つた。茲に奇とも云ふべきは小笠原島に於ける白人移住者の第一人は米人 Nathaniel Savory

なりし一事で、彼はマサチユセッツ州のベツトフオールドに生れ、漂泊者として所々を轉々せる中、千八百三十年に父島に來り、マリアン群島中の土人の娘と結婚して父島に移住した。彼は多くの子供等に圍まれて多年の間同島に住み、千八百七十四年齢八十の高齢を以て同島に逝ひた。日本は千八百七十五年以前には該群島に左迄注意を拂はなかつたが、此年英國が同島を併合せんとするを知り、委員を派遣して之を先取せしめた。此委員等は十一月二十六日二見港に上陸し、日本天皇陛下の名に於て公式に之を占領した。

Bonins 或は日本の公けの名稱を用ふれば小笠原島は上記せる第二の發見者の名を取りたるもので火山島である。群島中の最大島は父島、母島、及兄島にして、父島の二見港は其主なる港である。該港には官衙、測候所、守備軍司令部あり、又布哇より該島に通ずる太平洋海底電信所がある。該港は絶大なる火山の凹地に過ぎないが、接近するに容易で、且風浪に對して良好

に庇護されて居る。多くの場所に於ては斷崖海岸より直立し、海岸の極近くの外は到る所水深大である。該港に於ける防備の狀態は之を確實に知るを得ざるも、港口を俯瞰する高地に數門の重速射砲が裝備せられ、該島の東南側なる一灣にも亦同樣のものがある位に過ぎない。該方面に於ては水深大なる爲め機雷の敷設を困難ならしめ、且米國の潛水艦が港口迄殆んど接近し得たより見れば機雷の敷設されて無ひことが判る。但し萬一の場合に應ずる爲め之が占領に任ずる米國の運送船及軍艦は何れも防雷機を取付けた。

三、小笠原遠征軍の組織

米國の占領軍を輸送する運送船は總數二十五隻の汽船より成り、最低速力十二節である。搭載せる砲及他の重量大なる兵器の上陸用としてはデリックや舷側に大なる艙口（ポート）を設備した。此等諸設備の試驗はビューゼッ

トサウンドに於て行はれたが、之に依れば七吋砲の如きも短少の時間内に倉庫より取出して之を埠頭に運搬し得るのである。運送船の積荷中には尚八十の飛行機あり、其大部は戰鬪機である。此等の飛行機も揚陸後數時間内には飛行をなすことが出來る。占領陸軍はダイクマン大將の指揮下に完全に編成された一師團より成り、之に多少の部隊を增加した。其編成は左の通りである。

歩兵二旅團

野砲兵　三聯隊

重砲兵　一聯隊

信號隊一隊

毒瓦斯隊一大隊

工兵一聯隊

衛生隊一隊

其他航空隊、自働車隊、彈藥隊等の若干

其全兵數約二萬二千人である。

二見港は其面積の狹小なると、利用し得べき埠頭の數に乏しひので、モーター式艀船の一隊は運送船が荷揚げを爲す間之を援助することゝ定められ、此等の艀船の多數はウエーキ島より二見港への航海中各運送船に其一又は二隻を曳航せしめた。

護衛艦隊はドイル海軍少將之を指揮し、新式巡洋艦ミネアポリス（一萬噸、數門の八吋砲を有す）巡洋艦コンコルド、マーブルヘッド、驅逐艦三十隻、並に水雷母艦バッファロウ、メルビルより成つた。二見港に對する最初の毒瓦斯攻擊計畫は航空母艦サラトガ、ラングレー、ハウストン、シャフターよりの飛行機百機を以てすることゝせられた、此航空母艦の中後の二者は大型汽船を改裝したものである。又ダーリンガー提督麾下の戰艦隊はミッドウエー島に集中せしめらるべく、之より無線電信を以て運送船隊と連絡をとりつゝウエーキ島方面に掃蕩を行ふにあつた。其他給油船、給兵船は

必要の場合にはウエーキ島に於て艦隊の補給を爲すことゝ定められた。

如上の諸行動は陸海軍共同の下に策定された作戰豫定表に準じて實施することゝし、豫想し得べき有ゆる不時の事變に對しては之に酌量を加へた。若し父島に對する米國陸軍の攻擊が横須賀に在る日本の主力艦隊を出擊せしむるならば、米國の戰艦隊は之と合戰せんが爲め全速を以て小笠原島に向ふべく、勿論ダーリンガー艦隊は到着に先ち既に多量の燃料を消費せんも、日本艦隊にして全滅するか、又は損害大ならば敢て顧みるに足らない、何となれば小笠原島は既に米軍の手中にあるから、給油、給炭、給兵船は比較的容易に同島に航進して之に補給を爲すことを得るからだ。只だ此計畫の缺點とも云ふべきは小笠原島に一の船渠をも有せざることで、損害大なる艦は修理するを得ない。併しながら日本艦隊と適當に會戰するを得ば、米艦隊の優越なる砲力は迅速にして完全な勝利を得さしむるに違ひない。斯くて小笠原島沖に在る米國潛水艦の有利なる報告を基礎として

小笠原占領軍は十二月二十日ホノルゝを出で、其六日後にミッドウエー島に、一月二日頃ウエーキ島に到着し、小笠原着は同八日と豫定された。十一月下旬小笠原占領に任ずる陸軍は總て布哇に集中し、當時多數の運送船も同地に到着したので、士官や兵士は上陸運動の特別演習を行つた。日本艦隊が最近に小笠原島に到着したのは十二月四―五日で、從來の經驗よりすれば凡そ二ケ月間は再ひ來るの見込が無ひものと思はれた。而して若し占領軍にして同地に向ひつゝある時、日本軍艦出現せば、警戒に任ずる米國潛水艦は適時に之を警報することが出來る。總て此等の事情を考慮した後海軍參謀部は原計畫を承認するに決し、運送船隊は護衛艦隊と共に豫定表の如く十二月二十日にホノルゝを出發することゝ定められた。

此日午後四時陸軍兵を滿載せる二十五隻の運送船は泊地を出で外海に於て艦隊と合した。時に日本潛水艦の數隻は既に布哇方面に活動し、眞珠港沖には既述せるが如く機雷を撒布したので、米國の艦隊、運送船は萬全を

期しつゝ遠算なきに努めた。茲を以て艦隊は其前方十浬に掃海隊を附し、又驅逐隊は敵潛水艦に對する障壁(スクリーン)となし、全航海中此任務に服せしめた。斯くて途上無事二十六日にはミッドウェー島に着したが、此時戰艦隊の大部は既にセワード水道に碇泊して居た。此時迄に陸軍兵は既に航海に馴れ、士氣揚り、此大遠征の成功を確信したが、上官の中には悲觀者も在つた。ダーリンカー提督の如きも此計畫に深き疑懼を懷き、既に海軍省に向ひ覺書を以て其意見を上申した。提督は此計畫が海軍戰略の第一義に悖るを指摘し、マハン、コロム、其他海上權力史の權威者等は何れも多くの戰例より、敵國の領土に對して作戰せんとする陸軍兵を上陸せしむるに先ち、先づ海上を管制するの重要なる事を示して居るが、今此場合に於ては斯る管制は行はれて居ない。此計畫は敵艦隊を誘出するには理由あるも、其危險は提督自身の語を籍りて云へば『寒心すべきもの』で、『向ふ見ずの賭事に甚だ近きものである』と指摘した。然るに提督の非難は遂に內閣の容るゝ所

とならず、到底其決心を翻へすに足らずと見たので、提督は少くも不可能と確信した自己の任務を堪へ難き苦痛を以て最善を盡さんとした。

第十二章　小笠原遠征の失敗

遠征軍暴風の爲め大損害を受く――艦隊との連絡亂る――日本電報に接す――米國遠征軍の退却――兩海軍の戰鬪――遠征軍殘部の歸還

一、遠征軍暴風の爲め大損害を受く

遠征軍はミツドウエー島に於て最後の協議をなし、二十四時間の碇泊の後、十二月二十七日を以て第二段の航路たるウエーキ島への一千三十四浬の航海に就き、戰艦隊は一日後れて同島を出發し、運送船隊よりも北方の航路を取つた。然るにこれ迄良好なりし天候は二十九日に至り俄然として一變し南西の暴風と變じた。運送船は山なす大波に翻弄せられ、端舟や甲板上の機械は破損し、見張りは水烟の爲に最早前繼船の船尾燈を見ることが出來ない、此船尾燈は敵海に近く航行する時點燈するを許された唯一の

燈光で、前續船の位置を表示するものである。三十日午前恰も暴風が最高頂に達した時、運送船マークエットは後續船アーリントンと衝突し、後者の左舷クオーター舷側に大なる罅裂を與へ、且舵機を損じて操縱不可能となつた。此損傷船は間もなく浸水し始め、遂に如何ともする能はざる有樣となつた。茲に於て探照燈を用ひて離散せる運送船の殘餘に危急を告げたるも之亦如何ともするを得なかつた。此時マークエットの船内にあつた千二百の陸兵は甲板上に集合したが、大部は浪の爲に浚はれ、卸された端舟は一分間經たぬ間に沈沒した。時に其附近に在つた驅逐艦ソーマース、ウオーデン及バンクロフト三隻の艦長は之を見るや大膽にも同船に横付けし、自艦の損害をも顧みず乘員の救助に從事した。陸軍兵の大部は救助の近きにあるを見るや海中に飛込み、之が爲め多くの者は溺死したが、其五百三十名は驅逐艦に救助された。斯くて衝突後半時間にしてマークエットは船尾より沈沒し始め、乘組員を合せて九百以上の人員は溺死した。

然るに不幸は茲に止らずして午前一時三十分にはアーリントンも亦浸水多量にして操縦困難なるを報じた。同船は獨にマークエットと衝突の際船首を損じ水線下に浸水したのである。斯くて前部コンパートメントの一は漲水し、前船橋は殆んど浪に洗はれ、椎進機は水上に露出するに至り、航進の危險を感じた。當時海上若し平穩ならは沈沒を免るゝを得んも、險惡なる天候に對しては如何ともするを得ずして今は船を見捨つるの外は無ひ。船長スターケーは驅逐艦に油を撒布せんことを乞ひ、斯くして人員を載せたる多くの端舟は軍艦に達せんとした。他の者は海中に飛ひ込みて救出せられ、或は命綱に依て助けられた。午前三時アーリントンは沈沒し、約百五十名の者は之と運命を共にした。

翌日に至り風浪稍靜まつたので驅逐艦に收容された陸兵等は他の運送船に移され、前夜の悲劇が此遠征に一沫の暗雲を投じたるにも拘らず依然として航進を繼續した。此不幸は獨り大なる人命の損失を招ひたのみな

らず、彈藥及他の重要なる軍需品の一部も船と共に沈沒した。他の諸船も亦デリックや其他のギヤーを破損し、爲に、迅速に、揚陸せしむることに大なる障害を與へた。之よりも尙一層不利なことは舟舟を喪失したことで、暴風の襲來と同時に之を放棄したのである。此等の舟舟は砲や重量大なる軍需品を二見港に陸揚せしむる爲に準備されたが、其喪失は疑もなく揚陸の遲延となり、爲に、重大なる結果を生ずるものである。

護衛艦隊司令官ドイル提督は此狀態に接するや、此儘遠征を繼續すべきや否やに就き大なる疑惑を生じた。彼は護衛艦隊の最高指揮官なるが故に航海を繼續すべきやの判斷は一に彼の双肩に懸つて居る。然も彼は其安危の關はる所餘りに大なるを見るや、獨斷にて之を爲すことを嫌つた。當時彼は上長よりの命令により、ウエーキ島を出發してより上陸を終る迄は、日本の軍艦出現するに非んば無線電信の使用を禁せられて居た。彼は斯くして戰艦隊の司令長官や、彼に命令を與へ得る如

何なる上官とも通信することを禁ぜられて居たので、今此場合に當り如何なる決心を爲すも其責任は彼之を負はねばならぬ。斯くて提督は遂に陸軍總指揮官ダイクマン大將と協議したが、同大將は引返說に大に反對したので此まゝ行動を續くることに決心した。提督の措置が適切なりしや否やは其後絕へず論爭の的となつたが、不幸にして提督は此遠征に戰歿したので、彼の決心の理由を知る由も無ひ。唯だ吾人の知り得た範圍內に於ては、彼が此行動の中止を嫌惡した一事は其後の事實に照らして其當を得たものであつたと云ふ事が出來る。運送船二隻の沈沒、約千百名の陸兵、並に貴重なる軍需品の喪失は明かに重大なる打擊に相違なきも、成功の有ゆる機會を覆へすが如く其戰鬪力を弱めたものとも思はれない。之を嚴格なる實際的見地より評すれば、モーター式艀舟の喪失、陸揚諸機械の蒙つた莫大なる損害は尙一層の重大なる影響を及ぼすものである、何となれば此等は上陸作業に、緊要缺ぐ可らざるものであるからだ。然も占領軍は其軍需

品と共に日本艦隊に妨げらるゝ以前に揚陸せしめ得べしとのドイル提督の確信にも相當の根據がある、但し之には毒瓦斯攻擊が豫め有效に行はれることを前提とするのである。之に反して若し日本の戰艦隊が海上に出動しあらずとすれば、遠征軍の遭遇すべしと思はるゝものは日本の水雷艦艇、潛水艦、又は最も不利なる場合に於て輕巡洋艦位に過ぎずと想像し得るを以て、ドイル提督麾下の三隻の巡洋艦並に無數の驅逐艦を以て之に對抗することが出來る。此等の事情を綜合して考ふる時は、公平なる史家は、提督が行動を繼續することに猛然として決心したことを許容するに違ひない。

暴風と運送船二隻の沈沒の爲め、千九百三十二年（大正二十一年）一月八日の朝には、米軍の水雷戰隊は尙小笠原島の東方二百五十浬の海上に在つた。此集合點に於て遠征軍はミラー大佐の率ふる航空母艦の一隊と合する筈であつたが、何等此等の艦影を見ない。時に遠征軍は豫定表より四十

八時間遲れて此集合點に達したが、それでもミラー隊は待ち切れずに既に出發したものとも思はれなかつた。茲を以てドイル提督はミラー隊が附近に在るものと思ひ、四隻の驅逐艦を派遣して之を搜索せしめ、又巡洋艦ミネアポリス、同コンコルドにも各々飛行機を飛ばして之を援助せしめた。

然るに實際に於てはミラー隊は此集合地點より尙遙かの距離に在つた。彼も亦約十日前險惡なる天候に遭ひ、航空母艦シャフターは舵機に損害を受け、推進機の一も實際上使用不可能の狀態となつた。此舵機の修理は不成功に終りたるを以て、今は之を曳航するの外なく、幸に使用に堪ふる右舷推進機とサラトガの曳航とにより辛ふじて十四節の速力を出すことを得た。然るに此速力は艦隊の集合速力より幾分少ひので、集合點への航海は著しく遲れ、此勢を以て航進する時は右の集合點への到着は尙數日を後るゝことゝなる。斯に於てかミラー大佐は唯一の護衞艦シンシナチー（艦長エドワーヅ大佐）を分派して遠征軍と連絡を保ち、且其事情を說明せん

とした。大佐は麾下驅逐艦は之を派遣せなかつた、何となれば今や敵潛水艦の活動圈內に入り、然も操縱不可能の艦を率ふるので萬一の場合に處せんが爲である。

二、日本潛水艦の出現

一月八日の未明後間もなくシンシナチーは一千碼以內の距離に於て一の潛望鏡を發見し、殆んど同時に二個の魚形水雷が近づき來るを發見した。茲に於て同艦は直に轉舵して之を避けたが、發砲に先ち潛水艦は其姿を沒した。數分後には他の一潛水艦亦水面上に浮出したが、魚雷攻擊の距離以外であつた。此潛水艦も亦正確なる射彈を受くるに先ち潛入した。茲に於てエドワーヅ艦長は味方航空母艦が潛水艦の潛伏場所に突入せん事を恐れ、今は遲疑する場合にあらずとなし、斷然無線電信を以てミラー隊に敵潛水艦の所在を報じた。思へらく既に無線電信を使用せる以上は自己の所

在は如何なる場合に於ても前記の潜水艦に依て日本の司令部に報告せらるゝべく、況んや自艦は小笠原島に比較的近き所に於て敵に發見されたので、日本人は小笠原占領軍が近接しつゝありと結論し、直に之が對抗策を講ずるであらう。事茲に至らば全體の形勢は根本的に變化し、最早奇襲の如きは問題とならない。小笠原の守備軍は獨り警告せらるゝのみならず、通信距離に在る有ゆる日本軍艦は之を救助せんと同島方面に急航すべく、日本の戰艦隊の如きも横須賀に在るものと假定して、二十四時間以内には二見港に到着するに違ひない。斯樣な警報が既に日本人に依て發せられたことは目下無線電信の通信頻繁なるを見ても明かであると。實に一二時間内にシンシナチーは數多の無線電信を傍受したが、日本の信號なので其意味は不明であつた、但し其何を意味するやは素より明諒である。

敵の潜水艦の出現を報じた此シンシナチーの電信は午前六時三十分にミラー大佐の許に達した。今や事態の暴露せるを見て大佐の憂慮は陸軍

運送船隊の上に集つたが、其所在は未だ不明である。茲を以て大佐はシンシナチーに依然として運送船隊の捜索を繼續すべきを命じた。勿論大佐は斯る狀況の下に於ては小笠原島に對する攻擊計畫が實行し能はざるを知つて居た、果して然らば航空母艦は今は其必要は無ひ。即ち危險なる海面より之を引揚ぐることは安全上最も必要である。併しながら又一方より考ふれば、大佐の旗艦サラトガの如き快速にて有力なる航空母艦は、其搭載せる爆彈機と共に運送船隊の退路を掩護するには非常な價値がある。茲を以て大佐は旗艦を率ひて運送船隊に合せんことを乞ひ、操縱不可能なるシャフターを含む他の三隻の航空母艦は味方戰艦隊に合せしめんが爲め東方に航ぜしめた。

米艦隊司令長官ダーリンガー大將は、痛ましくも豫見された此不幸なる事態をば此時迄に既に報告に依て知つて居た。時に提督はウエーキ島の西北約四百五十浬にあつたので、小笠原島とは約千二百浬を離れて居た。

運送船隊遭難の爲に、遠征軍の遲延せしことは未だ同大將の知る所とならなかつたけれど、此報が航空母艦に達せないより判斷すれば不幸なる故障が起つたものと思はれた。大將の推測せるが如く、運送船隊今や目的地に接近しつゝありとすれば、横須賀よりする日本の主力艦隊は米國主力艦隊の半ばの時間を以て小笠原島に到着するを得べく、斯る壓倒的優勢の兵力に對しては頗る劣勢なるドイル艦隊は對抗することは出來ない。大將は自己の豫想せる不幸が的中せるを信ぜしも此際何を爲すべきやに就ては素より惑ふ所は無つた。大將麾下の艦隊は今や燃料の三分の一を消費し、例へ歸航に要する分を豫算の中に入るゝも尙高速を以て相當長途の航行を爲すことが出來る。況んや目下に於ては他の何物よりも先に遠征軍の安全を計らねばならぬ。玆を以て八日午前八時快速の大艦より成る三個の戰艦戰隊と之に隨伴する巡洋艦、驅逐艦を率ひ、十八節の速力を以て二見港に向ひ西進した。

今や轉じて運送船隊の狀況を述べねばならぬ。一月八日の夜は明けて豫定の集合地點に航空母艦の姿見へざるやドイル提督は之を搜索せんが爲め驅逐隊と飛行機を分遣したのは既述の通りである。玆に於て提督は小笠原島に直進するよりも寧ろ航空母艦の來るべき方向に進むを愼重の策と考へ、針路を北に變じた。然るに午前七時三十分敵潛水艦見ゆとのシンシナチーの無線電信を傍受したので直に事態の容易ならざるを感じた。提督思へらしく、敵は既に警戒を加へたと信じ得べきを以て小笠原遠征は之を中止するの外は無ひ、而して優勢なる日本艦隊が我に向つて集中し來るは唯だ單に時間の問題に過ぎずと。玆を以て運送船隊には針路を反轉し、出來得るだけの高速を以て退却せん事を命じ、又孀に偵察の爲め派遣した驅逐隊を召還した。其後半時間にしてミネアポリスの飛行機よりシンシナチー見ゆとの喜ぶべき報告は來た、同艦は正午迄に、ドイル提督に合したが、之により提督は、サラトガが全速を以て提督の所在に向ひ急航しつゝ

あるを知つた。午後五時運送船隊は小笠原島の西方三百五十浬の洋上に在り、刻々に日本主力艦隊の追撃を免れ得るを以て、艦内の陸兵等は胸撫で下した。

三、日本南遣枝隊との戰鬪

然るに初めより此遠征に附纏ふた不運は尙も之を見捨てんとはせなかつた。八日日本軍艦への警戒信號が横須賀より發せられた時に、日本の主力艦隊は同港の正東約三百浬の所を巡航しつゝあり、又磯村少將麾下の『南方枝隊』はマリアン群島の西北五十浬の所に在つた。此枝隊は千歳（旗艦）吉野、笠置（何れも最近式一萬噸級のもので八吋砲を有し、三十四節の速力を有して居る）及小型巡洋艦大井より成り、既に三日以前に佐世保を出でゝ南洋方面を巡航しつゝあつた。二見港を經て磯村司令官に與へられた日本大本營の命令は、小笠原島の東又は東北四百浬にありと思はるゝ

敵を遮斷せんことを以てしたので、提督は此任務を遂行せんが爲め直に速力を二十五節に增した。時に日本の主力艦隊は右の指示地點より餘り遠く離れて居たので、出來得べくんば磯村枝隊を援助せんとして二十八節の巡洋戰艦三隻のみ急派せられた。尙又敵の追擊を有力ならしめんが爲には、大なる行動半經を有する大型飛行艇十二機が横須賀及呉の二ケ所より派遣され、磯村枝隊と共同動作して米軍を搜索し、以て之に戰を强ひんとした。最後に日本潛水艦の一隊は米軍が向ひつゝありと思はるゝウエーキ島の西方を巡航し、退路を斷たんことを命ぜられた。

此等の配備は素よりドイル提督に不明なりしも、危險が迫りつゝあることは明かに之を認識する事を得た。此時運送船隊は十二節の定速を以て航進しつゝある。見渡せばド提督麾下の艦隊は、旗艦ミネアポリスを先頭として其兩翼にはマーブルヘッド、コンコルドあり、驅逐隊は艦隊の周りに對潛水艦障壁を形成し、シンシナチーは殿後に列して居る。而して午後六

時に到着したミラー大佐の航空母艦サラトガは旗艦の正横に位置せんことを命ぜられた。然るに運送船隊の周りに張られた日本の網は明かに之に接近して來たことを今や始めて明視するを得るに至つた。他なし日本の大型飛行機二機は爆音高く隊の後方より飛んで來たのだ。茲に於てシンシナチーは其高射砲を以て之を射撃し、サラトガは飛行機を飛ばして之を迎撃せんとした。斯くて日本飛行機の一は五千呎の高所より運送船目懸けて爆彈二個を投下したが遂に命中せなかつた。他の一機は低空飛行を爲しつゝサラトガを攻撃せんとしたが、未だ爆彈を投下せざるに其下方に爆發せる米軍の一彈の爲に破壞され、破片はミネアポリスの甲板上に落ちた。斯くて第一機は何等の效果を收めずして西方に去つたので、之を見たるサラトガよりの飛行機は二倍の速力を以て之を追撃射落し、爲に米軍の一機も亦海上に墜落した。

ドイル提督は勿論此の日本の飛行機が米軍の所在を味方追撃艦隊に報

告したことを知つて居る。此夜他の日本飛行機は二回飛來したが爆彈は投下せなかつた。今や明日の形勢如何により此遠征軍の運命が決定せらるゝ事は明かである。若し次の二十四時間内に優勢なる敵影を見ずんば運送船隊は恐らく安全であらふ、何となれば日本人は米國の主力艦隊が全速力を以て西航しつゝあらねばならぬことを判知するので、然く追撃を强行し得ないからだ。九日の夜は明けた、果然形勢は茲に明確なる危險の徵候が現れて來たのである。

此日早朝ド艦隊は南西の水平線上に煙を認め、忽ちにしてそは四隻の大艦なることが朦朧として判つた。次で偵察に赴ける米軍の飛行機は有力なる敵巡洋艦の接近しつゝあることを報じた、これ實に磯村枝隊で、提督は米艦を發見するや否や、日本の爲に之に恐るべき一撃を加へんとして全速を以て來攻しつゝあつたのだ。一見すれば兩軍の兵力は相伯仲するものと思はれた、蓋し何れも四隻宛の巡洋艦より成り、日本の巡洋艦三隻は何れ

も八吋砲を有するに對して、米軍はミネアポリスのみ之を有し、他は口徑小なる砲を裝載するも、日本側は驅逐艦を有せざるに反して、米軍側は三十隻を有し、且後者は航空母艦サラトガを有するに對して、前者は各巡洋艦に各二三の飛行機を有するに過ぎないから、例へ飛行機を問題外に置くも、彼我相償ふて互角の戰鬪を爲し得るものと思はれたからである。若しドイル提督にして其艦隊を戰術的單位として自由に操縱し得るならば提督は恐らく善戰し得たらんに、惜むべし低速にして憐むべき足手纏ひの運送船隊を伴つて居た。然も提督は之を放棄するを得ないので、玆に其運動に大なる制限を受くることゝなつた。

午前七時米軍は戰鬪陣形を作つた、時に彼我の距離二萬三千碼である。即ち旗艦ミネアポリスは他の三隻の小型巡洋艦と共に單縱陣を作り、其左側には運送船隊が北東の針路を取りつゝ續航し、二十隻の驅逐艦は敵の潛水艦に對して運送船隊を掩護すべく、サラドガは巡洋戰隊と運送船隊の間

に在りて彈着距離外に在るも、必要に應じ巡洋戰隊を援助し、又は運送船隊に對する敵の攻擊を擊退するに便利なる位置に占位した。又他の二十隻の驅逐艦は旗艦ミネアポリスの右舷前方に在て、命令一下敵列に對して魚雷攻擊を爲し得る樣配備された。

如上の配備が行はれつゝある間に、尙他の日本飛行機は彈着距離外の高所を西方より米軍の方に飛んで來た。此等は小笠原島から來たもので、横須賀と呉から派遣された長距離用飛行艇隊の一部である。其行動半徑は千五百浬で、一度に二日間飛行を繼續することが出來る。日本海軍々令部發行の戰史に曰く『此等飛行艇の無線電話により、磯村少將は迅速且精細に敵の陣形を知るを得、以て有效なる攻擊を敵に加ふるを得せしめた』と。又曰『く磯村司令官は米軍戰鬪序列の如何を知るや、笠置に命じ、直に列を離れて北方より運送船隊を攻擊せしめ、提督自身は麾下三巡洋艦を率ひて米軍の巡洋戰隊と對戰した』と。

日本の一巡洋艦が列を脱し高速を以て北航するを見るや、ドイル提督は――生存せる幕僚の一人の言に依れば――運送船隊に向はんとする敵の企圖を直に看破した。茲に於てド提督は十六點の變針（註針路を反轉すること）を行つて笠置を追擊せんかと考へたが、直に思ひ返へして其無益なるを知つた。時に日本巡洋艦の三隻は提督と並航せるも距離次第に減じ、然も此運動を固持するを以て、提督若し笠置の追擊に向はゞ、敵の主隊は忽ちに我運送船隊に殺到するの恐れがある。茲を以てド提督は採り得べき最良の策として麾下驅逐隊に命じ、如何なる犠牲を拂ふも運送船隊に對して笠置を遮斷すべきを以てし、同時にサラドガには笠置を攻擊せんが爲め飛行機を對抗せしむべきことを命じた。

此等の命令が下されつゝある間に彼我の距離は既に一萬八千碼に接近し、日本の旗艦先づ齊射を行つて戰鬪は茲に開始された。然るに距離餘りに大にして暫時は射擊の效果は見へなかつた。距離一萬六千碼に入やド

イル提督は發砲の命を下した、茲に於て米の巡洋艦は擧つて射擊を開始したが然も其六吋砲彈は何れも日本軍艦に達せなかつた。今や兩軍の砲戰酣にして、ド提督は其六吋砲を使用せんが爲め距離を短縮せんとしたが、日本側は常に外方に轉針して距離を一萬六千碼以外に保ち、以て其八吋砲の最大威力を發揮せしむると同時に、米軍の六吋砲を無效ならしめんとした。加之ならずド提督は運送船隊より遠く離れざらんが爲め速力を二十節以下に保ちしに反して、日本側は少くも二十五節を出しつゝあるが故に、後者は迅速に前者の先頭に出でつゝあつた。然るに今や日本軍の爲に丁字を畫かれんとするを見るや、之を無效ならしめんとして米軍は速力を二十三節に增加した、何となれば米軍にして敵に丁字を畫かれんか、獨り敵の縱射を受くるのみならず、運送船隊をも敵の直接なる攻擊に暴露するからである。此時に當り日本軍は既に內方四點の變針を行つたので兩軍は今や急速に接近し、彼我の距離は一萬六千碼より一萬二千碼に抵下し、一時は九千

碼に迄近づいた、これ實に戰鬪最も酣なる時である。

偶まミネアポリスよりの齊射は千歳に命中して前部烟突を吹き飛ばし、且火災を起さしめた。然るに其後二分にしてミネアポリスも亦數彈を受け、其一彈は司令塔を破壞し、ド提督を斃し、他の人員器具に大損害を與へた。斯くて米軍の旗艦は一時操縱の自在を失ひ、左右に轉々しつゝ艦首を敵に示し、尙多くの敵彈を蒙りながら漸く戰列に復した。今や時針は午前八時を示し、戰鬪は滿一時間を經過せるも猛烈なる砲戰は少しも衰へなかつた。

午前八時五分シンシナチーの集中砲火を受けつゝあつた大井は憐むべき狀態に陷り、列後に落伍しつゝあるを見られた、其後甲板は火焰に包まれ烈しく蒸汽を吐き、其砲の殘れるものも亦僅かであつた。同艦は其後尙も三回の齊射を受けて恐るべき爆發をなし、八時十五分遂に沈沒した。然も復讐は直ちに行はれた、日本側砲火の優越は漸く其效果を現はし、ミネアポリスは二個の砲塔を破損し、舷側に六ヶ所の破孔を穿たれて將に沈沒に垂

んとし、マーブルヘッドは日本の八吋砲彈の爲め前部砲臺の全部を破壞され、又舷側を穿貫されて海水之より浸入し、烈しく右舷に傾ひて居る。コンコルドは損害大なりしも、固有砲員の大部分が戰死又は負傷して、今は撤き集めた砲員を以て戰鬪を繼續航走しつゝある。獨り大井と戰つたシンシナチーのみは損害輕微にして、前部の汽罐室に命中した一彈のみが其中の稍々大なるものに過ぎなかつた。

轉じて日本側を見るに、千歳は一砲塔を破壞され、左舷機を損じ、且所々に火災を起して居る。吉野は損害輕微なりしも一發の魚雷を受けた、此魚雷は米國驅逐隊の發射した多數のものゝ中唯此の一發のみが命中したのである。之より續き戰鬪の初期に於てドイル提督は麾下驅逐隊に襲擊を命じた。此の命に接したる驅逐隊は日本軍の彈雨をくゞりて大膽に突進し、五隻の驅逐艦は敵の砲火に擊沈又は操縱の自由を失ひつゝ二三十發の魚雷を發射したが一發も命中せなかつた。次で第二回の襲擊を行ひ、這回は

吉野に命中したか、然も驅逐隊は多大の損害を蒙りて撃退された。而して艦隊に附屬した二十隻の驅逐艦中尚戰鬪に堪ふるものは僅に九隻となつた。

午前八時四十五分磯村提督は敵に最後の打撃を與へて戰を終結せんと決心し、吉野に信號してミネアポリスに砲火を集中せしむると同時に、旗艦千歳にも亦速射を命じて同艦を射撃せしめた。此の恐るべき集中砲火を受けて米軍の旗艦は其舷側は蜂の巣の如く穿貫され、到る所に砲弾炸裂して破片は機械に落下し、又水線下よりは浸水して機關部員をして其受持配置を去るを餘儀なくせしめた。米軍の旗艦が運動の自由を失つて敵砲火の的となるや、マーブルヘッドは其の損傷をも顧みず、旗艦と敵との間に突入して旗艦を保護せんとしたが、時機既に遲つた。斯くてミネアポリスの最後の運命は近づき、午前九時五分海中に沈没したので、驅逐艦は海中より其乘員士卒を合せて八十名を救上げた。

米軍の旗艦沈没すると見るや、日本の提督は敵の殘部を片付けんとして進み、日本巡洋艦の二隻はマーブルヘッドとコルコルドに砲火を集中した。然るに米軍の飛行機來りて日本軍艦に毒瓦斯や鱗の爆弾を投下したので千歳は特に瓦斯の爲に、甲板上に在りし人員は總て人事不省に陷つた。次で瓦斯は砲塔や下方の區劃に迄浸入し、斯くて千歳は全艦毒瓦斯に包まれて急に戰列を脱し、總ての砲も沈默して全然操縦不可能の狀態に陷つた。之を見たる米軍の驅逐艦ゴールヅボロー、プレストンの二隻は突進して五百碼の距離に於て魚雷攻撃を試み、此魚雷の多くは千歳に命中して、爲に同艦は二分の後に沈没した。

米軍の驅逐艦が千歳の生存者を捜索しつゝある間に、其の飛行機は更に吉野を攻撃した。同艦には爆弾數回命中し、乘員の半數は毒瓦斯の爲に人事不省に陷つたが漸く虎口を脱して遁走するを得た。米軍の飛行機が此時に至る迄日本の巡洋艦を襲ふを得なかつたのは笠置と戰つた爲である。

前說するが如く笠置は磯村提督の命を受けて運送船隊攻擊の任に當つたが、サラトガにして迅速に其搭載せる飛行機を飛ばすことが出來たならば同艦は恐らく運送船隊に近づくことが出來なかつたであらふ。然るに此の大なる航空母艦は之より翼き日本の飛行艇四機の爲に低空より攻擊され、著しき損害を蒙つた。此等の日本飛行艇は間もなく驅逐されたが、然も之より受けたる損害の爲めに飛行機の飛揚を困難ならしめた。而して笠置は此際に乘じて運送船隊を蹂躪したのであつた。

笠置が運送船隊に近付と見るや、米國驅逐艦ホーブウエル、エバンス、ブアーラガット、ゼイリンの四隻は突進して之を襲擊したが、不幸にして魚雷命中せず、却て笠置の正確なる砲火の爲に後の二隻は忽ちに擊沈され、他の二隻も亦驅逐された。運送船隊中第一に擊沈された物は水雷母艦メルビルで、同船は砲彈魚雷格納庫に命中し、爆發尖を爆發せしめたので、之が爲に爆沈した。其他レーク、チャプレーン、スポーケーン、ブオールス、ウエストボイ

ントの三隻も沈沒し、チエイン・ブリッヂと他の三隻は多少の損害を蒙つた。

運送船隊今や全滅せんとする此時、恰も好しサラトガよりの第一の飛行機數機は救助の爲めに急行し、笠置の高射砲の射擊を物ともせず爆彈數個を投下した。此爆彈は二見港に於ける砲臺攻擊用に製せられたものである。斯くて此等の飛行機は其全爆彈を投下し終る迄戰鬪を續け、爲に笠置は如何ともする能はざる狀態となり、乘員の五分の四は瓦斯の爲に窒息し、運送船隊護衛の任に當れる五隻の米國驅逐艦が最後の止めを刺す時には同艦は一人の砲員も砲を操縱することが出來なかつた。笠置は三發の魚雷を受け、一握り程の乘員が必死の努力を爲せしも其效なく、數百の乘員は瓦斯の爲に克服せられて間もなく艦と共に海底深く沈んだ。

戰ひ今や終りを告げて殘るは此戰鬪の總勘定如何の問題である。磯村枝隊を編成した四隻の巡洋艦の內三隻は沈沒し、殘るは僅に一隻のみとなつた。戰後に發表された日本の公報に依れば其戰死者千二百名を超へて

居る。米國側に於ては旗艦ミネアポリスは水雷母艦メルビルと共に沈沒し、マーブルヘッドは沈沒に垂んとして最後に一發の魚雷により撃沈せられ、コンコルドは船體や機關に大なる損害を蒙り、漸く運轉を繼續しつゝある。獨りシンシナチーのみは重大なる損害を免れた。米國驅逐艦の中八隻は撃沈され、他の三隻は漸く航海し得るに過ぎない、而して米艦隊を通じて其戰死者は一千以上に及んだ。サラドガは飛行甲板に損害を受けたが尙戰鬪に堪ふる得た。然るに最大の損害を受けたものは運送船隊で、嚴に風浪の爲め溺死したる者を合せ人命の損失實に四千に上り、尙數千の者は負傷した。加之ならず運送船の數隻は砲火の爲め運動不能となり、他のものは航海に甚だしき困難を感じた。

四、遠征軍布哇に引還す

然しながら日本艦隊は尙何れよりか新たなる兵力を以て追撃し來りつ

ゝありと思はるゝので、米軍が新たに攻撃を受くるの危險は尙存在した。磯村枝隊は敵主力艦隊の前衛なりしか否か？　若し然りとせば日本の主力艦隊が運送船隊の殘部に打撃を加ふるは何時なるべきか？。此等は運送船内に於て放たるゝ疑問であつた。今や餘す所は一隻の巡洋艦、數隻の驅逐艦並にサラドガのみである。斯る劣勢の艦隊を以て日本の主力艦隊に對せんとするが如きは蟷螂の斧を揮ふものである。茲に至て米軍は悲觀せざらんとするも得なかつた。

然るに實際に於ては斯る危險は既に存在せなかつた。日本の大本營は米國主力艦隊よりの無線電信を傍受するや、其巡洋戰艦隊に追撃を中止せしめた。九日午後三時米國主力艦隊より偵察の爲め派遣された大型航空船シカゴは味方運送船隊を發見し、ミラー指揮官と通信した後尙も西方に向つて偵察を繼けた。此航空船は四時間後には西方二百浬に進み附近に敵なきを報告した。これ卽ち日本軍が追撃を中止したことを示すもので

ある。幸にして天候良好なりし爲め、運送船隊は數隻の驅逐艦に其兩翼を護衛され、運轉の自由を失へるものは之を曳航しつゝ低速を以てウエーキ島方面に進んだ。十日朝二回日本潛水艦の襲撃を受け、一はコンコルドに命中し、他は辛ふじてシンシチーを逸し、第三の魚雷は運送船ガーフィールドに命中したが沈没せなかつた。此等の日本潛水艦は驅逐艦の驅逐する所となりて再び襲撃を試みなかつた。翌十一日薄暮新式一萬噸巡洋艦ボートランド、インヂヤナポリス、カンサスシチーは來合した、此等は司令長官の命に依り運送船隊護衛の爲め派遣せられたものである。殘るは敵潛水艦の危險のみなるも、此等は主力艦隊の驅逐隊と觸接を終れば消滅するのである。

ダーリンガー司令長官は遠征軍の戰況に關する報告を得、且今は日本主力艦隊と遭遇するの機會なきを見て、燃料を節約せんが然め艦隊の速力を十二節に減じ、二隻の戰艦をウエーキ島に歸港せしめ、自ら旗艦ウエストバ

ージニヤ及コロラド、メリーランド、カリフオルニヤの四隻を率ひ、二隻の病院船を從つて運送船隊の方へと航進した。十三日午後四時運送船隊と會し、重傷者を病院船に移した後、如上の聯合諸艦船はウエーキ島に向ひ、十五日同島に到着した。同島碇泊の二日間内に燃料の補給及船體の一時的修理を行ひ、二隻の運送船は修理の見込なきを以て之を沈没せしめ、殘餘の運送船隊は優勢なる驅逐隊の掩護の下に十七日を以て布哇に向ひ進發し、二十五日ホノルゝに到着した。

斯くて此不幸なる遠征は遂に失敗に歸したが、其生存者等は九死に一生を得たるを不思議とせざる者は無つた。

第十三章　米國の新作戰計畫

モーリソン提督辭職しミューラー提督代つて作戰部長となる――ハーバー少將新たに作戰部次長に補ぜらる――艦隊司令長官ダーリンガー大將辭職しテンブルトン大將之に代る――米國日本の海上貿易を阻害せんとす――米國更に遣艦の命令を發す――日本に對する新遠征の計畫――日支關係の惡化――揚子江方面に於ける砲艦の戰鬪

一、米海軍主腦部の交迭と新作戰計畫

米國政府は戰爭の遂行方法を變更せよとの有效なる輿論の聲に動かされて小笠原遠征の失敗を再びせざらんことを考慮すべく遲疑しなかつた。茲に於て此遠征を失敗に終らしめた當の責任者たるモーリソン提督は事實の明かとなると共に責を引て作戰部長の職を辭し、海軍長官は其後任としてリンカーン・ピー・ミューラー大將を任じた。提督の才智と確乎たる判

斷とは、苟も成功の合理的先見なくんば如何なる計畫も之を政府に建議せずと認められたのだ。作戰部次長ハッバート少將も亦其職を辭したので其椅子は一時空虛であつたが、輿論は獨のグワム島知事にして其指揮官たりしジョセフ・ハーバー少將を選定して之に任せしめた。少將は最近將官に陞進したものである。戰前に於てハーバー少將は海軍戰略の權威者として有名であつたが、グワム島に於ける熟練なる防禦の手腕は戰術上にも亦卓越せる才能の持主なるを示した。彼は人格高く、其上長たる作戰部長は素より、苟も彼に接近する總ての人に異常なる感化を及ぼした。此二人の協同の全期間中其調和は完全無缺のものであつたので眞に理想的であつた。其後の諸作戰に於てはハーバー少將は其原動力を與へ、而して計畫の多くはミューラー提督の注意と先見の明により更に精練されたと結論するは過言でないのである。

尙又政府は輿論に讓步して合衆國艦隊司令長官ダーリンガー提督の職

を解き、之を海軍試驗及豫備員局長に轉任せしめた。小笠原遠征の不幸なる結果を先見しつゝも、至善を盡して其災厄を免れしめんとしたる卓越なる旗將を、此失敗の爲に左遷するは如何にも忍びざる所なるも、輿論が不運なる提督と認めた以上之を其職に留むるは不得策と考へた。斯るは戰爭に於て屢々起る所であるが、ダーリンガー提督は歴史上の他の諸例と異り、何等の愁訴も外見上の不平もなく、上長の裁斷を忠實に承認して其人格を完ふした。彼の後繼者はテンプルトン提督であつたが、讀者の知るが如く、同提督は在大西洋方面の偵察艦隊をばハンプトンローヅよりマゼラン海峡を經てサンヂーゴに迄廻航せしめた人である。其他多少の異動はあつたが、左迄重要でないので玆には之を述べない。

此の新作戰部長と次長が注目した第一の事項は、既に決定された新たな遠征軍の編成を爲しつゝある間に、日本の海上貿易を阻害せんとするの問題であつた。日本の歐洲方面との貿易を直接に阻害せんことは容易の業

でない、何となれば米國海軍に屬する有ゆる新式の巡洋艦は今や太平洋方面に在りて主力艦隊の偵察用として之を手放すことが出來ないからである。然るに米國の大旅客船には速力、航續力共に大で、之を假裝巡洋艦に改裝し得きもの數隻ある、例へば世界に於ける最大二船の一なる總噸數六萬噸二十三節のレビアーザンの如き、二萬三千七百八十八噸、十八節のジョウジ・ワシントンの如き、一萬八千三百七十二噸、二十節のマウント・バーノンの如きはそれで、此他にも米國に於て建造された一萬四千百噸十七節の、各大統領の名を冠した十二隻の大型汽船がある。勿論其數隻は既に運送船として太平洋方面に使用されて居るが、尙五隻は日本の海上貿易に對して作戰せしむることが出來る。例へばプレシデント・マヂソン、プレシデント・クリーブランド、プレシデント・ヂエフアーソン、プレシデント・ピルス、プレシデント・タフトの如きがそれである。此等八隻の汽船は太西洋方面の海軍工廠に於て最大速力を以て改裝に着手したが、此等が商船界より引揚げたこ

とは、必然の勢として米國の太西洋定期航路の全部を主として英獨の手中に引渡すの結果となつた。

將又太平洋方面に於ける日本の海上貿易も之を阻害することゝなり、新たに建造完成した一萬噸級巡洋艦アルバニー、コロンビヤの二隻を先任艦長アッブルトン大佐(アルバニー)の指揮下にッツイラを主根據地として日本と濠洲との貿易破壞に任ぜしめた。此等の二艦は之と同時に同方面に在る日本の巡洋艦を捜索撃破するの訓令を受けたが、其有效なりしは後說する所に依て明かである。

今や海軍造船及修理局の活動は目覺ましきものとなり、既に起工された艦船は一層の加速度を以て竣成に努め、又新たに左の諸船が建造命令を發せられた。

(イ) ヂーセル機關を用ふる一萬二千噸の巡洋艦　六隻
(ロ) 千五百噸の驅逐艦　五十隻

(ハ) 航空母艦　四隻
(ニ) 航洋潜水艦　二十隻
(ホ) 特務艦船(補給及母艦用)　六隻

又太平洋方面に於ける偵察巡洋艦の不足を補はんが爲には、同方面に在る適當の商船若干を徵發して之を假裝巡洋艦に改裝した。

今や轉じて米國海軍作戰部が陸軍と協同して豫め策定した主なる作戰計畫を述べねばならぬ。此計畫は之より嚮き永き以前に既に策定された二つの計畫の特徴の一部を採用したものである。然も此二つの計畫は其實施の時期が尙未だ早しとしてこれ迄採用されずに居た。此二つの計畫の要領は次の通りである。

(一) 北海道の侵襲。此侵襲にはアラスカに集合せる陸軍を以てし、ダッチハーバーを根據とする一艦隊を以て之を掩護し、且遠征軍は該港を最後の出發港とすること。

(二)カロリン群島の東部諸島の一にして、日本の委任統治領たるポナペを占領し、之を中轉根據地としてグワム又は比島、又は此兩島を奪回すること。

此二策の中(一)は米軍の眞の目的たる(二)を達成せんが爲めの詭計である。素より此二策の實施には免る可らざる困難の伴ふありて、特に第一を然りとする、何となればアラスカより北海道に至る海面の天候險惡なるが爲である。此第一策は實際上米國の陸海軍當局が眞面目に之を遂行せんとしたもので無いが、第二策を實施する必要上敵をして米軍の眞の目的は北海道方面に在りと信ぜしむることが最も必要である。而して日本人を斯く欺かんが爲には最も巧妙なる措置が講ぜられた。即ち數千の陸軍兵――其一部は種々の理由により第一線の陸兵たる資格なき者も在る――はビユージエットサウンドに輸送され、一部はダッチハーバーに直航した。又桑港、ポートランド、シヤトルより出發する運送船には封鍼命令(註

何月何日何地點に於て之を開封すべしとの命令で、之を開封する迄は船中の乘員は何れも其行先等を一切知らずに居る)を與へて祕密を保たしめた、此方法は之を慣用するに從ひ本攻擊を行はんとする他方面へ軍隊、彈藥等を輸送するに最も有效なるを證した。又アラスカ方面への陸軍輸送船隊の掩護には南方の沿岸哨戒に任ぜる舊式巡洋艦、驅逐艦を用ひ、其代りには武裝ヨットや他の補助艇を使用した。斯くてダッチハ！バーは間もなく米國海軍活動の中心となり、後には戰艦アーカンソー、ヴイオミング、フロリダ及ユタの四隻も同港に來りて防材と機雷敷設面の內方に碇泊し、以て何事か大規模の作戰が同港を中心として開始せらるべしと言ひ觸らされ又布哇に在る艦隊はダッチハーバー方面へ移動せんとするの計畫ありとの風說を放ち、前記四隻の戰艦の同港來着說も之を誇大に吹聽して、遂には米國艦隊の大部がダ港に集中せりと迄吹聽された。之と同時に嚴命を下して海軍の全行動を嚴祕に付したので、敵の間諜をしてアラスカ方面より

重大なる攻撃が今にも始まらんとするかに思はしむることゝなつた。日本軍がダ港の內情を偵知するを防がんが爲には頗る多數の哨艦艇と飛行機を配したので、之を偵察せんとした日本潛水艦の數隻は何れも擊退された。日本の軍事當局は始めアラスカ方面よりの米軍の侵攻を一笑に付したが、同方面に於ける米軍の活動盛んなる頻々たる情報に接し、且は獨に小笠原の二見港に行はんとした大膽なる計畫もあつたので、今は益々不安を感じ、東北方面よりの敵の侵襲を眞面目に信ずるに至つた。斯くて茲に良好に計畫された戰略は其成果を結ぶに至つたが、之と全然反對の方面に於ける本攻擊を祕密裡に保持せんが爲には出來得るだけ永く敵を欺き置くことが必要であつた。

計畫された本攻擊は前記第二策を採用せしも、其一部を改めたものである。作戰部次長ハーパー少將は太平洋諸島に關する廣汎な智識を有するので、支撐點として何れが最も適切なるやの利害得失を考慮した後第二策

中のポナペの代りにトラックを占領せん事を力說した。トラックはポナペと同じくカロリン群島中の小群島であるが、ポナペの西方四百五十浬に在りて大艦隊收容の便は後者よりも一層容易なるも、世人に知らるゝことポナペよりも少きが爲に、商業上船舶の同島に寄港することは稀である。トラックはグワムを距る六百浬、最も近き比律賓群島中のミンダナオを距る約千七百浬であるからポナペよりも一層適良である。若し此島を占領して充分の期間之を堅固に保持するを得るならばグワム陷落後の米國の不利を幾分補ふことが出來る。斯くて此島への遠征軍は之に最も近き米國の屬地にして、敵に覺知せらるゝことなしに必要なる兵力を集中し得ると考へられたツツイラより之を行ふことに決定した。之に用ふる陸軍兵は主として布哇の守備軍を用ふることゝし、之を祕密裡に漸次にツツイラに輸送し、然も其輸送はアラスカ方面なるかの如く吹聽した。斯くて布哇の守備軍は之を新たに編成された者を以て補つたので、同地は恰も練習地

の如くなり、次ぎ〳〵にと戰場に送られた。之と同時に義勇兵及徴兵制度の下に陸軍の補充を行はんとし、最初の徴募人員は二十五萬人であつたが、全國を通じての應募人員實に一百萬に達し、其選拔せられた壯丁は精神、身體何れも優良なる者を得た。守備の任務にのみ適すると認められた新兵は特別隊に編成せられ、此等は敵を欺かんが爲めに、其後アラスカ方面へと送られた。

二、日本の對支高壓

此時に當り日本は更に他の方面よりの困難に當面せざるを得なかつた、他なし支那は戰時禁制品や同樣の事項の問題に關して日本と中立國との衝突を惹起せしむるの可能なるを見るや、其機を逸せず之を斷行したからだ。卽ち支那は日本が戰爭の遂行に必要なる礦物を得ることに就て、中立國に與へた或特許權の問題に關聯して日本を苦めんとした。既に米人の

一團は斯種の物資が日本に輸出さるゝを防がんとして活動し、主として中立國の特許權所有者と契約を結び、之を日本以外の需要者に引渡さんとしつゝあつた。之を見たる日本は北京政府を壓迫して中立國の特許權所有者に與へた契約の如何に拘らず、任意に其供給を支配せんとするの策を取つた卽ち賣買契約上に右の特許權所有者の契約取消權を留保する一項に依て斯る場合に處せんとしたのである。然るに北京政府は其力弱しと雖も遲延と遁辭とに於ては老練家であつた、而して日本自身も亦其目的を達せんが爲め壓迫政策を保持するに於ては、却て中立國の感情を害せんことを恐るゝに至つた。

之を見たる日本は威壓と賄賂政策を混ぜこぜにして更に其目的を達せんとしたが、米國の勢力が大なる財布を擁じて其背後を支援するので遂に成功することが出來なかつた。茲に於てか日本は更に隱謀の手を新たにした、讀者は記憶するならん、名のみの滿洲總督にして實際には日本の奴

僕たる李平海は北京政府に對して古き怨恨を懷ひて居たことを（第一章參照。彼は滿洲の外交事件に關しては、日本が該地方に其權力を振つた以來、北京政府は實際上何等容喙し得ない事實を無視しつゝ、中央政府が之に關して取れる措置に不滿足なる口實の下に首相恒英福及其內閣の辭職を要求し、代ふるに已の指令者を以てせんことを求めた。此の要求の拒絕せらるゝや、彼は其軍を起して間もなく滿洲と支那本土とを分つ長城以內に進み、直隸省內の數地を占領した。彼の軍は北京政府が此時に於て對抗せしめ得る者よりも數に於て優勢なりしのみならず、武器や裝備も優り、且日本の教官に依て訓練せられた利點を持て居た。此際李の舊敵たる將軍王楚は其精兵を提けて初期の革命を鎭壓せんが爲め支那の南方に在つた。されば事態は李の爲に有利であつたが、未だ決戰を試みるに先ち滿洲北部に重大なる革命起つたとの報に接して如何ともすることが出來なかつた。此革命は永き以前より露國の極東共和國が煽動せるもので、米國の黃金の

魔力が之を刺戟したので、今や李平海麾下の陸軍の不在に乘じて爆發したのである。革命軍への武器彈藥並に實戰の經驗ある指揮官等は、黑龍江を越へて輸入され、忽ちにして黑龍江省の北部諸洲全部は動搖し、南方吉林省に迄擴がつた。哈爾賓、吉林、齊々哈爾の如き重要なる都市の守備軍は敵を支持し得たが鐵道線路を離れた地方は忽ちにして不穩なる農民の爲に蹂躙された。茲に於て李は中央政府との擊爭問題の解決を他日に讓り、其兵の大部を率ひて急速奉天に歸り、革命の鎭壓に關して日本の顧問等と協議した。

斯くて日本の計畫は茲に再び失敗に歸し、唯だ單に山東、湖北、雲南諸州の地方的官憲の上に振ひ得る程度の勢力を以て滿足するの外なきに至つた、此等の地方は鐵、石油及銅の主要なる產地である。勿論斯種の方法は高價で、北京政府と交涉して得たものよりも結果は不良であつたが、日本の造船及彈藥の製造は、其不足の供給を此等の地方より得るので、當分の間は之で

充分であつた。

三、楊子江に於ける日米砲艦の戰鬪

日本は漢口より石油を輸入するに大なる困難を感ぜなかつた、是楊子江が最良なる交通線を提拱するからである。然るに玆に詳說するに足る一事件は起つた。之より嚮き日米兩國は戰爭以前より數隻の砲艦を楊子江方面に派遣して水上の警備並に商業の保護に當らせたが、戰爭開始後も依然として之を保持し、然も此水路は中立の性質を有するので、兩國の砲艦は交戰することなく只だ睨み合ふのみであつた。然るに今や日本の一商船々長の憂慮は遂に爆發して中立の限界を破つた。千九百三十一年十二月二十九日の事である、日本の運油船夕立丸は石油を滿載して漢口を出港したが、恰も此時米國砲艦パロスが或距離を離れて之に續航したので、日本の船長は追躡されつゝあるものと信じた、但し此砲艦の目的は後日に至り明

かとなりしが如く追躡せるものでは無つた。日本の船長は當時漢口邊に流布された米人が日本の海上貿易を阻害せんと企てつゝありとの風說に動かされたるや疑ひない。兎に角彼は追躡されつゝありと信じ、海賊に對せんが爲め備付けて在つた小銃を以て船員を武裝せしめ、パロスに向て發射を命じた。此等の小銃彈の多くは米艦に命中せなかつたが、一二彈は船體に命中したので、艦長オー・ハルラン少佐は憤怒し、此の挑發せざる攻擊に對して夕立丸に向ひ一發の舊砲を發射せしめたが、此時夕立丸は益々烈しく發射した。

此際若し日本の砲艦伏見が來なんだならば事件は多少穏かに濟んだかも知れない、時に伏見は武穴市沖に碇泊して居たが、夕立丸が狂氣の如く援助の無線電信を亂發したので全速を以て溯江して來たのである。伏見は現場に來るや直に事態を觀取し、猶豫なく米艦を砲擊した、而して夕立丸は之に乘じて逸走し去つた。此日米の二砲艦は勢力略ぼ伯仲して居た、即ち

何れも二門の六吋砲を有し、十三節以上の速力を出すを得ない。其噸數はパロス百九十噸で伏見よりも十噸多く、乘組員は何れも約五十人である。且何れも裝甲防禦が無いので、距離の短縮につれて死傷者の數は忽ちに增加した。斯くて戰況はパロスに有利で伏見は遂に火災に罹つたが、偶ま夕立丸の無線電信により他の日本の一砲艦保津來援して米艦は不利の位置となつた。該艦は千九百二十三年の建造に拘り、噸數三百四十噸で二門の十二吋砲を持て居る。オー・ハルラン少佐は衆寡敵せずと見て先づ伏見を擊沈せんとし、其艦を敵二艦の中間に導ひた、伏見は今や烟に包まれ消火に全力を注いで居るのでパロスを避けんともせず、爲にパロスは伏見の舷側中央を衝き、船體に大なる罅裂を生ぜしめた。斯くて米艦は引返す途中保津より烈しき砲擊を受け、其一彈は艦長オー・ハルラン少佐を斃した。今やパロスは衝の衝突に依て浸水甚だしいので、代つて指揮を取れる一准士官は同艦を武穴上流の便宜な陸岸に乘せ上げ、沈没しつゝある伏見の乘員を

救助する事は之を保津の爲す所に一任した。パロスは今は全然破壞し、其上部構造物は寸斷し、二十人足らずの乘員は降伏する外無つた。之を見たる支那の地方官憲は公然日本人に敵意を表し、米艦の生存者を救助して有ゆる注意を與へ、又武裝せる支那兵は米艦内に配置されて之を監視した。若し支那人にして此等の措置を取らなかつたならば、パロスは必ずや日本軍艦の爲に捕獲されたに違ひない、何となれば日本人は伏見の沈没に憤慨して居たから、支那の哨兵が之を妨くること無れば之を容易に捕獲し得るからである。

支那政府は普通の外交的機關を經由して、此中立侵犯の行爲に關し憤怒せる外交文書を交換した後、此問題を在漢口英國總領事の裁斷に委ねることに同意した。此總領事の調査の結果、事件は夕立丸船長の根據なき危懼より起れるを明かにしたので、同船長は日本官憲よりは好評を受けなかつたが、一般民衆の盲目的愛國者よりは英雄として崇められた。而して斯種

事件の再發を防がんが爲には、兩交戰國は何れも支那の河上にある其砲艦の有ゆる豫定行動をば、英國領事館の注意を遵守して之を爲し、自他共に其砲艦の所在を中立國の機關を經て之を知り得、依て以て衝突を未前に防ぐことに決定した。

第十四章　ロツモウ沖の海戰

アップルトン大佐の率ふる米艦隊サモアに向ふ――日本艦隊陸軍運送船隊を率ひて同方面に向ふ――米國巡洋艦コロンビヤの沈沒――米軍の戰術――ロツモウ沖の海戰――アップルトン大佐の陸戰

一、日本軍のサモア占領計畫

今や進んで南太平洋方面に於ける事態の發展を述べねばならぬ。アップルトン大佐の受けたる訓令には、南洋群島の占領計畫に關して、先づ其途を開かんとする祕密の條項を包んで居た。即ち大佐は新巡洋艦アルバニー、コロンビヤ、航空母艦ライト、並に十八隻の驅逐艦を率ひ、日本人に其行動の最終目的を覺られざる樣有ゆる注意を拂ひ、日本軍がトラツクの東方海面に正規の哨戒を實行し居らざることを確むるにあつた。而して滿洲と

の日本の海上貿易を阻害することは右に對しては第二次的任務たるべく、そは便宜に從て之を爲すべきを命ぜられた、蓋し敵をして米軍の眞の目的を察知せざらしむる爲には、此の海上貿易の阻害が其主なる目的なるかの如く考へしむるを必要とするからである。

然るに玆に奇妙にも此訓令は、日本が米國の屬地たるサモア群島を占領せんとするものと符合して居た、日本は米國が濠洲との貿易を阻害せんとするの風說を聞き、之に對せんとして米國艦隊が斯る日的に向ひ使用し得る唯一の根據地なるツツイラを占領せんとしたのである。此日本の遠征軍は主として後備步兵より成る約五千の陸軍より成り、之に附隨する砲兵及彈藥と共に十隻の運送船に乘せ、此等の運送船は中型の物で其平均速力は十一節以下である。而して共護衞艦隊としては四隻の舊式巡洋艦磐手（加留間少將旗艦）出雲、八雲淺間、及十隻の二等驅逐艦を以てした。此等の巡洋艦は何れも艦齡三十年以上を經過して居るので、これ迄補助的の任務

にのみ使用されたが、此種の遠征には恰適な軍艦である。此四隻は各々八吋砲四門、六吋砲八門を有し、又多少新式化せられた海上飛行機各々二個宛を搭載して居た。而して驅逐艦は何れも約六百噸三十節の舊式艦である。

日本のツツイラ遠征軍は二月の終週中にヤルート島に集合し、三月五日の未明を以てツツイラに上陸する豫定であつた。日本人は不意の奇襲と守備兵の少數なるより、上陸には大なる困難を感ぜざるべしと考へた、實に日本の計畫にして同方面に於けるアツブルトン枝隊の任務と符合せなかつたならば、必ずや完全に成功したに違ひない。

アツブルトン枝隊はツツイラに到着するや、トラック遠征軍の一部として布哇より來着すべき陸軍兵を受領せんが爲めの準備に數日間を惱殺され、陸兵の多くは之を天幕內に收容し、其敷地は飲料水の供給容易なる地を撰んだ。元來ツツイラ島は其總面積僅に四十平方哩に過ぎざるも、ア大佐は同島の總督（海軍將校）と協議して種々の準備をなすことに約一週日を

費やし、此間アニバニー、ライト及驅逐隊二隊（二十隻）は、バゴバゴに殘り、コロンビヤ（艦長バーカー大佐）と六隻の驅逐艦は燃料を補充した後北方に於ける一線上を哨戒せしめた。

然るに三月一日に至りコロンビヤはロッモウ島の北方約二十浬なる海圖に記載なき淺瀨に乘上げた、同艦は珊瑚礁脈を擦過せんとせるものゝ如く、艦の後部は尙礁脈に固着して離るゝを得ない。茲に於て驅逐艦をして曳出を試み、艦は全速を以て之を脫せんとしたが遂に其奏なく、其後潛水夫をして檢査せしめた結果によれば艦は二個の珊瑚礁間に固く挾まれて居た。遂に五百噸の燃料と水とを後部タンクより放出して重量を輕減し、再度の曳出を試みたが、これ亦成功せず、時に夜暗到來したので曳出作業は一時之を中止した。

此時に當りアツプルトン大佐はコロンビヤの無線電信遭難警報に接し、ライトを救助に向はしめ、ア大佐自身は翌朝天明と共に更にコロンビヤの

曳出作業を續行し、遂に數時間の非常なる勞苦の後之を曳出するを得たが、同艦の損害は甚だ大にして、キールの諸部は毀損し、四個の推進機は何れも損傷して居た。

二、ロッモウ沖の海戰

偶も此時二個の飛行機は西北方より飛來し、コロンビヤは一の飛行機を飛ばして之を偵察せしめたが、數隻の日本軍艦が商船の一群を掩護しつゝ航進し來るを知り、然も接近するに從ひ、それは日本水雷戰隊の一隊と約九千六百噸の磐手、出雲、八雲、淺間が低速を以て航行し來るものなるを知つた。コロンビヤは比較的最近の建造に拘るので、同じ八吋砲にしても日本のものより優勢であるが、裝甲防禦は皆無で、僅に彈丸の破片を防がんが爲に砲塔を有するに過ぎない、然も此等は乘員に對して眞の防禦となるよりも寧ろ敵彈を炸裂せしむるに好都合である。併しながら此等の缺點も同艦に

して若し固有の全速力三十三節を出し得たならばバーカー艦長は意とせなかつたであらふ、何となれば此優越なる速力を利用して己の欲する儘に射距離を撰擇し得べく、或は又、戰鬪を爲すべきか、之を回避すべきかを任意に爲し得るからである。然るに不幸にして此損傷せる巡洋艦は僅に全速力の半ばを出し得るに過ぎなかつた。茲に於てバーカー大佐は自艦の危險なるを知り、其驅逐隊を放つて今やバゴバゴより來航の途上にあるアツブルトン隊と觸接を保持せんことを命じた。

日本艦隊は米艦を見るや數隻の驅逐艦を分派して陸軍輸送船隊の掩護に任ぜしめつゝ全速を以てコロンビヤに接近して來た。バーカー大佐は射距離の利益を占めんとして出來得る限りの速力を以て東方に進み、之に反して日本艦隊は距離の短縮と共に其陣形を單縱陣より單横陣に變じ前部八吋砲を使用し得る樣にした。風上側に航行しつゝあつた日本の水雷戰隊は味方巡洋戰隊の進路を横斷して烟幕を張つたが、然もコロンビヤ主

砲の集中砲火は吾妻に大損害を與へ、其一彈は甲板を穿貫して接戰用に準備せる火藥の一群に引火し、爲に吾妻は爆發と火災の爲めに、修理成る迄は一時戰線に立つを得ざる狀態となつた。斯くて吾妻は後方に落伍し、戰鬪殆んど終る迄戰列に加はらなかつた。

日本の巡洋艦は其乘員の大部が、恐らくは豫備員と訓練不充分なる若水兵の始め、射擊の効果は一時は擧ら無つたが、今や漸次に射距離を發見し、コロンビヤに追及して其六吋砲臺をも戰鬪に加はらしめた。然もコロンビヤは優秀なる砲火指揮機と一層有力なる砲とを以て暫時は有利の位置に在つた。不幸にして此利點も日本の飛行機が彈着の觀測に任じ、齊射の彈着を一々報告するので、日本軍の射擊が一層精確となるに至つて消滅し、間もなくコロンビヤは多數の敵彈の爲に掃射された。今やコロンビヤは憐むべき狀態となり、其砲の半數は破損して用ふるを得ず、砲員は負傷せざる者を以て幾度か交代せしめたので、迅速にして正確なる發射は素より之を

期することが出來なかつた。加ふるに火災は三ケ所に起り、死傷者は益々增加して今は軍醫官の力も之を如何ともする能はず、負傷者の或者は更に烟の中に苦悶せざる可らざるの慘狀となつた。艦長バーカー大佐と數名の士官は磐手よりの齊射彈の爲に既に戰鬪の初期に戰死し、先任將校アイサークス少佐は比較的暴露されざる場所より艦を指揮したが、これ又遂に砲彈の破片により重傷を負ふた。少佐は水線下の彈孔より浸水しつゝあるも喞筒の力にては如何ともする能はずとの報告を受くるや、艦の沈沒前に何人か降伏を提議せんことを恐れて、海水弁を開き艦を自沈せしむべき命を下した。然るに之より獨き日本の司令官はコロンビヤの砲火衰へ、且其大破の狀態にあるを見るや、麾下驅逐隊に信號して襲擊を決行せしめ、且此襲擊に際し米艦砲手の注意を他に轉ぜしめんが爲め、彈着觀測に任じつゝあつた八個の飛行機にも同樣攻擊を命じた。此等の飛行機は頗る多數の爆彈を投下したが、僅に四個のみ米艦に命中し、然も其損害は輕微であつ

た。コロンビヤは今や救ふ可らざる狀態に在るにも拘らず尙も抵抗を繼續して來襲する日本の驅逐隊に遲きも照準正確なる射彈を送り、爲に其一彈は橘の汽罐室に命中して同艦を戰鬪不能の狀態に陷らしめた。然もコロンビヤの努力も遂に終りを告げ、四個の魚雷命中し、日本の他の驅逐隊が來攻する前に將に沈沒せんとしつゝあつた。茲に於て加留間提督は令して砲火を中止せしめ、驅逐隊に命じて生存者を救助せしめたが、日本人は以前の戰爭に現はしたると同樣の誠實を以て生存者の救助を努め爲に多くの者は艦の沈沒前に救出された。

斯くて加留間提督は損傷艦船の應急修理を行つた後訓令に從つてサモアへの遂征を繼續し、驅逐艦橘は一の運送船をして之を曳航せしめた。然るに翌日に至り米軍の航空母艦ライトより放てる數個の偵察機と會し、附近に米艦あるを知りて他の海戰避け難しと見るや、橘の貴重なる物品は總て之を他艦に移し、其乘員も之を他の軍艦に配乘せしめた上、海水弁を開い

て自沈せしめた。

次で起つた海戰は米國の指揮官が如何に戰術の實施に巧妙であつたかを示す範例として永く靑史に遺さるべきものである。アッブルトン大佐は敵と近接するに先ち、空中を征服せんとして麾下の全飛行機（アルバニーより二機、ライトより十二機）を集中した、而して此等は何れも大膽なる空中戰を敢てした後、米軍の二機が射落さるゝ時迄に空中は全然米軍の支配する所となつた。

玆に於てアッブルトン大佐は其八吋砲を以て敵と戰ひつゝ日本艦隊の一翼を擊破せんとして進んだ。米艦は速力に於て約十五節優れて居るので、之を利用して敵の近接運動を妨げ、爲に日本軍は未だ砲戰距離に入らざるに既に續々命中彈を受けた。アッブルトン大佐の戰術は味方の飛行機が何等敵の妨害を受けずに彈着觀測を爲し得るを利用して、日本の各巡洋艦を各三門宛の八吋砲を以て射擊せしめ、斯くして日本軍の砲戰距離外より萬遍なき然も正確なる射彈を送るにあつた。

日本の司令官は倖僥により此危機を脫せんとして、敵の攻擊を堅忍に忍耐しつゝ、敵の避退運動に對して接近猛擊せんとする無益の努力を固執するを避け、依然東方への針路を保ちつゝ麾下軍艦をアルバニーと運送船隊との中間に置いた。夜暗の到來若し近かりせば戰運の挽回或は之を期し得んも、今は日本軍の狀態は絕望的となり、艦隊の轉回又は變針も米艦の規則正しき齊射を永く避くることは出來ない、將又麾下驅逐隊の張つた烟幕も豫期した結果を收むるを得ないので、間もなく四隻の日本巡洋艦は何れも米軍の無慈悲なる打擊の効果を感ぜざるを得なかつた。

加之ならず加留間提督は此時更に他の新たなる危險に當面した、蓋し提督は米軍の驅逐隊が日本軍の一翼を迂回して運送船隊に近かんとしつゝあるを見たのである。玆に於て提督は麾下驅逐隊に命じて之を擊攘せしめたが、米軍驅逐隊は日本のものより頗る優勢であるので、若し巡洋戰隊を

以て之を援助せざれば却つて敵の爲に擊攘さるゝの恐れがある。斯くて兩軍の驅逐隊は玆に接戰を試み、日本側は二隻を喪ひたるも、米軍側は沈沒艦なく、遂に此大艦の砲戰中米軍驅逐隊は日軍驅逐隊を突破して其運送船隊に近づき、一隻の運送船を雷擊したので、加留間提督は益々苦悶せざるを得なかつた。

提督今や麾下驅逐隊を救出せんとして注意を之に集注しつゝある間にアルバニーは其位置を變じて運送船隊を砲擊し得る所に進んだ。此等の運送船は何れも甲板上に陸軍兵を滿載し、然も此等は海戰の狀況如何にと注視しつゝあつたが、數分にしてアルバニーの砲火を蒙り、二隻の運送船は重大なる損害を受けて浸水し、爲に艦隊の速力を尙一層減少せしめた。玆に於て加留間提督は救助のため驅逐艦を派遣し、又四隻の巡洋艦を以て運送船隊の周圍を取圍み、以て敵の攻擊を免れしめんとした。然も斯るは却て米軍の射擊を容易ならしむるの結果となり、日軍側は續々として損害を

蒙つた。即ち吾妻と出雲は忽ちにして米艦の掃射を受け、前者は前部に火災を起し、後者は中央の烟突を吹き飛ばされた。次で八雲は突如として黑烟に包まれ、同時に耳を劈くばかりの爆音が海上に鳴り轟ひた。烟消へて同艦を見れば船體は二つに折れ、明かに火藥庫が破裂したものと思はれた。今や殘れるものは旗艦磐手のみとなつたが、間もなく同艦の大檣は敵彈の爲に倒れ、艦尾に落ちて舵機にからまり、圓航しつゝ運送船隊の方へと突進した。之を見たる米國驅逐隊は突進して之が襲擊に向ひ、之を妨けんとする日本驅逐隊と接戰しつゝ、其二隻を喪ひしも屈せず、遂に磐手に近ひて魚雷を發射し、爲に磐手は命中せる一發の魚雷の爲め停止しつゝ一舷に傾き始めた。

今やアップルトン大佐は漸次に敵に接近し、射距離の短縮と共に射彈の命中は益々精確となつた。此の恐るべき砲擊に對して出雲は充分に應戰するを得ない、蓋し燃へつゝある吾妻よりの烟は米艦を視認するを得ざら

しめ、爲に射擊を妨げたからである。然るも尙日本軍艦は古來よりの美事なる傳統的精神に從ひ最後迄砲戰を繼續し、明かに沈沒しつゝある磐手の如きも僅かに殘れる數門の砲を以て射擊を續けた。此磐手よりの一彈はアルバニーに對して唯一の重大なる損害を與へ、前部の船體を穿貫して多數の死傷者を出し、又浸水を生ぜしめたが、そは戰鬪終る迄之を修理するを得なかつた。然るに續ひて放たれたアルバニーの齊射は續々として敵艦に命中し、爲に出雲の砲火は間もなく沈默した。數分にして同艦も亦烈しき火災に罹り、襲擊せんとて突進した米國驅逐隊の魚雷攻擊を受けた。此襲擊中米國驅逐艦の數隻は日本軍の砲擊により沈沒したが、此等の驅逐艦が魚雷を發射し盡す迄には出雲と吾妻は何れも魚雷命中して最早重大なる抵抗を爲すことが出來なかつた。日本人は降伏を勸告されたが之に應じないので、今は米艦は間もなく沈んだ出雲、並びに全艦火災に包まれて火焰の苦みより遁れんと海中に飛込んだ吾妻の乘員を全力を盡して救助した。然も吾妻も亦幾許ならずして旗艦磐手を殘しつゝ海中深く沈んだのであつた。

殘れる唯一の日本旗艦磐手は右舷に傾斜しつゝ沈沒に垂んとして居たが、左舷側の端舟は既に破壞されて其用を爲さず、右舷側は海水今はレール迄來つて此側の端舟のみ使用することが出來る。然も司令官旗は尙も前檣に翻つて居た。茲に於てアップルトン大佐は敵の抵抗を受くるも大なる損害を與へ得ずと認めて救助の爲め端舟を送り、此等の端舟は恰も磐手の沈沒當時に到着して負傷者の大部を收容した。此救助せられた日本人は約四百名に上り、日本の司令官加留間少將も亦腕に負傷して其中に在つた。提督は敗戰に意見鎖沈し、寧ろ死せんことを望んだが、同樣の境遇に於て提督以上の措置を取り得たかは頗る疑問である。

殘るは運送船の始末である。嚮に米軍驅逐隊の魚雷を受けた運送船は沈沒に垂んとしつゝあつたので、低速の爲め漸く戰場に到着したライトを

して之を曳航せしめた。此等沈没せんとしつゝある運送船内の陸兵は之を他の運送船に移したが、加留間提督は各船を訪ふて此上の抵抗の無益なるを説明し、降伏を勸告したので、二隻の運送船は其旗を撤し、米國海軍士官の指揮下に服從せんことを承諾したが、殘りの二隻は頗る頑固で之に應じなかつた。後にて判明せる所によれば、船内に在る熱狂せる陸軍士官の一部は、若し白旗を揭げて降伏するに於ては之を射殺すべしと威嚇したのである。然るに此等二隻の運送船は夜暗の到來に乘じて遁走の恐れがあつたので、アッブルトン大佐は總て救命器を取付くべしとの警告を與へた後魚雷を以て之を雷沈せしめた。斯くの如く米軍は有ゆる仁慈的行爲を爲せるも日本人の一部は之に應せなかつたので、此雷沈された二船の沈没は人命の重大なる損失となつた。

殘れる七隻の陸軍運送船はバゴバゴに入港せしめ、總ての陸兵は之を數團に分ち米國への輸送準備が整ふ迄嚴重なる監視の下に置かれた。然る

に之と同時に捕虜はッッイラ島總督に對して大なる憂慮の種となつた、何となれば此數千の捕虜は釋放されて上陸を許す時は直に同島を蹂躙するの憂があるからだ。茲を以て之が監視に任ずる海兵隊の有する小銃以外の兵器は一時之を軍艦に移し、以て重大なる抵抗を爲し得ざらしむる樣にした。

此戰場の附近にある島嶼の名を取つてロッモウ沖の海戰と名けた此海戰の戰果は之を左の如く要約することが出來る。

（日本側の喪失）巡洋艦磐手、出雲、吾妻、八雲、驅逐艦十隻、陸軍運送船十隻

（米國側の喪失）巡洋艦コロンビヤ、驅逐艦五隻

兩軍に於ける人命の損失は何れも重大で、日本艦隊は運送船隊を合して約三千に上り、米國側は主としてコロンビヤや水雷戰隊の戰死者で合計七百以上であつた。

此海戰は米軍にとりて完全なる勝利で、然も始めての大勝であつたので

其重要の度は何物も之を比肩するを得なかつた。アツブルトン大佐は開戰初頭作戰部次長として馬尼剌艦隊を布哇方面に移さんことを建言して上長の容るゝ所とならず、責を引て辭任した人であるが、今や大佐は此艦隊の全滅に對する責任を負ふよりも寧ろ這回の大勝に依て時代の英雄と崇拜された。大佐は其特有の謙讓を以て上長より送れる祝捷の電報を承認し、且コロンビヤの代りに他の巡洋艦を派遣されて依然其任務を繼續せしめられんことを乞へるに對して、米國海軍省は三隻の巡洋艦を增派して大佐の指揮下に置くことを報じたが、此等はトロイ(アルバニーの姉妹艦)メンフイス、ミルウオーキー(七千五百噸のオマハ級)であつた。尙又海戰の結果沈沒、損傷を蒙つた驅逐艦の代りには二個の驅逐隊が新たに增遣された。同時に亦大佐は普通の先任順序による常例を破つて特に少將に陞進せしめられた。思ふに此の陞進は米國の歷史上に其例を見ざる最も人氣ありし物で、斯く先例を破つて此の勇敢なる指揮官に破格の恩典を與へた

政府の措置は疑もなく一般の勤迎する所であつた。

第十五章　日本軍のダッチハーバー侵襲

ロツモウ沖海戰の悲報に接した日本の不安――ダツチハーバーに於ける日本軍の登襲――天候險惡の爲め空中作戰の失敗――鈴木中佐勇ましくダツチハーバーに突入す。――米國巡洋艦チヤーレストンの沈沒――鈴木中佐捕虜となる――米國巡洋艦日本の濠州との貿易を阻害す――米國假裝巡洋艦の歐洲方面に於ける貿易破壞戰

一、日本軍のダッチハーバー侵襲

モツモウ沖の海戰に於て加留間提督の艦隊全滅せるの報に接するや、日本に於ては恐慌に頻した一種の感動が起つた。言ふ迄もなく政府は擊沈された日本軍艦は何れも老朽舊式のもので、米軍損害の程度も未詳なるを諷刺して、此海戰の結果の必ずしも重視するに足らざるを全力を盡して輕

視せしめんとしたが、此等の辯解が輿論を滿足せしめざるを見るや、日本の當局者は例に依て新たなる遠征を計畫し、依て以てサモア遠征の悲慘なる失敗より起れる民衆の注意を他に轉向せしめんとした。茲に於て日本の軍令部は充分に事態を攻究した後、米軍が日本に對して第二回の攻擊を試みると豫想し得べき作戰の根據となるべき根據地を攻擊することを最良策とするに一致した。當時米軍のアラスカ方面に於ける活動の眞相は情報未だ不完全なりしも、其餘りに頻繁なると持續的なる爲め、攻擊を行はんとすることは眞實疑なしと考へられ、從て如何なる場合に於ても米軍が之に關して如何なる兵力を以てすべきやを知ることは必要であつた。ウラナスカ島のダッチハーバーに數隻の軍艦あることは日本の諜知し得る所なりしも其數不明にして其中には數隻の主力艦さへ現在せりと信ぜられたので、注意の焦點は該港に集り、遂に之を攻擊の目標とするを適良なりと考へた。

日本の軍令部は永き論議の後之に要する兵力を決定したが、之に依れば潜水艦はベーリング海に於ける航海の困難なると、特にアリューシャン群島附近には海圖に記載なき數個の暗礁があるので之を用ひざることゝした。加之ならず同方面は霧の襲來頻々であるので、アリューシャン群島附近に近かんとする者は非常なる注意を要するものである。以上の諸理由とダッチハーバー方面に在る米軍兵力の精確なる情報に接せないので寧ろ高速の軍艦を使用するを得策と考へたが、されば とて危險を冒して最新式のものを使用せんとするの考へも無つた。茲に於て其中間策として十年以前に建設された九千五百噸、二十五節の航空母艦鳳翔を飛行機の移動根據地として使用し、之に十二機の爆彈機を積み、又敵機の妨害に對抗せしめんが爲には、他に十二機の戰鬪機をも隨伴せしめた。次に鳳翔の護衛艦隊としては四隻の輕巡洋艦多摩、球磨、木曾、北上（五千五百噸の姉妹艦にして五吋五砲を有し、速力三十三節）並に三十四節の驅逐艦十二隻を用ふる

とゝした。此枝隊の總指揮官は德島中將で、鳳翔を旗艦とし、上原少將は巡洋戰隊を指揮し、又水雷戰隊司令官には奥波大佐之に任ぜられた。此等の枝隊は青森灣內の一要港大湊に集合し、三月三十日を以て同地を出で、四十八時間後には千島列島の北東端なる柏原泊地に到着する豫定であつた。

然るに此等高緯度地方の特徴たる暴風は頻々として起り、爲に枝隊は襟裳岬を迂回したる後は屢々險惡なる天候や山なす大浪と戰つて其豫定を變更するの餘儀なきに至つた。茲を以て枝隊は數時間山の如き浪に翻弄されたる後、德島提督は速力を減じて西方に變針せしめ、國後海峽を通過して千島列島の風下側を航過せんとした。此航路は豫期した效果を收め、オコツク海方面の海上は太平洋方面よりも靜穩であつたので航程は著しく進んだが、それでもパラムシロ泊地への到着は豫定よりも數時間遲れた。蓋し德島提督は天候の爲め麾下諸隊の觸接を保たんとして二回碇泊せしむるの必要に會した爲である。パラムシロ泊地に於て枝隊は小修理を行ひ

つゝ天候の回復を俟ち、二日間碇泊した後更に出港した。然るにベーリング海に入るや、茲に亦濃霧に會し、時々晴間はありしも二日間繼ひた。斯くて枝隊はコマンドルスキーを遠く迂回しつゝ千島列島の最西端にある島嶼を避け、ウラナスカの北東なるアクタン島沖に四月六日の正午頃到着する豫定を以て針路を定めた。此の針路は米人に察知せらるゝこと最小なりと考へられた爲である。然るに此の霧多き天候は敵の不意に乘ずるには便利なりしも、航海上に非常なる困難を感じ、且今や正に攻擊を實施せんとして飛行機の行動に大なる障害を與へた。

枝隊は今や進んでプロビロフ島の南西約五十浬に達した時突如として霧中より一船が現はれた。これ卽ち米國の沿岸警備船ベヤー號で千八百七十四年に建造された木造船である。元來同船は捕鯨貿易用に造られたもので其構造特に堅牢、且氷海の航海にも適する樣にしてあつたので、幾度か廢棄の議ありしも尙保存され、依然として此の遠隔の海面に於ける警備

に任じて居た。之を見たる日本枝隊の先頭にあつた六隻の驅逐隊は直に降伏を勸告したが、ベヤーは僅に三門の三吋砲を有するに拘らず之に從ふことを拒んで日本の驅逐艦に向ひ砲火を聞ひた。日本人は斯樣な貧弱な汽船に砲彈を徒消するを吝んで、最近距離にあつた數隻の驅逐艦は機砲を以て應戰し、爲にベヤーの乘員は忽ちに掃射され、遂に日本軍に捕獲された。此種の捕獲は此戰爭の全期間を通じて唯一のものである。

ベヤーを捕獲した日本の指揮官は、同船の姿がベーリング海方面に在る總ての者の知悉する所であるから、之を使用するも米人に怪まるゝこと無しと想像して之を利用するに決した。茲に於て英語に堪能なる士官の下に捕獲員を編成して之に乘組ましめ、甲板上に在る者は總て軍服の上に油麻布製合羽を着用せしめた。

アクタン島に近づく迄枝隊の行動を隱蔽した霧は今や南東の風に吹掃されて晴間となつたので、鳳翔は豫定計畫に從ひ、愈ぎ其飛行機を飛行せし

むる爲め發動機の工合を試みた。此鳳翔の飛行甲板より飛行する際、一の爆彈機は椎進機を損じて海中に墜落し、他の機は滿足に飛行してウラナスカ方面に去つたが、時に風力益々加はり、時雨計も亦連りに下降した。其後二時間を經て此等の飛行機は三々伍々歸來したが其數僅に十三機に過ぎなかつた。然も此時風力は益々加はり、吹雪も亦烈しひので、此等日本の飛行機が一機にても無事に歸來し得たのは頗る不思議に思はれたが、事實此等の飛行機は無電方向探知器を使用したので、降りしきる雪中をも歸途を發見することが出來た。此等飛行機の報告は何れも大同小異で、視界狹少なるため大部はダッチハーバーを發見するを得なかつた。而して其同港に到着し得たものは僅に四機のみであるが、港内にある艦船の數に就ては何れも明諒ならずして、中には籠檣を有する戰艦と思はるゝ軍艦も數隻あつたと云ふに過ぎなひ。此等の飛行機は軍艦や陸上に對して數個の爆彈を投下したが、其損害程度は不明である。然も一機は爆彈投下機永結して

遂に之を投下するを得なかつた。玆を以て此空中攻擊は全體より見れば失敗で、之により喪つた十個の飛行機は、舊式の警備船ベヤーを捕獲したことに依て之を償ふを得なかつた。

日本飛行機の襲擊がダッチハーバーに與へた損害は輕微にして論ずるに足らなかつたが、此襲擊ば全く不意打であつた。爆彈の多くは海上か海岸に落下し、一の倉庫は爆破したが、然も其中には軍事上重要なるものは無つた。其他哨戒に任じつゝあつたトロール船の一隻も亦船首に損害を受けた。當時天候險惡にして風は暴風と變じたので、米軍の飛行機は之と戰鬪する爲め飛行するを許されなかつた。然るに此不活動は其後非難の焦點となつたが寧ろ根據ある策であつた。日本の飛行機が爆彈投下を終るや間もなく、同地方特有の恐るべき大風雪起り、爲に多數の日本飛行機を喪失せしめた。此等墜落した飛行機の一はウラナスカ島の内地で破壞し、其後數月にして機體の殘片は操縱者や觀測者の死體と共に發見された。他

の機はウラナスカ島の反對側なるチエルノブスキー港沖に墜落せることが漁船に依て發見された。されば當時の天候狀態では飛行は殆んど不可能であつたので、若し米軍の飛行機にして追擊を命ぜられたならば、恐らくは總てが不幸なる災厄に遭遇したに違ひない。

徳島提督はダッチハーバーに有效なる打擊を與へた後は直に本國の根據地に歸還すべき命を受けて居た。提督は全力を盡して其豫定計畫を實施したので、今は訓令に從ひ主隊を率ひて直に歸途に就ひた、但しアクタン泊地（以前は捕鯨船の集合地である）にはベヤーと驅逐艦磯風、山風を殘し、天若し日本人に幸せば有效なる結果を得べき冒險なる作戰を行はしめんとした。斯くて徳島枝隊はコマンドルスキー島迄は天候特に險惡であつたが、該島附近に達するや風止み、代つて濃霧の襲ふ所となつた。此霧中の海峽通過中各艦は分離し、驅逐艦天津風は木曾と衝突して沈沒し、數名の死者を出した。各艦は風浪のため何れも大なる損害を蒙り、憐むべき狀態に

於て大湊に歸着した。斯くて茲にベーリング海の恐るべき天候は米軍側に對して有力なる味方となつたのであつた。

アクタン泊地に殘つた日本軍は、天候險惡なる爲め出動不可能なる數日間の碇泊期間を利用して、ベヤーの甲板上の諸裝置に種々なる小改裝を加へたが、其中重要なるものは船の中部に一對の魚雷發射管を裝備した事である。此魚雷發射管は徳島司令官と共幕僚に依て準備された計畫の重要なる點で、枝隊の大湊への出發前巡洋艦より之を移したものである。斯くてベヤーは天候の回復を俟て二隻の驅逐艦に護まれつゝダッチハーバーに向て出發し、四月十一日の午後同港沖に到着した。此二隻の驅逐艦は港の數浬沖迄之を護衛し、ベヤーが港内に在る間は沖合にありて港内米艦の行動に乘すべく、又ベヤーの乘員を收容するを命ぜられた。但しベヤーの無事歸還は到底豫期するを得ないから、乘員の救助は殆んど起ることあるまじと考へられた。

此計畫は始めは何等の故障なしに進み、ベヤーがスピットヘッドと其反對にあるロッキー・ポイントより延長する暗礁間の航路を取りつゝダッチハーバーに入港した時には哨所よりは何等怪まれなかつた。ベヤーは無線電信の問答を豫防する爲め、大檣を取除け、後檣は船側の高さ迄に切倒し、リギンは亂れて恰も最近の險惡なる天候に依り空中線は吹き飛ばされたかの如く見せかけた。但し旗旒又は發光信號に對しては同船備付けの信號書を沒收したので、之に應ずることが出來る。時に港內は濛氣深く、明かに艦型を識別するを得なかつた。然るに玆に危機は突如として起つた、米國巡洋艦チャーレストンは天候の爲め數日間、同港に碇泊した後今正に出港しつゝあつた。同艦がベヤーと行過ぎんとするや、ベヤー指揮官鈴木中佐は二門の魚雷發射管に發射を命じた。此二個の魚雷は何れもチャーレストンに命中して汽罐及機械室に穴を穿ち、爲に米艦の速力は減退した。米艦は斯く味方と信じたベヤーより不意の攻擊を受けて混雜したにも拘

らず、迅速に砲火を開き、濛氣が敵を掩ふ迄に二三發を命中せしめた。此巡洋艦は機械室に滿水せる爲め發電機を使用するを得ずして、無線電信を以て警報を傳ふることが出來なかつたものと見へる。然るに魚雷の爆音と發砲とは米軍に警戒を與へ、ベヤーが尙も進んで港內に入るに及んで一隻の發動機哨艇に誰何された。鈴木中佐は嘗て米國軍艦のボーイをして居たので英語に巧みなるを利用し、流暢の語を以て、ベヤーは大風雪の爲めに檣を折られた事、チャーレストンは恐らく機雷に罹りたるものゝ如く、危難信號の爲に發砲しつゝあること、ベヤーは浸水大なるを以て自ら同艦を救助するを得ざることを述べて、巧みに哨艇を欺ひた。斯くて哨艇の士官は全く此日本人に欺れてベヤーの困難に同情し、別れを告げつゝ同船の通航を許したが、後にて事實の眞相を知れる時、彼が如何に口惜がつたかは想像に餘りある。

鈴木中佐はベヤーが半ば沈沒しつゝある樣に巧みに見せかけて尙も港

内指して進み二大艦の間に突進して碇泊した、此二大艦は大なる籠檣を有するより推して日本人は之を戰艦なりて思つたが、不幸にしてそは事實で無かつた。之より嚮き米國海軍省は不時の觀察者や間諜を欺かんが爲めに遠航に適せざる老朽汽船の數隻を集め、之に烟突、籠檣、木造砲塔、砲並に上部構造物等を假裝して恰も之を戰艦アーカンソウ、ユータ、及ニューヨーク型と寸分違はざる樣に改裝した。されば此濛氣深き時に於て鈴木中佐が之に欺かれたるは當然で、彼は此二艦に發射管を差向くるに當り、米國海軍の海上武力に一大打擊を與へ得る確信を以て之を爲したや疑ひない。ペヤーは戰艦と思はるゝ二大艦の中央に碇泊し、然も其距離は半鏈以内であつたので、發射せる四個の魚雷は何れも目標に命中した。魚雷爆發の力は甚だ大にして、千七百噸のペヤーの如きも二個の錨を投じて碇泊せるに拘らず、船體を持揚げられ錨鎖は切斷し、假裝せる一戰艦に舷側を衝擊せしめた程である。之と同時に一の籠檣は崩れて破片はペヤーに落下し、甲板上

にありし者を傷け、船長鈴木中佐も亦負傷した。茲に於て數隻の哨艇は直に召集されて一部は沈沒しつゝある假裝戰艦の乘員を救出し、他の者はペヤーの捕獲に從事した。鈴木中佐は今は降伏するの外なかつたが、然も其雷沈したものが眞の戰艦に非ずして軍事上何等の價値なき老朽商船に四發の魚雷を消費したことを知つた時如何に失望したかは察するに難くない。中佐が冷靜と技倆とを以てペヤーを完全にダッチハーバーに導きたることに就ては米軍側より大なる賞讃の辭を浴びせられたが、然も中佐の心情は之に依て慰めらるべくも無かつた。

驅逐艦磯風と山風は數時間ウラナスカ灣外に待合せたがペヤーが歸來せぬので、遂に日本へ向ひ歸還の途に就き、海軍省に報告するにペヤー入港後數發の魚雷の爆音を聞きしも、結果如何は之を知ることが出來なかつた旨を以てした。米國海軍省は之に就ては一切秘密に付し、唯だ簡單なる公報を以て、チャーレストンは濛氣中に狹水道を通過せんとして暗礁に乘上

けた旨を發表した、然も之と同時に同艦には魚雷命中し、他の重要な軍艦二隻も同時に雷沈されたことが日本側に漏洩する樣にした。此情報は獨の二隻の驅逐艦の報告と符合するので熱烈に日本政府に歡迎され、東京の新聞紙上には特別公報として掲げられた。鈴木中佐は其勳功に依り功三級金鵄勳章を授けられ大佐に陞進した。實に大佐が收め得た實際の戰果は兎も角として、其行爲は確に之を受くるの價値があつた。

之を米國側より見るにチャーレストンの喪失は日本人に傳へられた誤報により充分に之を償ふことを得た。此時より以來戰爭終結時に至る迄多くの日本人は二隻の米國戰艦がダッチハーバーにて雷沈せられたと確信し、以前よりも一層强くアラスカ方面より米軍の攻擊を受くるものと信ずる樣になつた。

玆に附記すべきはベヤーは其損害大なりしも沈沒するに至らず、其後軍用運送船として依然ダッチハーバーに殘された。

二、日本の濠洲及歐洲航路に對する米軍の通商破壞戰

此時に當りアッブルトン少將の指揮する快速巡洋戰隊も亦連りに活動しつゝあつた。此熱誠なる提督は今や其麾下に一層大なる兵力を得て、其受けたる第二段の任務たる日本の濠洲との貿易を阻害することに從事した。即ち此の目的に向てはメンフキスを派遣して、トーレス海峽を通過して日本に向ふ總ての日本商船を差押へしめ、二週日の終には其姉妹艦ミルウオーキーをして之に代らしめた。此通商航路上に於て一二隻の商船が捕獲されたとの報は日本の商業界に恐慌を來さしむるに充分で、之が爲め海上保險率が絕對禁止の標準に迄暴騰すべしとの米國側の豫想は的中し爲に日本政府若し斯る際に於ける海上保險市場の困難を豫期して、政府の手により保險計畫を發表せざりしならば、其結果は測り知る可らざるもの

があつたであらふ。

此のメンフキスとミルウオーキーの協同作戰は千九百三十二年の三月より四月に亘り約一ケ月以上に亘つた。此間兩艦の爲に拿捕された日本商船は十三隻以上に上り、內三、四隻はバラストを積んで濠洲へと向ふものであつた。此等拿捕船の多くは羊毛、冷肉、獸皮、バター、穀物及多少の鉛、銅の如き貴重なる積荷を積んで居た。アツブルトン提督は中立國旗の下に在る海上私有財產に對し、之に干涉を爲さゞる樣麾下艦長に訓令したが此訓令無りせば日本へ向ふ尙多量の積荷が拿捕せられたに違ひない。海軍作戰局は中立國旗の下に在る積荷の干涉は、忠實なる中立を便宜とする米國にとり、中立國との衝突を惹起せんことを恐れて居たので、ア提督の如上の意見は海軍作戰局の嘉納する所となつた。

日本人は此の通商破壞に對せんが爲め貿易品の大部を中立國の汽船に積込み、日本の商船を用ふるものは濠洲の西部を迂回し、パース、アデレード、

メルボルンに至る航路を取らしめた。此航路は日本の海上貿易路がトーレス海峽を通過するものに比し、其阻害一層困難なると、當時一層重要なる作戰を斷行するの必要上利用し得べき巡洋艦は多々益々辨じたので、茲に濠洲方面に於ける米國巡洋艦の通商破壞戰は之を中止することゝなつた。此の一層重要なる作戰とはトラック島に對する遠征を指すものである。

此の日本の濠洲との海上貿易を阻害せんとする短期の作戰中記述するに路る只一の例は蘇陽丸を捕獲せんとせる一事である。該船は日本郵船會社に屬する重量噸數七千噸の汽船で、沿岸航路を取りて航行中メンフキスの發見する所となつた。茲に於て米艦は停止せしめんとして發砲したが、同船は之に應ぜず、ヨーク岬沖の叢島中に向針した。メンフキス艦長は之を停船せしめざる時は同船は遂に濠洲の領海內に入らんことを恐れて、舵機を損ぜしむるの目的を以て船尾を砲擊せんことを命じ、爲に船尾柱は一度ならず命中彈を受けた。然も蘇陽丸は之に屈せず最大速力十五節に

近き速力を以て遁走し、依然前針路を固守した。茲に於て米艦は優速を利用して尙も之を追及し、更に數彈を放つたので汽船には數名の死傷者を生じ、且船體に損害を受けた。斯くて蘇陽丸はアフターピークに浸水を生じ、之が爲め速力を減ぜらるゝの憂ひがあるので、日本の船長は針路の前方にある淺瀨に直進し、數分にしてマルグレーブ島を距る約三浬の砂洲へ乘せ上げた。米艦は之を見るや尙も接近して降伏を强ひんとしつゝあつたが、此の時砲聲を耳にした濠洲驅逐艦タッツウは木曜島より急航し來り、蘇陽丸の位置が濠洲領海內の淺瀨であるので之を犯すことを得ざる旨を米艦長に傳へた。斯くて此の日本汽船は拿捕を免れたが、それにしても之が爲には多大の費用を要じたのであつた。

若しそれ歐洲方面に於ける通商破壞戰に至ては之と趣を異にした。讀者の記憶するが如く、戰前米國海軍省は快速巡洋艦の建造を幾度か議會に提出したが、常に其協贊を得なかつたので、巡洋艦の隻數は一定の數に達せ

ざること多大であつた。茲を以て歐洲方面の貿易破壞戰には巡洋艦を用ふるを得ないので、快速客船の數隻を撰み、之に武裝を施し、假裝巡洋艦として之を使用することゝした。而して其編成は始めには之を一戰隊に編成せんことを提案せられたが、各艦は準備完成次第個々獨立に受持區域に就き、訓令の如何によりては常に共同作戰を爲し得る樣一戰隊に編成し得る準備を整へ置くべき了解の下に派遣された。其乘員は成るべく固有の者を用ひ、士官は豫備役の海軍士官を乘組ましめ、艦長は現役の大中佐を、又大船の副長には他の現役士官を用ひた。其他數名の熟練なる砲手を各船に配して砲員の訓練に當らしめた。之に裝載すべき砲は通常舊式の六吋又は五吋速射砲を以てし、或艦には交換の爲め軍艦より卸した之より口徑稍大又は小なる砲を以てした。其他甲板や隔壁は發砲の劇動に堪ふる樣强固にし、又別に彈火藥庫を急設した。

歐洲方面と極東との間の海上貿易に從事する日本の商船中、此等米國の